より生じて來る、此妙用が他の生命に向へば不殺生と爲り、他の財物に對すれば不偸盜と爲るといふ樣な鹽梅に、任運騰々（こゝろ）心の欲する所に從て矩を踰へざる境界と爲ります、こゝを御開山は「水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道は忘れざりけり」と御詠じ遊ばされてあります、行くも返るも煩惱執着の跡は無い、去れども道は我等の脚下に在りて忘れんと欲しても忘るべからざるものである、手を擧ぐれば孝順と爲り足を移せば慈悲と爲り、寢ても起ても轉んでも道ならざるは無く德ならざるは無い、これぞ眞の活佛教の活神通といふものであります、然るに我等の今日はどうでありませう、事に依ると反對に、手を擧れば煩惱と爲り足を移せば惡業と爲る樣になりたがつてならぬ、夫故一時も早く此御戒法を受け奉りて、即證佛位の勝果を成じ、利生報恩の妙行を現はして、身口意三業の上に釋迦牟尼佛の名號を憶念し稱名し奉行せらるゝ樣、一心不亂に信力を增進せられたいものであります。

參考

○大衆心に諦に信せよ、汝は是れ當成の佛、我は是れ已成の佛、常に是の如きの信を作せは、戒品已に具足す、一切心有る者は、皆應に佛戒に攝すべし。（梵網經）

○明人忍慧强くして、能く是の如き戒法を持せば、未だ佛道を成せざる間に、五種の利を安獲すべし、一には、十方の佛憫念して常に守護し玉ふ、二には命終の時、正見にして心歡喜あり、三には生々の處。諸の菩薩の友と爲る、四には功德聚あつて戒品悉く成就す、五には今後世に性戒福慧滿つ。（仝）

○宜しく大勇猛を發して、諸佛の淨戒に於て護持せんこそ、明珠の如くなるべし、過去の諸菩薩も已に是の中に於て學しき、未來の者も當に學すべし、現在の者も今學す、此れは是れ佛の行處にして、聖主の稱嘆する所なり。（仝）

○我が思ふことも言ふことも、あしきことあるべき故に、まづ佛道に合ふや否やとかへりみ自他の爲に益ありやいなやと能々思ひかへりみて後に、善なるべくんば行ひもし言ひもすべきなり、行者若しかくのごとく心を守らば一期佛意に背かざるべし。（承陽大師）

○衆生從本以來佛性を具ふと雖ども日に用て知らず、釋迦老師成道の端的活眼を開て之を覩れば則ち草木國土悉皆成佛なり、六祖曰く悟れば則ち衆生是れ佛、迷へば

則ち佛是れ衆生と、生佛元隔なし迷ふが故に衆生となり悟るが故に佛となる、衆生若し迷なくんば佛と何ぞ別ならん。（圓明國師）

○昔生未了　今須了。此生度取累生身。古佛未悟同今者。悟了今人即古人。（龍牙禪師）

○師に逢て學ばされば、去りて後に悔ゆ、賢に逢て交らざれば、別れて後に悔ゆ、親に事へて孝せざれば、主に事へて忠せざれば、退いて後に悔ゆ、義を見て爲されば、過きて後に悔ゆ、危きを見て遠らされば、陷りて後に悔ゆ、財を得て仁ならざれば、失うて後に悔ゆ、因果を信せざれば、死して後に悔ゆ。（雲居禪師）

○道近しと雖も、行かざれば至らず、事少なしと雖も、爲さざれば爲らず。（荀卿）

○愼みは朝夕勵るゝ言の葉の假初ごとの上にこそあれ。

○有りと云ふ人に地獄はなかりけり無しと思へる人にこそあれ。

○佛はととへは答ふる麻三斤なにかほとけの名にもれぬへき。（無難禪師）

○佛はととへはまよはぬ人ぞなきおのがこゝろと知る人もかな。（同）

十八　無爲功德（修證義第十七節）

諸佛の常に此中に住持たる各各の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各各の知覺に方面露はれず、此時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。

此一節は御戒法の妙德作用を御示し下されたのであります、今まで繰返して申した通り、佛祖正傳の御戒法は所謂宇宙の眞理、天地の大法でありますから、決して釋迦牟尼如來が故らに御製になつた人爲の法ではありませぬ、御戒法を受け奉りさへすれば直樣佛樣の御仲間入が出來るといふは、御戒法を受けたる者は其身も其心も自から宇宙の眞理、天地の大法に契ふて、手の舞足の踏む所が、知らず〳〵佛性常住の孝順心慈悲心の現はれとなるからであります、三世諸佛の八相成道も衆生濟度もツマリ此御戒法の德の作用に過ぎぬ、故に諸佛の常に此中に住持たる各各の方面に知覺を遺さず」と仰せられたのである、住持は「トヾメ」「タモツ」て佛の道を世に住めて

それを持つて自在に運用せらるゝことてす、「方面」とは形相や作用の色々に異なつて居ることて、「知覺」とは心といふ程の意味てす、諸の佛樣方は或は攝取不捨の誓願を御立てなされ、或は大悲代受苦の御約束を遊ばされ、或は西方に淨土を擁へ、或は東方に身を現すといふ樣に、夫々方面を異にして佛法を仕持して居られませうとも畢竟此御戒法の中に住持し玉ふので、異なる方面の其儘が平等一味の佛心てあるから、方面の外に別に佛の心といふものがあるのては無い、併し此御戒法は宇宙の眞理、天地の大法てあるとすれば、單に佛樣のみの御德てはございませぬ、一切衆生は盡く此御戒法の中に孕まれて朝から晩まて御戒法を使用して居るのてあります、夫故次の御文には「群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露はれず」と仰せられたのてある、群生とは天地の間に有りと有らゆる一切の衆生を云ふたのぢや、その一切衆生は無始劫來より盡未來際まて、長へに此御戒法の中に在りて自由自在に之を使用て居る、數も限りも無き衆生の各々が皆な平等に佛の御心を具へて微塵計りも差別は無い、各々の知覺の其儘が平等一如の御戒法の姿であるから差別の方面の露はれ樣は無い、然るを我だの人だのといふて實際差別して居るものゝ如く思ふから、それが爲めに煩惱や執着が湧出して細に縛られるのぢや、此處を金剛經には「是法は平等にして高下あると無し」と示されてある、吾が我がの執着を離れて見らるるが宜い、一切の衆生は本來の佛樣て草木國土も悉皆成佛てある、御開山大師の御歌に「峯の色溪の聲もみなしながらわが釋迦牟尼佛の聲と姿と」とありますが實にや安心成佛の眼より眺むれば、此時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを以て其起す所の風水の利益に預る輩皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯す」て、十方世界の所有土地も草も木も屏牆も壁土も瓦や礫ろまてもソックリ佛樣の心を具へて佛樣の仕事を爲て居るてす、其世界の中より起す所の風だの水だの日だの月だのが、互に扶けたり扶けられたり持つ持たれつして、諸共に利益に預つて居るてはありませんか、桶に湛ゆる水もイッの間にやら我等が體內の一水分と變じ、畑に生ちし菜大根も知らぬ中に我等の血肉と化する、能々觀察し來れば、天地は同根、萬物は一體ぢや、是れが甚深微妙不可思議なる天然自性の佛樣の御化導御利益に、冥資と云ふて、我れ知らず資けられて居るのてあります、サア諸君は此意が御合點になりましたか、之を合點して佛樣の通りの德が顯はれたのを、親き悟と申すのぢや、親

き悟とある此親きといふ詞が殊に有り難いてす、悟るものと悟られるものと二つあつてはならぬ、我も人も天地も法界も、唯だ一枚の悟に成り切たのが親き悟てす、言ひ換れば此身も此心もソックリ御戒法の儘に爲つたのが親き悟てあります、左すれば此お悟は宇宙の眞理、天地の大法の現はれた姿であつて、元より人間の力で爲したのても無く作つたのても無い、所謂法性自然の功德てあるから、「是を無爲の功德とす是を無作の功德とす」と仰せられたのてす、して此無爲無作の大功德はどういふ風に現はたるかと申すに、君に對ふては忠義と爲て現はれ、親に對ふては孝行と爲て現はれ、夫婦の間には和合と爲り、兄弟の間には友情と爲り、一切衆生に向ては慈悲博愛と爲て現はれる、それが取りも直さず眞實の菩提心の發現てありますから、結文に於て「是れ發菩提心なり」と御示し下されたのてございます、雜譬喩經の中にこうゆう話しがある、昔し或處に極仲の宜い夫婦がありました、或時夫が其妻をして臺所の葡萄酒を執り來れと命じた、妻は直ちに酒甕の蓋を取り、圖らずも自分の影の酒水に映りしを見て、其影なることを知らず、大に怒て、此處に一人の女を藏し置けりとて、大聲揚げて夫を罵りました、夫は驚いて甕の中を窺きし處、亦も己れの影法師を望み、ヤア、汝こそは此處に斯樣な男を匿い置くにあらずやとて、騷ぎ出して、サー大變なことが始つたぢや、ソコて隣に一人の尼僧が居て、夫婦喧嘩を取り鎭め樣として甕の中を窺き、扨々何處の尼か知らんがビックリした顏をして此中に居る哩とて、慙て逃て仕舞た、其時一人の智者が彼等の愚痴を不便と思ふて、大石を持て其甕を打毀し、夫婦の者よ必ず爭ふこと勿れ甕の中は此通り男も女も居りはせぬ、居ると思ひしは御身達の迷なるぞと云ふて、懇ろに諭したので、始て自分等の影法師なることを悟つたといふことてあります、實にや源の實朝が「神といひ佛といふも世の中の人の心の外のものかは」と詠んだ通り、天地法界は盡く自心現の法てあつて、淨土の樂みも地獄の苦みも畢竟一念の影法師てす、故に一度御戒法を相續し奉りて孝順心慈悲心といふ本來の性德が露れさへすれば、十方の國土は皆な御戒法の姿の佛樣の御光りてあります、而して此孝順心慈悲心は何に依て起るかといふに、唯だ一つの淨らかなる信仰心より生ずるのてあります、心の底に少しても嘘や僞があつては淨き信仰とは申されぬ、聊でも恩を忘れ情を知らぬ樣な者には淨き信仰は起りませぬ、嘘も無く僞も無く而して能く恩に感じ情を存する程の人なら

ば、人の勸めを待たずして自づと佛法僧の三寶に歸依し奉り、御戒法相續の大事を爲し遂げるものです、斯くありてこそ始て絕大の勇氣も現はれ眞實の忍耐勉強も出來るものであります、西暦紀元前四百六十九年、希臘のアッチカ州アロペース村に生れし、泰西哲學者の泰斗ソクラチースは、若年の頃兵士と爲り後に公會議員等の職に任じ、晩年には專ら敎育に從事せられたが、寬仁大度の賢君子でありました、妻のザンチップは之に反して無類のヂジケ者で、嫉妬が深く我見が强く、おまけに大の疳癪持であつた、或時氏は友人と共に室內に話をして居りしに、何にか面白く無いやらブッ〳〵云ひ出したから、氏は靜かに友人を誘ふて表へ出掛けましたすると妻はそれが亦た非常に癪に障つたと見へ、二階に上り樓上より氏の頭の上に水を打懸たので友人は氣の毒がりて氏を慰めますと、氏は平氣な者で、ナアに雷の後には雨が附きものですと申して、顏の色さへ變らなんだと云ふことです、其後或人が、先生は何故に彼の樣な妻を娶り玉ひしやと問ひけるに、「馬術に長ぜんと欲する者は必ず悍馬を選んで乘ります、私の目的は談話と講演に在り、斯る妻を娶りて堪忍が出來れば天下の事は凡て輿し易し、是れ私が修養の好師表であります」と答へたそうてす、實にソクラチースの洋々なる雅量は佛敎の所謂忍辱行を成就したもので、千歲の下人をして敬慕措く能はざらしむるではありませんか、彼の有名なる西行法師は御存知の通り、身を雲水に委ねて諸國を遍歷し誦經念佛の暇には歌を詠み文を綴り、浮世の波風に遠かりて自然の光景を樂しんで居られた方てあります、其頃高雄に文覺上人といふ荒法師がありました、袈裟御前の首を斬り飜然悔悟直ちに佛門に投じ紀州那智の大瀧に三七日の荒行を致したといふ程の豪傑てす、常に西行のことを罵り、彼が如き似非風流のゴロッキ道心は大嫌ぢや、若し我が門に入り來らば彼の頭を碎いて遣らんと申して居つた、或日法華會を高雄に行ひました時、思ひも寄らず西行が參詣し夕刻に至り一夜の宿を請はれた、そこて文覺の弟子達は大心配、サア大變なことぢや、如何なる珍事があるやも知れずとて、ブル〳〵して居りました處、案に相違して文覺は西行をば親か兄かと思はるゝ計に尊び敬はれましたぢや、西行出立の後弟子が其譯を尋ねますると、文覺は太息をつき、ドウして彼の法師は我を打ちこそすれ我に打たるゝ者に非ず、其勇氣滿身に溢れて寸分の隙だも無しと言はれました、これは淨き信仰と正しき道德とが西行法師をして、絕大の勇氣と無

限の威力とを發現せしめたのであります、故に眞實御戒法の德を具ふる人ならば、一切の惡魔は追はずして自ら退き、一切の功德は招かずして自ら聚まり、天地法界盡く〳〵佛の淨土と爲り、草木牆壁も齊しく佛の光明を輝かし、知らず〳〵無漏最勝の大功德を成就することが出來ます、夫故我等お互は常に淨らかなる信仰力を養ひ、懺悔の當體に身口意業を淨め相共に佛戒相續の果報を喜びて至心に南無釋迦牟尼佛を稱念し奉り、二六時中間斷なく、利生報恩の妙修行を現はさんことを、第一の心得と致さねばなりませぬ。

參考

○菩薩は衆生を饒益するが故に、法を說くこと淨し、法を說くこと淨きが故に、智慧淨し、智慧淨きが故に其心淨し、其心淨きが故に、一切の功德淨し、一切の功德淨きが故に、住める土も又淨きなり、されば淨土を得んと欲せば、當に其心を淨くすべし、其心淨きに隨て則ち佛土も亦淨し。（維摩經）

○我淨ければ施度も亦淨し、施度淨きが故に願も亦淨し、願淨きが故に菩提も亦淨し、菩提淨きが故に、一切の法も亦淨きなり。

○一切の衆生は定めて當に大信心を得べし、是の故に說て、一切衆生に悉く〳〵佛性ありと言へるなり。（大集經）

○心性の淨きこと水中の月の如し。（寶積經）

○しるべし、一切諸法悉皆解脫なり、諸法の空なるにあらず、諸法の諸法ならざるにあらず、悉皆解脫なる諸法なり。（承陽大師）

○廣大の文字は、萬象にあまりてなほゆたかなり、轉大法輪、また一塵にをさまれり。（同）

○佛道をならふといふは、自己をならふなり、自己をわするゝなり、自己をわするゝといふは、萬法に證せらるゝなり、萬法に證せらるゝとは、自己の身心、および他己の身心をして脫落せしむなり。（同）

○釋尊の佛法沙界に充ち滿ちて到らざる所なし、參到せんに何ぞ到らざらん、此人身容易く受る所に非ず、昔の善根力に依て受け來る所なり、若し一度此處に到らば悉く解脫せん。（圓明國師）

○一花開處新諸象。萬里春風直下知。出門逐春尋客。擬前退步幾迷岐。（承陽大師）

○溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。佗日如何擧似人。（蘇東坡）

○峯の色溪のひゞきもみなからにわが釋迦年尼の聲と姿と（承陽大師）

○いつもたゞわが古郷の花なれは色もかわらず過し春かな（仝）

○いつしかと心のかすみきえはてゝ見むと思へはみよしの山（行誡上人）

○心よりほかに入るべき山もなししらぬ所をかくれがにして（無難禪師）

十九　發菩提心（修證義第十八節）

菩提心を發すといふは、已れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも樂にありといふも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

此一節は修證義第四章發願利生の大段中の最初の御文であります、毎度申す通り我曹洞宗の安心起行は、懺悔滅罪、受戒入位、發願利生、行持報恩の四大原則に歸するのであります、其內懺悔滅罪、受戒入位の二箇條は、無始劫來の罪障を懺悔して佛性常住の戒德を現はすのであるから、之を本證と稱して、本宗の安心は是に盡きて居ります、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、本來佛性の光明が御戒法と爲つて現はれた時、始て此御戒法は畢竟吾人が天眞に有する所の證悟の道てあるといふことが諄つて來る、一雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月」て、今迄は煩惱業障の雲に蔽はれて、自ら三界六道苦難の衆生なりと思ひ居りしも、戒法を相續したる曉に、我等は本來の佛にてありし、我等の心も身も本來の證の姿にてあ

りしといふことに氣が付き、豁然として大安心を決定することが出來るのであるから、之を本證と名けたのであります、扨此本證を得ますれば、自然の妙用として妙修が現はれます、妙修といふは修行のことです、修行と申しても、單に坐禪をした り念佛を唱へたりすることのみでは無い、本來の佛德、本來の證悟が、手足の上にも作用を起し、立居振舞の上にも活動を現はすことをいふのである、されば此修行も畢竟天眞の妙用であつて、即ち證の上の姿であるから、妙修と名けたものです、其妙修の有樣を此處では發菩提心と仰せられたのであります、菩提は梵語、即ち天竺の語で此には道と飜譯してある、道といふ語は何にても通ずる、親には親の道があり子には子の道があり、男には男の道女には女の道、皆夫々に定まつた道がある、然るに今は佛の道を指したのであるから、意義の混雜せぬ樣に特と原語のマヽ菩提といふたのであります、故に菩提心とは、佛の道の通りになつた心、言ひ換れば、佛心といふことです、我等凡夫の心はドンナであらうぞといふに、大底自己本位で、自分丈見から出て居る、御開山は之を貪名愛利の妄念といふて御呵りなされてある、名譽を望むに非されば利益を求むる、賞められんが爲めに働き、樂をせんが爲めに

働く、縱や惡事惡行に遠かり忠孝仁義の德に進む程の者にもせよ、其心の奥底を穿鑿して見たならば、矢張貪名愛利の妄念といふ樣な汚れた分子が潜んで居るに相違ない、最も名を求め利を欲するは人間自然の情であつて、人間は此情あるが爲めに活動して居るといふても宜い位のものである、けれども單に是れのみを以て、萬事萬行の基礎とするのは餘りに淺墓なことではありませんか、名譽といひ利益といふは善行に伴ふ自然の結果である、此結果を豫想して目的を立つるは頗る必要には相違ないが、此名利なるものは決して絶待の目的では無い、決して最終の目的では無い、絶待の目的、最終の目的は名利以外に無ければならぬ、忠義を盡せば芳名を百世に揚ることが出來る、孝行を勵まねば譽を後代に遺すことが出來ぬ、故に忠義を盡し孝行を勵むといふ樣な心得ては、若し功名を揚げ譽を遺すことの出來ぬ塲合は自然と忠孝を怠る樣になるの恐れがある、それでは道德も善行も或る一種の目的の爲めに盡すので、道德善行そのものを以て自己の本分と爲すのでは無いといふことになる、果して然らば全く基礎の無い根底の無い道德善行と申さねばならぬ、元來道德といひ善行といふは畢竟宇宙の大道の發現であります、唯だ一の大道が境に對

し縁に應じて作用を現はして、忠孝とか慈善とかいふ姿を示すのであつて、其作用は後天的のものとするも、其本體は先天的です、天地萬象といふもツマリ其大道の作用たるに過ぎぬ、梵網經には、佛性常住の孝順心慈悲心と仰せられてあつて、天地も萬象もソックリ孝順心慈悲心の姿であります、此大道たる孝順心慈悲心に爲り切つたのが、眞正の菩提心即ち佛心である、而して眞正の菩提心を發するには、先づ第一に利己的根性を離るゝのが最も肝要であります、コヽを贊題の初に於て、「菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり」と、仰せられたのであります、我等凡夫の最も卑しき最も汚らはしき利己的根性を離れさへすれば、別段に心を勞せずとも、自然に己れ未だ度らずとも一切の衆生を救濟し化度せんとの大願心が發り、從て其願力に乘して平生の言行上に自から救濟化度の事業を營むものである、是れ即ち我等が本來に具有せる孝順心慈悲心の妙德妙用であるに依て、此妙德妙用には在家だの出家だの男だの女だのといふ區別は無い、天上にもあれ人間にもあれ、或は苦みの中に住する貧乏人や最劣等の勞働者でも、又は樂みの中に在る貴顯豪族でも、皆な平等に此菩提心を發し得られまするぢや、

人間界に於ける位地や境遇にこそ種々の別もあれども、孝順心慈悲心の上には寸毫も變りの無い筈である、例へば軍人の階級には元帥大將より下士卒に至るまで、數十等の階級はあるなれども、誠忠報國の精神には階級は無い、渺たる一兵卒たりと雖も、奉公の志深く忠勇の節堅ければ、其精神氣慨は元帥大將と同等同權である、獨り軍人計りて無い、山家の賤の女も、犬打つ童も、其大和魂に至つては、隨分元帥にも大將にも劣らぬ者が幾許もある樣なものぢや、夫故我等も互は自分の位地や體質に貪着せず、苦み多き者、悲み深き者抔は一層心を勵まして、自未得度先度他と申して、利己的根性を離れて一切衆生を救濟し化度せんとの、菩提心即ち佛心を發す樣に致さねばなりませぬ、昔し釋迦牟尼如來は御出家遊ばされし折、四通りの大誓願を御立てなされたことが悲華經に出て居ります、其第一は衆生の困厄を濟はんとの大願、乃ち衆生の肉體に於ける苦みを濟ふの御誓ひ、第二には衆生の惑障を除かんとの大願、乃ち衆生の精神上の苦みを濟はん御誓ひ、第三には衆生の邪見を斷ぜんとの大願、乃ち衆生をして正しき知識を得せしめんとの御誓ひ、第四には衆生の苦輪を度せんとの大願、乃ち畢竟して衆生を濟度し等く佛果菩提を成就せしめ

んとの御誓ひであります、此四通りの大願といふも唯だ一つの菩提心の相であります、我等お互も釋尊の御教に歸依し奉る以上は、急ぎて菩提心を發し此四通りの大誓願を成就するの心懸が無ければなりませぬ。

古へ平家の士大將長尾新吾といふは、源氏方にて名も高き眞田與市を討取つた者であります、平家の一門運盡きて西海の泡と消え失せし時、圖らずも新吾は源氏方の手に生捕られ鎌倉表へ護送せられました、賴朝公は新吾を見て、彼は與市の儻にして容易ならざる囚人なりとて、與市の伯父なる岡崎四郎と申す者に引渡し、汝は存分の成敗を加へて與市の爲めに恨を晴せよと命せられた、四郎は一方ならず打喜び其夜は新吾を邸内の牢獄に投じ、自身は終宵寐もやらず、夜が明なば直ちに新吾の命を絶たん、去るにても如何なる手段を用ゆべきか、打首にやせん逆張付にやせんナブリ殺しにやせんと、頻りに思案を廻らす最夜中頃、遙かに御經を誦む聲が聞へる、合點ゆかずと怪みつゝ、聲する方へ尋ね行きしに、正しく牢屋の中なる新吾が最後の看經の聲であつた、四郎は一種異樣なる感に打たれ聞くとも無く耳を傾けしに、新吾はソレとも氣が付かず、明日に迫れる露の命、思へば人間一期の浮沈盛衰は實に盧生邯鄲の夢なりけり、今に至りて何をか悲み何をか恨みん、賴むべきは諸佛の誓願、願ふべきは釋尊の御教と觀念して、聲も微かに法華經の中なる「今此三界は皆な是れ我が有なり、其中の衆生は皆な是れ吾が子なり」といへる二句の偈文を繰回し〳〵誦んで居りました、此偈文こそ釋尊の御本領ぢや、三千大千世界は皆な我が教化すべき領分であるぞ、其中に有りと有らゆる一切の衆生は皆な我が子にてあるぞといふ、釋尊の大慈悲大誓願より溢れ出てたる尊とき御言である、四郎は之を聞くや否や悄然として憐れを催ふし豁然として感悟する所あり、嗚呼有り難き佛の御慈悲なる哉、佛の御眼よりみそなはせば一切の衆生は悉く佛の御子であつて、敵も無ければ味方も無い、敵と呼ばれ味方と呼ぶも一時業感の致す所、迷ふが故に三界城、悟るが故に十方空、然るを我等凡夫の淺ましさ、徒らに修羅の巷に踏み迷ひ、海內平和の今日に至るも、尙ほ自ら恨を抱き讎を結び未來永劫逃れ難き怨憎會苦を招がんと欲するすことの耻かしさよと、飜然悔悟して、翌朝は早速賴朝公に謁し已れが軍功に代へて新吾の命乞を爲したき旨を願はれたぢや、新吾は思ひ懸け無き危き命を助けられ、遂に出家して永く眞田與市の菩提を弔ふたと申すことであります

す、諸君は此一段の困縁を深く味ふて見らるゝが宜い、岡崎四郎の心を羸へしたるは、決して彼れに勇氣が挫けた譯では無い、佛陀廣大の慈悲を感得し、端なくも本來具有の孝順心慈悲心が現はれたのであります、昨日の怨敵も今日の同胞と變じ、過去の惡魔も現在の親友と爲る、是れ皆な菩提心の發展です、此菩提心は世の中の一部の者の所謂無我愛と、いふ樣な、漠然たるものでは無い、菩提心の上には偉大なる勇氣と崇高なる智慧とが伴ふて居る、佛陀の三德、菩薩の六度も誠く此中に含蓄されて居るのである、而して此心は全く佛戒の妙用でありますから、是を發すの士は正しく信仰の一念であります、故に我等お互は直ちに信念を發得し急ぎて懺悔受戒の身の上と爲り、從昼至夜に南無釋迦牟尼佛を唱念し奉り、進て利生報恩の素懐を達するのが、本宗信者の一大事であらうと思ひます。

參考

○仁を履み、慈を行ひ、博く愛して衆を濟はゞ、十一の譽れありて、福常に身に隨ひ、臥して安く、覺めて安し。（法句經）

○他人を護る爲めに、自身を護らざるは最上にして、他人を護り、且つ自身を護るは第二なり、自身を護りて他人を護る能はざるは第三にして、自身及び他人を護らざるは最下なり。（寶積經）

○たとへは、船師の常に大船を以て、河流中に於て、この岸に依らず、彼の岸に依らず、中流に住せずして、衆生を度して休息あるなきが如し、菩薩摩訶薩もまたかくの如し、波羅蜜の船を以て、生死の流の中に於て、生死を厭はず、涅槃を取らず、中流に住せずして、衆生を度して、彼岸に達せしめて休息あることなし。（華嚴經）

○諸の衆生の爲に、利益なきものを除くを大慈と名け、衆生に無量の利樂を與ふるを大悲と名け、諸の衆生に於て心に歡喜を生ずるを大喜と名け、偏りて擁護する所なきを大捨と名く。（涅槃經）

○菩提心を發すと云ふは、乃ち衆生を度するの心なり。（承陽大師）

○功德海中には、一滴もまた讓ること勿れ、善根山上には、一塵もまた積べし。（全）

○おほよそ學佛祖道は、一法一儀を參學するより、すなはち爲他の志氣を衝天せしむなり。（全）

○一たび食する毎に稼穡の艱難を念ひ、一たび衣る毎に紡績の辛苦を思ふ。（貞觀政要）

○仁は人を愛するより大なるは莫く、智は賢を知るより大なるは莫し。（家語）

○嘉肴有りと雖も食せざれば、其の旨きを知らず、至道有りと雖も學はされば、其の善を知らず。（禮記）

○學の道はかたしとも、悟の門はたかしとも、四弘誓願を杖として、毘盧舍那城にのぼらなむ。（行誡上人）

○ならはじな澤邊の蟹の横にのみ行けはゆかるゝ道はありとも。（仝）

○世治まり民やすかれといのるこそわか身につきぬ思ひなりけり。（後醍醐天皇）

○世を治め民をたすくる心こそやかて御法のまことなりけれ。（中務卿親王）

○慈悲の目に惡くしと思ふ人はなしとがある身こそなほあわれなれ。（眞阿上人）

二十　佛法極則（修證義第十九節）

其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり。

「世を治め民をたすくる心こそやがて御法のまことなりけれ」とは中務卿の歌であるが、實にや御法のまことなるものは、唯だ己れを忘れて世を救ひ己れを棄てて人を扶けんとの大慈悲に外ならぬのでございます、假令四夫四婦の賤しき身なりとも、斯る高尚優美なる精神を現はし、此精神が身口意三業の上に活動する時は、其心は自から佛心に合ひ、其行は自から佛行に一致して、心も身もソックリ菩提心の姿となり、其功徳の力は甚だ廣大無邊にして、人間天上は言ふまでも無く禽獸草木にも及ぼすのである、其處を「其形陋しといふとも此心を發せば已に一切衆生の導師なり」と仰せられたのであります、「妻こそ深山そだちの木なれども心は花になさばなりなん」とは西行法師の歌です、一箪の食一瓢の飲陋巷に處すと雖も、菩提心の大功徳は、無限

の時間を通じて誰來來際を期し、無限の空間に遍ふして一切の衆生を網羅せざるは無い、五種遵規の中にも「世間第一の善事は難を救ひ貧を憐むに若くは無し」とありて、慈悲仁愛の行ほど高尚なもの無く、慈悲仁愛の心ほど神聖なものはありませぬ、一度此高尚にして且つ神聖なる慈悲仁愛の心を發しますれば、「設ひ七歳の女流なりとも、即ち四衆の導師なり衆生の慈父なり」て、縦や七歳や八歳の女人兒童てあらうとも、其心は既に一切衆生の大導師、大善知識といふことが出來る、四衆とは比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四通の御弟子てあります、比丘は梵語此には乞士と譯してある、乞士とは上は佛に向つて精神上の食物たる法を乞ひ、下は衆生に向つて肉體上の食物を乞ふといふ意味で、ツマリ三界に家なく身邊に財なく、世間一切の煩勞束縛を離れ、乞食を以て生命を繋ぐといふ、出家に名けたる稱呼てある、尼は女のとてあるから、比丘尼とは女の出家のことぢや、優婆塞も梵語此には信男と譯して、佛法を信仰する在家の男子のこと、優婆夷は信女と譯して佛法に歸依したる在家の女子のことてす、釋尊御說法の時は、此四通の御弟子が席に列なつたものてす、今の御文に四衆とあるのは、佛法に因緣ある者を指したので、單に衆生とあるは、佛緣の有る者も無い者もヒックルめて、廣く生きとし生きる者を指したのてあります、眞實菩提心を發して慈悲仁愛の念に住する時は、縦や其身は渺たる滄海の一粟とも謂つべき、數にも足らぬ者てあらうと、其心に至つては寂てても、何卒して一切の衆生を導きたいもの、救ひたいものといふ廣大なる誓願を運らすが故に、取りも直さず一切衆生の導師なり、又は慈悲深き父親の樣なものてあるぞといふ所から、導師なり慈父なりと仰せられたのてあります、コヽに至つては本より「男女を論ずること勿かれ」て、男子とか女人とかいふ物質に屬する身分上の隔ては無い、全體人類のある所、必ず男女がある、古說に依れば、男は陽にして天に配し、女は陰にして地に配す、天地相調ふて萬物自から生ずる、男女ありて而して後夫婦の道顯はれ、夫婦和合して子孫茲に繁殖するぢや、葛城慈雲尊者も「此男子有て天の德を全す、此女子有て地の德を全す、陰陽此に配して萬物生ず、剛柔此に配して萬物を育す、閨門の內は人知らぬ處なれども、男女の道正ければ天地の氣候も自ら正しく、男女の道亂るれば天地の氣候も自ら亂る」と示されてある、天地の上に貴とい賤しいといふ區別の立てられぬと同じく、男女の上にも尊い卑いといふ定つた相のあるものては無

い、男女は車の兩輪の如く夫婦は鳥の兩翼の如く、男に八兩の重量があれば、女にも半斤の目方が無ければならぬ、故に人類世界を組立る上からいへば、男女は實に同權にして其德は遂に一に歸するのが自然の大法である、唯だ女人は其生理的機能の上に於て、又は習慣の上に於て、若くは宿世の因緣力等に因りて、智慧を磨き道德を顯はすこと、言を換へて申せば、成佛得脫することに於て弱點が多い、形儀容貌を飾るとか、細かい事に執心するとか、愛を貪ぼるとか、胸が狹いとか、嫉妬が深いとかいふのが、その重なるものであらう、ダガ其弱點が却て女人の長所であつた、能く之を精錬し修養し善用する時は天晴なる婦德を成就するものである、兎に角宗敎又は智識等の上からながむれば、男子よりも女子の方に缺點が澤山あることは事實である、又男と女とを併ぶれば、男は能く愛する方て女は愛せらるゝ方である、從て男は司令者て女は服從者である、古來東洋の聖賢が五障三從等の敎を設けられたも、決して女人を輕蔑したのでも無く侮辱したのでも無い、人間界の秩序として一面には必ず是の如き道理が存するのてある、況てや釋尊が塲合に依り極端に女人を惡く仰しやつてあるが如きは、一は佛法を修行する男子の爲め

に之を說いて女色の害毒を防禦せしめ、一は女人其物の爲めに、故に弱點缺點を擧げて、彼をして己れの弱點缺點を自覺して、飜然大丈夫の志を起し、其本性の美德を發揮せしめられたので、何れも皆な大慈大悲の御化導てあります、故に涅槃經に「女人と說くと雖も丈夫の性ある者は我れ是を男子と說く」とある、殊に我高祖承陽大師は正法眼藏を傳持せらん比丘尼は、四果支佛および三賢十聖も、來禮拜得髓の卷に於て、最も嚴重に男女の相に依て佛法に障壁を築くの邪見なることを御誡め下されて「正法眼藏を傳持せらん比丘尼は、四果支佛および三賢十聖も、來りて禮拜問法せんに、比丘尼この禮拜を受くべし、云々」又「女人なにのとがゝある男子なにの德かある、惡人は男子も惡人なるあり善人は女人も善人なるあり、聞法をねがひ出離をもとむることかならず、男子女人によらず、云々」とも仰せられてあります、此等の事は折を見て委しく御話しに及ぼうが、兎に角男といひ女といふは因緣生の假の相、本來具有の菩提心の上には微塵計りも男女の隔ては無い、釋尊一期四十九年八萬四千の法門を開示せられたのも、只だ此菩提心を發さしめんが爲めに外ならぬ、然れば佛法の至極微妙の法則の上には、男女の區別を論ずべからざるも

のてあるといふことを、能々御合點下さるゝが宜いぢや、此處を「此れ佛道極妙の法則なり」と御示し下されたのてあります、或處に虛無僧と塗師職人と出家さんとの三人が集つて四方八面の話しの次、何んと歌ても讀んて遊ぼうぢや無いかといふ動議が出た、すると彼の虛無僧は取敢へず「尺八の竹に異りは無けれども一つは穴のくり方による」と遣て除けた、塗師職人もマケぬ氣になり「輪島なるうるしに異りは無けれども一つは質のくり方による」と詠んだ、出家は扨々面々き人達ぢや、然らば拙僧も御仲間入を致走とて「極樂の道にかはりは無けれども一つは珠數のくり方による」といふ歌を詠んだといふことてあるが、實にや善きも惡きも、くり方一つ、佛も凡夫も心の持方次第てある、男子にして女人なるあり、女人にして男子なるあり、智愚賢不肖の別といふも、菩提心の發るか發らぬかに依て分るゝのぢや、近代の高僧原坦山和尚は、體格魁偉眼光人を射て而も白髭の生へた豪傑風の人てあつた、或時寫眞屋へ行かれた處、寫眞屋の主人がいふに、貴僧の御容貌は勅任官といふても耻かしからぬ、立派な御風彩ぢやと申しますと、和尚は最と磊落な口調て、拙僧は三界の大導師てあるのに、そんな馬鹿者に見へるかなとて、大笑せられたといふ話がある、我等お互もこうゆう大丈夫の志氣が有りたいものぢや、されはとて高慢らしい量見を起してはならぬ、姿や形にのみ貪着せず名譽や利益にのみ拘泥せず、超然として眞箇の菩提心を發して、三世の諸佛と手を執り膝を交るの樂しみを得る樣にせねば、決して大解脫の妙味を嘗むることは出來まいと思ふのてあります、彼の有名なる舍利と稱する比丘尼は肥後の國八代の人て、天平勝寶三年に生れた、七歲の時に法華經や華嚴經を誦んだといふ程、聰明の質てありました、或時奈良の大安寺の戒明といふ和尚が華嚴經を講じて居る席に列つて傍聽せしに、戒明は之を見て大に叱り、汝は穢れたる女人の身を以て此清淨なる道場に入り、尊とき法筵を汚すこと此上なき不埒の業なりと申されけるに、舍利尼は泰然として更に驚かず、「佛の慈悲は平等にして普く群生を濟度し玉ふとこそ承はる、況てや法界は一相にて本來罣礙なし、何ぞ男と女とを別つべきや」と答へ、華嚴甚深の敎理を演說しければ、流石の戒明も遂に答辯に窮して、舍利尼の說に服されたと申すことてあります。

此等の因緣に依て見るも、佛敎は決して男女の相を以て成佛不成佛を論ずるものて

無いことは解るであらうと思ふ、成佛と不成佛とは菩提心の發ると發らぬとに依て分るゝぢや、菩提心といふたからとて佛教の專有物では無い、乃ち佛性常住の孝順心慈悲心て、所謂天地自然の妙德であります、支那の子貢が其師の孔子に向つて「一言にして以て身を終るまで之を行ふべき者ありや」と問ふた時、孔子は「其れ恕乎、己れの欲せざる所、人に施すこと勿れ」と答へられたとある、「よろづ我がものと心にあぢはいてあんばいよくば人にふるまへ」で、自分の心に適ふた事は人にも與へ、衆と與に喜び衆と與に樂しみ、如何なる境に對しても如何なる場合に臨んでも、慈悲仁愛の心を失なはず與樂拔苦の誓願を忘れずして、一擧一動自から自未得度先度他の功德と爲つて現はるゝのが、佛陀の大光明である、然るに今の世の中は、此菩提心といふものに重きを置かず、何事にも外形を飾るのが主となつて居る樣に思はるゝ、勿論外形とても輕んずべきものでは無いが、精神の据り處が惡いと、僞善詐行といふて、虛僞の善根、詐誕の行爲と爲る、如何程國家が物質的に文明の度が進んで來ても、肝心な精神が僞物では、恰も錦に泥を包んだ樣なもので、甚だ心細い譯では無いか、夫故に我等お互は先づ第一に自分の心を美しく磨き上げて、慈悲仁愛を以て心と爲すといふことに、修養を積まねばなりませぬ、經にも「心淨ければ國土淨し」とありまして、心さへ菩提の道に契ひなば、身體も行爲も自から淨らかに爲り、自から美しく無るものです、其修養の第一義は懺悔受戒の身と爲りて諸佛同證の位に上り、利生報恩の行持を行取して、生々世々の大導師たる、釋迦牟尼如來を唱念し奉るが最勝の妙訣であります。

參考

○拘留國に一人の婆羅門あり、摩訶密と云ふ、彼は豪富にして珍らしき寶甚だ多く智慧秀て國の師となれり、然れとも慳貪にして佛法を信せず、彼に七女あり、端正にして比無く、金銀の瓔珞を以て莊嚴せり、時に分陁達は波羅門に告けて曰く、汝の女をして國中の人に見せしめて、若し女を呵する人あらば、我に五百金を與へよ、若し一人の呵するものなかりせば、我は汝に五百金を與へんと、九十日の間、國中を巡くりしと雖も、一人として女を醜と云ふもの無し、時に佛祇園精舍にて法を說き給ふと聞き、佛の處に至りて云はく、佛は諸國に遊び給ふ中に、此女の如き端正

しき女を見給ひしやと、佛直ちに訶して曰く、此女は一も好き處なし、婆羅門曰く、國中に一人も此女を醜と云ふものなし、何故に今醜と云ひ給ふや、佛答へ給はく、世間の人は五根及五境の美を觀じて好となす、我は身に細滑を貪らず、口に惡を說かず、意に惡を思はざるを好とす。（七女經）

○惡人は男子も惡人なるあり、善人は女人も善人なるあり、聞法をねかひ出離をもとむること、かならず男子女人によらず、もし未斷惑のときは、男子女人おなしく未斷惑なり、斷惑證理のときは、男子女人簡別さらにあらず。（承陽大師）

○女の身は一行失すれば、百行成ることなしといふて、一の濫りがはしきことあれば、萬の行儀作法いみじく勝れたりとも、終に其の身を滅すの基なるべければ、深く懼れ謹しむべきことなり。（曹大家）

○女の行の惡しきに三あり、一には我が身を自慢して我が爲す事を悉く是と思ふもの、二には人を蔑に自ら矜る心なるもの、三には自ら心の中に其の惡しきを知るも、我れと我が心を欺き、善きことを爲すやうにもてなすものなり、此の三つの心ばせ一つもあらん人は、女の德行の缺けたる人なれば、朝夕謹みて行の正しからんことを希ふべし。（文皇后）

○女の心かけは常に敬の心を持て、夫の猛く軀き心に從ひ順ふやうにすべし、敬といふは、常にまことの心を持て、時の間も怠る心なきことなり、順といふは、物やはらかなる心を持て、夫に謙り隨ふことなり、この二つの道は、女の大いなる禮儀なれは、此の德そなはりたる人は、夫婦の中自ら和ぎかなひて、行末久しく末とげ侍るべし。（女誡）

○あやにしきかさねても思ふかな寒さおほはん袖もなき身を。（皇后陛下）

○つゆふかきあさぢが原に迷ふ身のいとゝ嗚路に入るぞかなしき。（袈裟女）

○、客りぬる人の菜花はあだ花の早くも散りて實はなりもせず。

○すなほなる竹の操をわするゝなうまふししけき世を渡るとも。

○おのが身に火事がいくならかんにんのやねからけせよむねのほのふを。

○うきことになれて雪間の嫁菜かな。

二十一　發願回向（修證義第二十節）

若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際に急きて發願すべし、設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも、尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して、自らは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。

邪人正を說けば正も亦た邪、正人邪を說けば邪も亦た正といふ古語がありまして、心得の惡い人の言ふ事は、道理ある事も却て無理となり、量見の正しい人の語は、ツマラヌ事も大なる敎訓となり、淺はかな事までが、自然に甚深の意味を含んで居るものです、故に人は其志即ち誓願が一番大切で、これが萬行の基礎であります、前節の御文の如く、眞實菩提心を發して常に大慈大悲の念に住し、身自ら一切衆生の導師を以て任ずる程の大誓願を有する時は、縱ひ其身が或る因緣に依て、六趣四生に輪轉といふて、凡夫の間に交はり迷の世界に生死往來して居りませうとも、其

生死往來が却て菩提心の行と願とを壯嚴する資となりまするぢや、其處を「若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖も其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり」と仰せられたのであります、六趣とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道のことで、所謂凡夫の世界です、此六道は皆現世の業因緣に依て趣くべき世界であるから、六趣と稱したのである、此中天上界人間界修羅界は果報勝れて居るから三善道と稱し、餘の三世界は果報が劣等であるから三惡道と名くる、三善道の中でも修羅道は我慢鬪爭の世界であるから、是を三惡道仲間に攝して四惡趣とも稱してある、四生とは胎生卵生濕生化生の四つで、衆生の生るゝ相に依て分類したものです、人間の如く母の胎內より生るゝが胎生、鳥の如く卵より生るゝは卵生、蛞蝓抔の樣に濕氣のある處を緣として生るゝは濕生、蠶が蝶に變ずるが如き俗に云ふ山の芋が鰻に化するが如き類は化生である、輪轉は比喩で車の輪の回轉るが如く始終其間をくる〳〵轉ることである、諸法本より定れる相なし、一念の動作に依て佛ともなり鬼ともなり人間ともなり畜生ともなる、昨日の惡人も今日の善人なるあり、今日柔和の人も明日は如何なる恐ろしい者となるやを期し難い、實に變り易きは人心ぢや、故に我等お互

は、無始劫來幾度か生じ幾度か死し幾度か善人となり、時々に變化し刻々と移動し、彼處に生れ此處に死し此處に生れ彼處に死し、車輪の如くクルヽと回り轉つて停止する所なきを、六趣四生の輪轉と言ふたものてす、だが是を遠方のことゝのみ思ふてはならぬ、一日の中一時の間でも、樣々に心が變り樣々に業を起し、泣たり笑たり、悲んだり喜んだりして居るのは、取も直さず此身ながら六趣四生の往來ではありませぬか、併し心の奥底に金剛不動の菩提心がありさへすれば、決して憂ふるには及ばぬ、悲しむべき緣に遇ふ時は淨信心を起して益々懺悔滅罪の功德を成じ、喜ぶべき境に觸れては報恩の志を振つて愈々受戒入位の境界を樂しみ、善につけ惡きにつけ行持を勵まし誓願を進むる樣になるものてあるし、是非共そうなければならぬ譯のものてあります、優婆塞戒經に「一切の惡友諸々の煩惱業は即ち是れ菩薩道莊嚴の伴なり、何を以ての故に、一切凡夫は智慧正念の心あること無し、故に煩惱を以て怨敵と爲す、菩薩は正念具足す、故に煩惱を以て道の伴と爲す、惡友及び業も亦復是の如し」とありまして、正念具足の人には、惡友も惡業も皆な我を勵まし我を誡しめ我をして油斷せしめず我をして憤發せしむる便りとなるぢや、是れ皆な菩提心の功德てあります、夫故次の御文には「然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも今生の未だ過ぎざる際に急ぎて發願すべし」と仰せられて、縱や今日迄は徒らに五欲六塵の奴隷となり、虛名を貪ぼり虛利を愛し、本具の佛性をも明らめず永久の安心をも決定せず唯ウカ〳〵と日月を送過し去りし身なりとも、幸にして此命未だ盡きず此身猶ほ存して居るではないか、此手の利く中に掌を三寶に合せ、此足の在る中に步を佛道に進め、此息の通ふ間に急ぎて眞實清淨の菩提心を起し、衆生利益の大誓願を立つるが宜い、「いつまてか明けぬ暮れぬと營まん身は限りあり事はつきせず」夢幻の如き浮世に貪着して何にかせん、露電の如き名利を追廻て何にかせん、「消え易き我身にかへて尋ねみんたへなる法の道しば の露」暫時も差措かず急ぎに急ぎて利生發願の身とならねばなりませぬ、利生發願の身といふても別ては無い、「設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも向ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり」て、自分の身口意三業の上に働き出す總ての利益幸福をば、自分一人の爲めにせず、盡く一切衆生の成佛得道に回向すること てある、回向とは此方の事を回して彼方の方へ向けるといふ意味てす、之を俗諦門

の上に就て申せば、忠孝は人倫の大本てある、故に忠孝を勵まんと欲する者ならば百姓は百姓の事を爲ながら、商人は商人の業を執り乍ら、君の爲め親の爲め國の爲め先祖の爲めといふ觀念を離れてはならぬ、此觀念さへ堅固なれば、日々〳〵の業務も自から忠となり孝となる、敎育家も政治家も皆な同一て、我が作業一切を回らして、大君に酬ひ奉り彼の父母に向け奉るのてある、眞箇の忠臣ならば、死するも生きるも進むも退くも自から忠義の道に違背せぬ、補公父子の身を棄てゝ公に奉ずる。藤房卿の世に逃れて菩提を弔ふ、其趣にこそ異なりはあれ、忠節の點に至つては變りは無い樣なものてす、故に菩提心の回向といふても、自分の仕事を放擲せよといふのては無い、男子は男子の本分を盡し女子は女子の本分を果し、主人は主人らしく奉公人は奉公人らしく、各々其本來の職分を守り乍ら、大菩提心の大勢力に依て盡く一切の衆生を利益し三界の萬靈にも酬ゆることゝなるのてある、無量壽經に往生淨土の三心とて、至誠心と深心と回向發願心とを說てあるが、此中に回向發願心とは正しく此菩提心の回向に當るぢや、昔し良秀といふ畫師は、其近處に出火があつて、自分の住宅が類燒せし時、家財を取出す考も無く、獨り其傍に立てニコ〳〵し

て左も面白走に家の燒けるのを見て居つた、人々が此樣氣ても違ひはせぬかと思ひ御身は何故に見物抔をして居るぞと尋ねしに、良秀は人々に向ひ、予は久く不動尊を畫き居るもマダ火炎を寫すこと眞に逼らず、然るに今は圖らずも火事の御陰て、漸く火炎を描くの術を明らめましたと答へて喜んだといふ話がある、是れ火事を以て繪畫に回向したものてある、人間たる價値は此回向心の如何に依て定まる、古の聖賢は道の爲めに學び道の爲めに經營し、道の爲めに身を忘れ己れを忘れ、即ち萬行を以て道に回向せられたのてす、其道といふも畢竟は天地の心を以て心とし天地の德を以て德とし、依て以て一切の衆生を拔濟し利益することなのてあります、故に三世の諸佛十方の菩薩が、無量劫來の艱難苦勞も但だ此回向の行持に外ならぬ、此處を「或は無量劫行ひて衆生を先に度して自らは終に佛に成らず但し衆生を度し衆生を利益するもあり」と仰せられたのてあります、但しといふは、唯だ〳〵そればかりといふ語ぢや、北朝の天子たる光嚴天皇樣は、足利尊氏等に擁せられて是非なく皇位に即かせられ玉ひたる御方てあらせらるゝが曾て夢窓國師を師として佛敎の蘊奧に參徹せられ、元伏見の光嚴寺に在せし緣に依り紀念の御命名として光嚴天皇と

御稱し玉はれたと申すことぢや、當時武家の權威壓制殆んど其極に達し天皇は空しく虛位を御占め遊ばされしに過ぎず、天皇は常に國家の狀態を御歎き遊ばされ、且つ潛に楠公父子等の忠死を惜ませられ、一層浮世を憑みなく思召され、遂に丹波の國山奥に常勝寺といふ寺を建立して自ら開基と御成りなされ、後勿體なくも草鞋を穿ち脚絆を着け一蓑一笠自ら鐵鉢を捧げ一箇雲水の御身となりて、普く全國中を行脚あらせられました、殊に身北朝の天子であらせられしに拘はらず、高野の山を御立出の後直に吉野へ上り後村上天皇を御訪ね遊ばされ、南朝と稱し北朝と呼び敵といひ味方といふも、思へば一塲の夢なりけり、覩し來れば親疎の隔あるべからず、唯惜むらくは此間に立ちて忠義の爲めに戰死したる者共哉とて、倶に御落涙遊ばされ、特に楠公の籠城したりし金剛山の下を御通過の折抔は一層感慨に禁へさせざるが如く、幾度となく御涙を拭ひ玉ひしといふことであります、天皇の御出家御行脚は正しく戰死者の菩提を弔ひ、乘ねては御身を以て佛の道に盡し玉ふ御心に出てたるものと思はれます、天皇の山陵は常勝寺の奥に在りて、其處には椿と樫と椎の三本が植えられて、土が少く高くなつてあるの外に何にも無いと申すことてす、少し離れて陽雲菴といふがあり、只今は陽雲殿と稱して、此中には天皇と夢窓國師の木像を安置してある走てす、又御紀念物としては、その寺に、麻だか絹だか譯らぬ樣な紺色の御衣の襟の邊がズタ〳〵に切れて居るのがある、これは始終御召になつて幾回か風雨にたゝかれたものてあらう、又天皇が草鞋の紐通しに御用遊ばされた古い竹のヘラが一本と、黄金の四十三體佛と、宗十郎頭巾の樣な御帽と、楊枝入と、箸一對丈があつて、立派な箱入になつて居る走ぢや、此箱は後水尾天皇が親く御覽ぜられて、御返却の際此箱を下賜せられたものな走てあります、此事は外崎覺氏が官命を帶びて山陵取調の際實見せられたものとて、同氏の講演中に委く話された事柄てす、萬乘の尊きを以て一身を雲水に任せ、一衣一鉢山を跋え溪を渡り、或は夢を樹間に結び或は錫を石上に卓し、飄然淡然として國內を徧參し、怨親平等に發願回向し玉ひけるは、實に千古未曾有の御行持てはありませんか、是れ皆な道の爲めに御身を忘れ道の爲めに御心を捧げ玉ひし、菩提心の妙用てあります、菅原の道眞公の御語にも「世の人色欲を好める樣に、心のひまなく道を思ひ修しなば、その天德の己れに入り來ること火のかはけるにつくが如し、色欲は求め得て反て己れをそこ

ないやぶる、天德は無量劫にも盡きず、妙の妙なるもの也」とある、此妙の妙なる道を其身に具へるのが、佛敎信者の大目的であります、此大目的を達するには先づ以て身口意の三業を清淨にして、所謂滅罪懺悔の法を修し、佛祖の大戒を相續して本具の戒光を發揮し、以て本證を心身に圓成せねばならぬ、本證一度現ずれば妙修自から具はり、獨手に利生報恩の行願を全ふしまするぢや、是皆大聖釋尊の慈光に依るものなれば、至心に其恩德を感謝し、速に發願回向の素懷を成就せられたいものであります。

參考

○菩薩は常に淸淨にして方便を以て衆生を利す、實に諸欲の垢なきも、染を行ずる行を示現し、涅槃の池の中に浴しつゝ、方便して諸有を現ず、これを諸菩薩は二邊に住せず、身口意常に第一義寂靜に住すれども、衆生を利益せんが爲めに、方便して世間に同ずと名く、蜂の華の林に入るに、專ら一華を採らざるが如く、菩薩は方便して、一切の諸〳〵の境界を行するなり。（大薩遮尼乾子經）

○發心畢竟二無別。如是二心先心難。自未得度先度他。是故我禮初發心、初發心已受人天師。勝出聲聞及緣覺。如是發心過三界。是故得名最無上。（迦葉菩薩）

○智者(佛)は、深く一切衆生の生死苦惱の大海に沈沒するを見て、救濟はんと欲するが爲の故に悲を生ず、又衆生邪路に迷ふも、示導するものあることなきを見る、是故に悲を生ず。（優婆塞戒經）

○おほよそ菩提心は、いかかして一切衆生をおこさしめ、佛道にせまし、ひまなく三業にいとなむなり、いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず。（承陽大師）

○あきらかにしるべし、佛祖の學道かならず、菩提心を發悟するをさきとせりといふこと、これすなはち佛祖の常法なり。（全）

○もはら自未得度先度他の行願にそむかんかことときは、これ魔說としるべし、外道としるべし、惡友說としるべし、さらにしたふことなかれ。（全）

○もし一刹那、この菩提心をおこすより、萬法みな增上緣となる。（全）

○この發心よりのち、大地を擧すればみな黄金となり、大海をかけはたちまちに甘露となる、これよりのち、土石砂礫をとるすなはち菩提心を摶來するなり、水沫泡焔を參するしたしく菩提心を摶來するなり。（全）

○他をめぐみ我をわすれてものことに慈悲ある人を仁と知るべし。（烏丸光廣）

○へつらはすおごることなくあらそはすよくをはなれて義理をあんせよ。（全）

○君をあほき臣をおもひてかりそめも高きいやしき禮義みたすな。（全）

○何ごともそのしな〳〵を知る人にひろくたづねて他をなそしりそ（全）

○心いと直かるべしといのりつゝあしきをすてゝ善にともなへ。（全）

二十二　布施行（修證義第二十一節）

衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ即ち薩埵の行願なり、其布施といふは貪らざるなり、我物に非れども布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず其功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世他世の善根を兆す、法も財なるべし、財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず自らが力を頒つなり、舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり、治生産業固より布施に非ざること無し。

是より下の四節は、菩薩の四攝法と申して四通りの妙行がある、それを順次に御示し下されたので、乃ち利生の發願を實行すべき標準で、最も太切なる御教てある、夫故贊題の初に「衆生を利益すといふは四枚の般若あり一者布施二者愛語三者利行四者同業是れ則ち薩埵の行願なり」とある、四枚は四箇といふこと、般若とは梵語て此には智慧と飜譯してある、一には世智とて普通人間の知識の

こと、二には實智とて佛の智慧のこと、是を般若といふのてす、佛の智慧には煩惱の根本を斷じ生死の束縛を解脫し、未來際を盡し十方界に通じて、一切衆生を平等に利益するの大功德を有するから實智といふたものぢや、世智にはそれが無い、有ても一部分の作用にして全分の功德は具はらぬ、學問があつても辯才があつても學問辯才其物が直に斷惑證理平等利益の德を現はすことは出來ぬ、下手にすると、學問辯才が却て一段の罪惡を作ることゝもなる、然らば佛樣の御悟とは何んなものかといふに、宇宙の眞理、天地の妙德を實現したことに名けたものぢや、宇宙の眞理、天地の妙德とは何んなものかといふに、孝順心慈悲心の外には無い、此孝順心慈悲心が物に應じて動き境に觸れて發するのが利生の行願である、布施愛語利行同事といふ四通りの妙行は、此行願の實現したる相であるから、是を四枚の般若と仰せられたものてあります、薩埵とは菩薩のことて委くは菩提薩埵、是を覺有情と飜譯する、有情とは衆生の別譯てす、此覺有情といふに、覺を開いた衆生といふ意味と一切の衆生を覺らしむるといふ意味とがある、併し一口に云へば、衆生濟度を以て絶待の任務とする佛弟子をば、菩薩とも薩埵ともいふたのものてす、此四通りの妙行を修する人が眞の活菩薩てあります、此四通りこそ活菩薩の行力と願力とてある、此一節は其四通りの中の第一の布施行てあります、布施は「シキ」「ホドコス」と訓じて、大慈悲心を以て普く法と財とを一切衆生に布き施すことてある、布き施すといふは、己れの親切を平等に他に頒ち與ふることぢや、目下の者に物を授ることのみては無い、目上の人を供養するのも施てある、己れの欲せざる所は人に施すこと勿れとは、上下一般に通じた敎訓てある、然るに其布施の根源は己れの精神に存する慈愛の念てあるから、之を消極的に解釋すれば、「貪らざるなり」て、慳貪ならざるが布施の土臺てあります、慈愛なき者は他人を顧みることの無し、他人を顧みざるを以て分ち與ふること無し、獨り分ち與へざるのみにあらず、動もすれば他の財を貪ぼり他の食を貪ぼり、色を貪ぼり名を貪ぼり、遂には惡として造らざる無きに至る、「十惡をならべて置てながむれば貪欲殿のせいの高さよ」ぢや、若し此貪欲を離るれば本性の慈悲心忽然として現はれ、緣に觸れ境に對して知らず〳〵布施の妙用を起すに至ります、釋尊も優婆塞戒經に於て「貪ぼること無きの心之を名けて施と爲す」と御示し下されてある、眞正の布施は斯く精神的てありますから、「我物に

非れども、布施を障へざる道理あり」て、我物とては更に無しといふ様な人ても布施行に障りは無いぢや、釋尊は若し貧窮の人ありて布施すべき物なき時は、他人の布施を行ふを見て深く隨喜といふて喜びの心を生ぜよ、隨喜の功徳は布施と同一てあるぞよとまて仰せられてある、唯だ布施を行ふには、「其物の輕きを嫌はず其功の實なるべきなり」て、品物の輕重には拘はらぬが、其功果が眞實でなければならぬ、法苑珠林には、施すべからざる物に五通りありとて、爲めにならぬ財と酒及び毒藥と殺生の道具と、人を傷める器械と人の心を迷はす音樂女色とを擧てある、此等は其の施を說てある、一に眼施とは人に對するにヤサシい目付をすること、二に和顏悅色施は人と交はる、氣嫌の好い顏付をすること、三に名言辭施は人と口をキクにスナホな語使ひをすること、四に身施は身て手傳ひをすること、五に心施は心で他の善を贊成すること、六に牀座施は人に敷物を敷かせること、七に房舍施は人に坐敷をアテがうと、是等は財物を損ぜずして大なる布施の福を獲るぞと仰せられてあります、抑も布施の行は之を大別して二施又は三施としてある、二施とは財施と法施との二つ、これに無畏施を加へて三施となる、財とは身を資け命を養ふ所の物て、所謂物質的の布施てある、衣食住は勿論、水一杯お茶一服も皆な財の施ぢや、法とは心を養ひ智情意の三を保護し發達せしむるもので所謂無形の布施てある、小兒を育てるにも、乳房を含ませ衣服を着せるの類は財の施て、言語を覺へさせたり行儀作法を敎へたりするの類は法の施てある、佛在世に須達長者が黃金を布て祇園精舍を建立せしが如きは財施て、釋尊が四十九年の間に三百餘會の御敎化の如きは、法施の絕大なるものてある、無畏施とは無畏は畏るゝこと無しといふのであるから、譯り易く申せば安心といふ程のことになる、故に無畏施とは安心を施し安樂を施すことぢや、財施も法施も其目的は、人をして安心せしめ安樂ならしむるが爲めてあるから、無畏施なるものはツマリ布施行の目的といふても宜い、贊題の御文には財法二施の中に自から無畏施は含まれて居るからてあります、善薩六度の大行も布施を以て首と爲す、佛樣の御仕事も唯だ是れ圓滿なる布施を行じ玉ふに外ならぬ、草木鳥獸も布施の力に依らされば發育生長することは出來ぬ、我等の身躰も精神も皆な是れ布施の賜てあります、

故に若し淨らかなる心、限りなき心を以て布施を行ふ時は、錢一文草一本も自から現當二世の大善根となり、經文の一句一偈、敎訓の片言隻語も亦た自から今生後世の大功德となるぢや、此處を「然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし此世他世の善根を兆す」と仰せられたのである、菩薩心の大願大行より出たる布施であるならば、法施でも財施でも盡く未來永劫の安心安樂を得せしむる手段であるに依て、法施の中にも自から財に關する福分を與へ、財施の中にも自から安心解脫の因緣の增進するに依て、次の御文には「法も財なるべし財も法なるべし」と仰せられたのであります、而して此布施行は實に天地の盤德であるから「唯だ彼が報謝を貪らず自らが力を頒つなり」て、施を致したからとて決して彼が報謝といふて、他の返禮や恩報じをアテにせず、唯々自分の力を頒ちて人に施す樣にするが、眞正の布施行である、凡そ施には三種の等級がある、施し已て悔ゆと申して施してから後に損てもした樣に思ふて殘念がるが如きは最劣等の施ぢや、次に相當の報酬を見込て施すのは中等、無所得といふて何等の報酬をも求めず、布施行其物を喜び樂しむが如きは最も優勝の施て、所謂佛陀大悲の妙用であります、斯る妙用が心身に充ち滿つる時は、「舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり治生産業固より布施に非ざること無し」て、舟なき處に舟を置て諸人に便利を與へ、橋なき處に橋を渡して通行人を益するのも皆な廣大なる施てある、加之、治生産業て生計上の業務を執りて百姓をしたり商法をしたりしながらも、君の爲め國の爲め親の爲め祖先の爲め社會の爲め衆生の爲めと思へば、その營業の其儘が直接間接に公利公益となつて立派に布施の德を成することゝなります、檀度とは菩薩六度の行の第一たる檀波羅密のことです、檀は梵語てある、乃ち迷の此岸を離れ生死の大海を度りて悟の彼岸に達することてあります、昔し釋尊が御弟子の阿難尊者を率へて婆羅門城に入て托鉢を行ぜられた時、婆羅門僧侶の策略で一粒米を供養する者も無かつたぢや、時に町端に居りし一老婆が釋尊の空鉢にして歸り玉ふを見て、臭潘淀とて米の淘汁の澁んだ樣な物を至心に供養し奉りしに、釋尊は其眞心を嘉せられ、汝は今後十五劫の間三惡道に墮せず、後に辟支佛と成るべしとの

御記莂を授け玉ふたことが大論に出て居ります、又阿育王經には、阿育王が末後に臨み菴摩羅といふ果物の半分丈ありしを、鷄寺と申す御寺に施されし時、同寺の大衆は深く王の淨信心を喜び、其果物を粉にして數百人の僧侶に頒つたといふ因緣が說てあります、承陽大師は典座敎訓に此因緣を示されて「漿水の一鉢も也た十號に供じ自から老婆生前の妙功德を得、菴羅の半果も也た一寺に捨して能く育王最後の大善根を崩す、記莂を授かり大果を感ず、佛の緣と雖も多虛は少實に如かず」と仰せられてあります、是れぞ所謂長者の萬燈、貧女の一燈の理て、其信念と誓願とに依て、少分の布施も廣大の善根功德を獲得するのであります、北條時氏公の妻にて時賴公の母たる松下の禪尼は、一日時賴公を招かれける時、自ら破れし障子の切張をして居られました、兄義景が之を見て、何ぞ僕を呼て爲さしめざる、又切張抔をせずに新たに張替へ玉ふて然るべしと申されけるに、尼公は、僕ありとも予より上手とも覺へず、又新たにするには猶ほ早し、凡そ物は少く破れたる時に補はゞ勞少よくして事調ふものぞかしと答へられたといふ話は、有名なる美談てあるが、是れ正しく施すに儉約の道を以てせられたのである、眞實の敎は能く一切の福を生じ、眞實

の福は能く最勝の德を養ふ、故に法施と財施とは、唯だ其相を異にするのみて、歸する所は俱に無畏の果を成じて、大安心大安樂を得せしむるものです、有福の君子は宜しく正しき方法に於て、敎育なり慈善なり工業なりに力を盡すべきてある、それがやがて精神的文明を增進する資糧となります、又有智の君子は宜しく誠實に世を導びき人に敎へて倦むべからずである、それがやがて國家を莊嚴し民力を强大ならしむる基礎となります、況や懺悔受戒の身と爲りて洞上無二の法義に預かる方々は、誠を盡し心を傾けて、緣に觸れ物に應じて財法二施の妙行を實踐し、南無釋迦牟尼佛の名號を唱念し奉る中にも、慈悲愛念の妙德を發揮せらるゝが、佛子第一の妙修行でございます。

參考

○諸の智者は三不堅を以て、三堅に貿易ふ、二には不堅の身を以て堅身に貿易へ、三には○種を福田に種ゆるは、尼俱類樹の一核を種ゑて、無限の子を收むるがごとく、一

を施して萬倍を得。（罪福報應經）

○世に愚なる人多し、慳み守りて施さず、萬億の金を積みて是我所有なりと稱せり、斯くして命終らんとする時に臨み、眼に惡鬼を見、刀風その躰を解きて出入の息絶ゆ、貪りの輕重に隨つて苦辛を受け、罪を受くるの處に至りて自ら悔ゆ、悔ゆと雖も何ぞ及ばんや。（菩薩處胎經）

○菩薩は大施主となりて、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることなく、果報を望まず名譽を求めず、利養を求めず、但一切衆生を救護はんことを欲し、衆生を攝取して饒益せんことを欲し、諸佛の本行を顯現さんと欲し、一切をして苦を離れ、樂を得せしめんと欲す。（華嚴經）

○財無き人の自ら財無しと說くものは、實にあらず、何となれば、人として一水一草も有せずと云ふもの無ければなり、極貧の人一食を得たる後、食器を洗ひ、その滌汁を施すも福を得ん、縱令麵塵を以て蟻に施すも、亦無量の福を得ん、天下の極貧と雖も、誰か塵許りの麵なきものあらんや、極貧の人衣服なしと雖も、眞の赤露のものはあらじ、苟にも衣あらば一線を拔きて人の瘡を繫きて施を作せ、善男子、

天下の人貧窮なりと雖も、其身なきものはあらじ、若し施す物なき時は、他人の施を作すを見ば、身を以て往いて之を資助せよ、若し夫れ施すに意なくんば、國主と雖も、必ず施す能はざらん。（優婆塞戒經）

○世人多く善事を作す時は人に知られんと思ひ、惡事を作す時は、人に知れじと思ふに依て此の心冥衆の心に合はざるに依て、所作の善事には、感應なく、密に爲す所の惡事には、罰あるなり、是に仍て、還て自ら謂く、善事には驗しなし、佛法の利益すくなしと、思へるなり、是れ即ち邪見なり最も改むへし、人も知らざる時に密に善事をなし、惡事を錯りて、後には發露して、とがを悔ふ、かくの如くすれば便ち密々になす處の善事には感應あり、露るる惡事は懺悔せられて罪を滅ずる故に自然に現益もある當果をも亦知るべし。（承陽大師）

○公共の心なきものは神會の人にあらず。（古語）

○ももとせも猶あきたらず行末を思ふこゝろそものわらひなる。（江村專齋）

○おこりなきこゝろを代々の寶にてつきせぬ家の守りとも見よ。（慈雲尊者）

○慈悲の目に惡くしと思ふ人はなしとがある身にこそなほあはれなれ。（眞阿上人）

○我子なら供にはつれじ夜の雪。（松雨の妻）
○あさかほに釣瓶とられてもらひ水。（千代）
○蚊一つたに施しかぬる我身かな。（古人）

二十三　愛語行（修證義第二十二節）

愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり、面ひて愛語を聞くは面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く廻天の力あることを學すべきなり。

此一節は前節に四枚の般若と仰せられた、乃ち四攝法の中の第二愛語行の御親訓であります、愛語の愛は、慈愛、親愛、敬愛、抔と熟字する愛の字です、語は言語で吾人の口業を代表した詞であります、故に平生の口業乃ち凡ての言葉使ひに於て、常に柔和しき語、親切なる語、他をして満足せしめ安心せしめ、眞正の幸福あらしむる語を使ふのが、愛語であります、抑も人と禽獣と相異なる所以は色々有らうなれども、此言語の作用を有すると否とも亦た重なるもの一に相違ないて、言語は人の思想を直接に且つ明白に表示する唯一の機關てある、此言語あるが爲めに知識も開

け道徳も行はれ社會の交通融和も出來る、畜生には是れが無い、猿猴等の如き比較的高等なる動物には、多少言語らしいものがあるの走ぢやが、それは音調の變化といふものて言語とは申されぬ、幸にして人間には言語の作用があつて無形の思想を自由に寫し出すことが出來る、是れ程調法のものは無いてす、だが餘り調法過るのて動もすれば是を妄用し害用するの恐れがある、故に古人は「口は是れ禍の門、舌は是れ禍の根」だの「智者は言はず言ふ者は知らず」だの「多門の室は風を生じ多口の人は禍を生ず」だのといふて誡めてある、佛敎の十善戒法には、言語を誡めて妄語と惡口と綺語と兩舌との四通りを制してある、妄語とは虛妄を言ふて人を欺くこと、惡口とは人を惡樣にいふこと、綺語とは語をカザリて、人の心を迷はすと兩舌とは二枚舌を使ふて人を不和ならしむることてあります、我が曹洞宗相傳の御戒法の十重禁戒には、第四の不妄語戒と第六の不說過戒と第七の不自讃毀佗戒と第十の不謗三寶戒との四箇條が主として言語を制せられたものてある、乃ち虛妄を言ふこと、人を惡るく言ふこと、自慢すること、正道に反いた語を發することの四箇條てあります、併し斯樣な言語上の罪は何に依て生ずるかといふに、畢竟孝順心と慈悲心との二つが缺けて居る爲めてある、換言すれば上を敬ふの心と下を憐れむの心とが無いからして、妄語をもつき惡口をも列べ自慢も致し邪見の舌をも弄するのてあります、若し上を敬ひ下を憐れむの心深かりせば決して其樣な言語は發せられる者ては無い、利生發願の心さへ堅固なれば獨手に言語上の罪を解脫することが出來るものぢや、その利生發願の上から發する言語が今の愛語てあります、故に本文には愛語の定義を示して「愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり」と仰せられてある、一衆生たりとも我が目に留つたならば、第一に慈愛の心を發すこと慈念に富みし母親が赤子を見るが如くにして、それから其衆生に對して言語を發すれば、盡く愛語の德を具じて其言ふこと語ることが自然と、柔和しき語、親切なる語、他をして滿足せしめ安心せしめ眞正の幸福あらしむる話となるものてあります、次の御文には愛語の趣を宣べて「德あるは讃むべし德なきは憐むべし」とある、德の有る人に對したならば、中心より其德を讃めて彼をして增進せしめ、他の人々をして彌々其德を倣はしむる樣にするが宜い、又德の無き者に對したならば、眞心を以て彼を憐み、而

して彼をして自然に道に進み德を養なはしむる樣にするが宜い、兎角に凡夫は我慢我見が強いに依て、動もすると德ある人に對しては妄りに之を誹り、遂には根本的に愛語の德を滅却したがつてならぬぢや、吾能く人に親しむ時は人亦た吾に親しむは自然の道理であるに依て、苟くも愛語の德を以て人に接する時は「怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本するなり」て、今迄の怨敵も自づから我に降伏して、昨日の讎も今日は味方となる、君子とあるは大方の君子抔といふ意味の詞で、廣く世の人々を指したのてある、愛語の德は、獨り自分と人との間を平和ならしむるのみならず、人と人との間をも和睦せしむるに至るものです、愛語は實に平和の根本と申すべきてある、次の御文には其譯柄を委しく說明して、「面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず」と示されてある、德孤ならず必ず隣ありて、面たり愛語を聞く時は、誰しも喜びの色が面に現はれ心の中には言ふに言はれぬ樂しみを感ずるものぢや、又面の前てなくとも裏面に於て我に對して愛語せしことを聞く時は、其至誠に感ずることが一層深いものてあるから、肝にも魂にも銘ずる程にて、其慈愛と

親切とは永久に忘れぬものてあります、故に贊題の終りに於て「愛語能く廻天の力あることを學すべきなり」と仰せられたのての意味てす、唐の太宗皇帝が洛陽宮の修覆を企てられた時、國財は非常に疲弊し人民亦た大に困難てあつた、ソコて張玄素が面を冒して御諫言に及び遂に中止せらるゝこととなつた、其時魏徵が張玄素の忠勇を讃歎して「張公の事を論ずる廻天の力ありと謂つべし、仁人の言其利溥し」といふたことが書言故事に出て居ります、天子の綸言は天の命令の如くぢや、それを變更したは正しく天を廻らすの力と謂ふべきてある、愛語の德も亦た是の如く、敵をも變じて味方となし禍亂をも變じて平和と爲し、人を動かし天を動かすの力あることを知らねばならぬ、譬へば如何に廣き室內ても一片の沈香を焚けば、滿室盡く其香氣に薰ぜらるゝが如く、又萬斛の水の中に一滴の甘露を灑げば、其水の全體が盡く藥となる樣なものぢや、慈愛の言語は慈愛の念より發す、慈愛の念は慈愛の振舞を起すものてあるから、眞に能く愛語を爲すの人は、其人の身口意三業を擧げて、皆慈愛の泉と爲るものてす、故に愛語の人に於ける恰も沈香の如く甘露の如く、自づから社會を感化し自づから人間の道を莊嚴

するものであります、之に反して若し愛語の徳に率きて、或は安言を吐き或は毒舌を弄し、己れを欺き人を欺くことあらば、譬へば室内に悪臭を放つが如く、又は清水に毒薬を滴らすが如く、少なる一言一句が往々にして平和の社會を紊亂し、天下の人心を動揺するに至るものです「物いへば唇寒し秋の風」我等は常に深く其口を愼しみ、益々愛語行を修めねばなりませぬ、昔し備前の國主池田中將輝政公の家臣に伊木清兵衛といふ忠義の士がありました、此清兵衛重き病に罹り危篤に逼りける時、傍の人に向つて我は此世に於て何等の望だも無れど、只願くは今一度君公に見ゆることを得たしと切に申しければ、公は之を聞て特々其病牀に臨まれ、汝の願ふ所は何事に依らず採用すべければ、心置なく申し述よと仰せられしに、清兵衛は坐ろに感涙に咽びつゝ重き頭を擧げ兩手を合せ、小臣が一族の事抔は君必ず御心をば勞し玉ひそ、唯だ小臣に一の願あり、君は聰明に在せども常に磊落の御氣質ありて、動もすれば事を等閑にし給ふの風あり、且つ客士を好み玉ふの餘り身分に拘はらず濫りに任庸せらるゝの傾あり、是れ小臣の深く憂ふる所なり、夫れ大事は小事より起る、是を以て明君は些細の事たりとも輕んじ給ふこと無し、而して人を庸ふるには必ず其器を擇び、至誠を以て之を待つべし、是れ聖賢の志なり、君冀くは之を察せよと申し上げました、公は深く其忠言を喜び、涙を流して實行を誓はれ、それより一層國政に注意せられたれば、永く國家安全の基を樹てられたとある、忠臣の語は全く敬愛の衷情より出づるを以て、一言能く國家萬世の福祉を成したのであります、又幕府の頃何れの藩士なりしや其名さへ傳はらざれども、姓を平澤といへる武士がありました、或時主人の用務にて從者を召し連れて、さる所へ赴く途中、町家の二階に齒磨を使ひ居たる者が、表の方に唾を吐きしに、圖らずも平澤の着物に當りて、盛く禮服を汚したぢや、從者は大に怒り罵りけれど平澤は顔色だに變らずして靜に之を制し、暫し店先を貸し玉はれとて其家に入り、挾箱の中より着替を出して服を更ため、詫入る人々に向ひて、人誰か過なからん只だ此後を注意せられよと言ひ聞かせ、從者が何故此儘に御赦しなされしやとの尋ねに答へて、我が常に心得とする所の耐忍は此時にこそ必要なり、今日は太切なる主命を帶ぶる身なり、斯かる細事の爲めに時を費すべからず、と申されたそうぢや、又夏の日私用ありて供を連れて外出しけるに、町の者が撒きける溝水が平澤の袴の裾を汚しました、供人亦

た大に怒りけるを推し止め、吾れ今日は私用にて外出せるなり、苟も士たる者は君命の外私の爲めに人を罵詈すべからず、只耐忍せよ、耐忍だに有らば天下に恥辱のことあるまじ、と申したといふ話が雲萍雜誌に出て居ります、何と有り難い話ではありませぬか、愛語の德は沈香よりも妙なる香氣を放ち、甘露よりも勝れたる味を具へて居るものぢや、釋尊四十九年三百餘會の御說法は盡く愛語行の活動てあります、一千七百則の公案といふも一として愛語ならざるは無い、夫故承陽大師は學道用心集に於て「忠臣一言を献ずれば數廻天の力あり、佛祖一語を施せば回心せざるの人なし」と仰せられて、忠臣の一言は能く國家萬世の治基を樹て、佛祖の一語は能く永劫不滅の德本を定めまするぢや、慈雲尊者の十善法語の中、不惡口戒の卷にこういふ語がある、「能く此戒を護持する者は、君臣の名分分明にして而も臣庶をも侮ぬぢや、小心翼々として一日より一日を愼む男女位定て而も婦女子を侮らず閨門の間も常に禮節あるぢや、父子兄弟位定て而も子弟を侮らぬ家門常に修る、王者が郡臣を侮らぬによつて能者が事に當て自ら能を隱さぬ、直臣が諫言を盡してかくさぬ庶民を侮らぬに由て儳兆の推戴すること日月の如ぢや、男子が婦女子を侮らぬに由て賢女貞婦が德を輔け道を守る、父兄が子弟を侮らぬに由て孝子順孫が家風を堅さぬ、一日より一日を愼む中に此樂事あつて盡ることなきぢや」と、實に愛語の德を言ひ盡して居るてはありませぬか、要を取て言へば、佛祖正傳の十六條の御戒法が口業の上に其德を現じたのが愛語てあります、此愛語の德が身口意の三業にしみわたる時發願利生の德を全ふし行持報恩の功を收むることが出來る、故に苟くも懺悔受戒の身となりて、本證妙修の境界に至りたる我等御互は、寢ても寤ても愛語の大行を修め、釋迦牟尼佛の恩德を戴き奉りつゝ、大行の根底を定むるの覺悟が肝要てあります。

參考

○口を謹つて惡言を出すこと勿るべし。（遺敎經）

○惡罵の毒を歡喜し、忍受して、甘露を飮むが如くすること能はざるものは、入道智慧の人と名けず。（仝）

○しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。（承陽大師）

○愛語をこのむよりは、やうやく愛語を増長するなり、しかあればひころしられずみえさる愛語も現前するなり、現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、世世生生にも不退轉ならん。（仝）

○或人、中江藤樹に問うて曰く、「拙者心中にさのみ怒氣無けれども、自分の弟妹共が少しても悪きことをすれば言荒に叱りつくる癖あり、如何にすべきや」と問ふ、藤樹答へて曰く、「是躰認の疎なる故なり、怒が心中に伏藏されてあればこそ、和順の良心亡び、覚えず言荒になるなれば、其の伏藏の曲者を退治するが必要なり。」

○言の洩れ易きは禍を召くの媒なり、事慎まざるは敗を取るの道なり。（臣軌）

○甜言は蜜の如く、悪語は刀の如し、人は多言なるを以て善となさず、犬は善く吠ゆるを以て良と爲さず、刀痕は好くなり易く、悪語は消し難し、人を利するの言は緜絮よりも暖かに、人を傷ふの語は荊棘よりも利し、一言半句重きこと千金に値ひし、一語人を傷る痛きこと刀の割くが如し、口は是れ人を傷るの斧、言は是れ舌を割くの刀、口を閉ぢて深く舌を藏せば身を安んする處々牢し。（離騒經）

○自ら愛して而して人を愛せざるものは、未だ自ら愛せざる者なり。（言志晩錄）

○言は必ず其の終はる所を慮り、行は必ず其の敝はるゝ所を稽ふ。（禮記）

○心を推して而して物を濟ふ。（仁明天皇）

○一寸の赤心惟國に報ず。（陸放翁）

○善に遷れば其徳日に新に、非を遂ぐれば則ち其の悪彌積む。（陸贄）

○公誠己を盡す、之を義と謂ふ。（祝枝山）

○ふたつなき花の心の開けては墨繪の梅のいつもかふばし。（古人）

○夢破る心の月もひかりそふくもの林のあかつきのかね。（烏丸光廣）

○もの云へば唇寒し秋の風。（芭蕉）

二十四　利益行（修證義第二十三節）

利行といふは、貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり、窮乏を見病苦を見しとき彼が報謝を求めず、唯單へに利行に催さるゝなり、愚人謂はくは利他を先とせば自からが利省れぬべしと、爾には非ざるなり、利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。

此贊題の御文は、布施愛語利行同事の四攝法、即ち四枚の般若の中の利行の德を御示し下されたる一節であります、利行とは一切衆生に眞正の利益を與ふる行といふのであるから、四枚の般若の中でも殊に根本目的となるべき、肝要なる大菩提の行願であります、何故かと申せば、布施を行ふも愛語を守るも同事の德を全ふするも、畢竟は一切衆生に對して圓滿なる利益を施し、衆生をして最勝安樂の境界に到達せしめんが爲めてあるからてあります、だが利といふ文字を誤解せぬ樣に注意してはねばならぬ、彼の孟子が梁の惠王に對へて、「王何ぞ必ずしも利を曰ん亦た仁義あるに而已」といはれた利の字とは雲泥の差がある、孟子の所謂利は利己主義抔と稱する

てあるから、朱子も「利心は物我の相形に生ず人欲の私なり」と解釋してある、苟も義を後にし利を先にして、天理に循がはずして利を貪ぼる時は、自から菩提の行願に背き利佗の精神に悖りて、八萬の煩惱、無量の罪業、皆な是れより出生し來るものぢや、然るに利行の利の字は全く其意を異にし、轉迷開悟、離苦得樂の功德を指していふたものてあります、佛教の目的は何處に在るかといへば、申す迄も無く、無始劫來の迷執を轉じて智德圓滿の證悟を開くといふの外は無い、三界生死の苦惱は固より迷執の招ぐ所、涅槃常住の快樂は證悟に依らされば獲ること難し、故に一度佛の御位を相續して菩提心を發得したる上は、己れを忘れ私を離れて、常に衆生に施こすに利益の行を以てし、衆生をして得樂の境に達し開悟の地に到らしむるを以て、天職とするの覺悟こそ、一大事因緣てありまず、更に一歩を進めて見る時は、苟も佗をして歡喜せしめ安心せしむるは、盡く是れ一種の大利益なるが故に、佛菩薩や明君賢者にも利行を施こし奉ることが出來る、或は三業を淨らかにして佛菩薩を供養し奉り、或は誠を盡して明君賢者に奉公し奉り、或は心を傾けて父母師友に報答し奉るが如きも、皆な利行般若の大光明てあります、其處を御文の始めに於て

「利行といふは貴賤の衆生に於きて利益の善巧を廻らすなり」と仰せられたのである、貴賤の衆生とは、上は神明佛陀國王大臣父母師友より、下は妻子從僕貧人弱者及び禽獸蟲魚の末に至るまで、所有衆生を總稱したる御辭ぢや、善巧とは善良なる方法といふ程の意味である、廻らすとは順逆縱橫に其方法を運ぶことである、布施も愛語も同事も皆な利行の目的を達すべき善良なる方法ぢや、酒癖の惡き者が酒を求むる時の如き、放蕩者が金錢を乞ふ時の如き、妄りに之に布施する時はそれが爲めに彼をして益々不利益を招がしむることゝもなるものです、斯る場合には斷然布施を謝絕する方が却て利益することになる、愛語も同事も矢張同樣て、苦言を呈したり交際を謝絕する方が却て利益となる場合が澤山あるであらうと思ふ、是を順逆の妙用とも善巧方便ともいふ者である、次の御文に「窮龜を見病雀を見しとき彼が報謝を求めず唯單へに利行に催さるゝなりとあるは、事例を擧げて最高の利益行を御示し下されたのである、窮龜の因緣は晉書の中に出て居り、近くは蒙求抔にも載せてある、晉の世に孔愉字は敬康といふ至つて慈善心の深い人がありました、或日餘不亭と申す處に於て大きな龜を縛り附けソレを擔いて行く者を見て、如何にするぞと尋ねしに、之を殺して食料に用ゆるとのことであつた、孔愉は天性の慈善心に促がされて傍觀して去るに忍びず、彼者に談判の上若干の金を出して之を買取り、其儘水中に放ちて助け遣りしに、龜は如何にも喜し相な素振をして、四度迄も左の方へ首を扛げて孔愉を見廻りつゝ水中に沈んだ走ぢや、幾年をか經たる後孔愉は出世して餘不亭の知事と爲りし時、金を以て龜の紐を附けし役印を鑄さした處、其紐の龜の首が左へ曲つて出來たぢや、依つて之を鑄直すこと四度に及んだがドウしても首が正直に出來ぬ、ソコて端なくも數年前に龜を救ひて水中に放ちし時、四度迄も振回つて此方を見た時の樣子に似て居ることを思ひ出し、是れ正しく其龜が助命の恩を報ぜんが爲め我身を護り呉れるに相違あるまじとて、遂に首の曲つたなりの印形を用ゐたといふことてあります、又病雀の因緣は續齊諧記に出て居ります、支那の楊寶といふ人が九歳の折、華陰山と申す處に於て一羽の雀が鴟梟に搏たれて、樹の下に倒れ蟻の爲めに苦しめられて居るのを見て、幼心にも惑然の思ひを爲し、其雀を抱いて歸り百日餘りも籠に入れて之を養なひ傷の癒るを待ちて放ち遣りしに、其夜黃色の衣裳を着たる童子が楊寶の枕邊に來り、私は此程中長々の間一方ならぬ御介

抱を戴いた雀であります、貴君の再生の大恩を報謝するに由なきも、聊か御禮の印までに差上げますとて、四箇の白き玉の環を楊寶に渡し、貴君の御子孫が三公の位に昇らるゝこと此の環の數の如くなるべしといふて立ち去りました、不思議の事と思ひ居りしに其豫言虚しからず、楊寶の子の楊震、楊震の子の楊秉、楊秉の子の楊賜、楊賜の子の楊彪と都合四代とも三公の位に昇り、美名を天下に輝かしたといふことです、此二の因緣に依て能々御心得を願ひたいのは、孔愉が窮龜を救ひ楊寶が病雀を助けたる時の如き、本より相手が龜や雀であるから、後日に至り彼より幾許の報謝を受け様抔とは夢にも思ふ筈が無い、「唯單へに利行に催さるゝなり」て、嗚呼可愛相なものぢや、氣の毒なことぢや、ドウぞ彼が命を助けて遣り度といふ、一片利行の心に催ふされて、覺へず知らず金を投じ若くは食を與へたので、所謂天眞自然の慈悲心の現はれたのであります、此慈悲の心、同情の念は本具佛性の妙德にして取も直さず天地の御心には名譽を貪ぼる考も無ければ、利慾を充たさんするの邪念も無い、實に人間名利の外に超然たる大菩提心の姿です、古人が「悟り得て心の暗のはれぬれば慈悲も情けも有明の月」と詠ぜしも全く大菩提心の形容であります、然るに近頃は堂々たる學者の中に進化的利己說抔と稱する學說を主張して、社會の原始的本能は唯だ一の利己てあつて、利他といふは後天的のものである、言ひ換れば、本然の性は已れを利するに在りて、他を利するといふは人爲の法である抔と論ずる方がある、單に學說として之を見れば本より主張する者の自由であらうが、宗教上若くは道德上より觀る時は、是の如きの主張は全く世道人心を害毒する惡魔の邪說といはねばならぬ、宇宙の根源は絕對平等にして元來利己だの利他だのと稱すべき差別は無い、然れども平等海中に於て、差別の波瀾が活動する上は、自己もあり佗己もあり人もあり佛もあり、山は高く水は深く柳は綠花は紅で千態萬狀です、自己は自己の本位を守り佗己は佗己の本分に住す、山は山水は水柳は柳花は花、各己れを保ち己れを利するは自然の當相であるけれども、其根源實體一如にして二致なきが故に、差別の其儘が平等の本性を現はして居るに依りて、自己と佗己との間、人と佛との間、山と水との間、柳と花との間、相和し相調ふて宇宙を莊嚴し未だ曾て隔つることが無いからして、自己は佗己を利し佗己は自己を益し、山は水を生じ水は山を支へて居る、是れ即ち利他の德相てある、法なくんば

止なん、一法僅かに生ずれば利他の德相自から現はる、經には是を佛性常住の孝順心慈悲心と仰せられてある、上は日月の大なるより下は一塵一芥の小なるものに至るまで、一として、孤立して居る物は無い、既に孤立して居る物が無いとすれば必ずや他の利益を享けて居る、甲乙互に利し丙丁各益するは萬物固有の德である、此德の人類間に現はれたのが利益の行であります、次の御文に「愚人謂はくは利佗を先とせば自からが利省れぬべしと爾には非ざるなり、利行は一法なり普ねく自佗を利するなり」とあるは、取分け有り難き御示してあります、愚かなる者は、動もすれば利己と利佗とを全然別物の如くに思ひ、他人を利益することをのみ先としたならば、自分の利益は丸々省かれて、終には己れの身の立ち行かぬ樣なことに陷るであらうといふて、利他を輕んじて利己を重んじ、利他を後にして自利を先にする者が、世の中に澤山ある、是は大なる量見違ひで全く菩提心の上に現はれたる利他の眞意義を心得ぬ爲めに、箇樣な淺果敢な考を持つのであります、故に「爾にはあらざるなり」で、眞理は決して其樣なものではないぞよとの御誡めです、何故かと云へば「利行は一法なり」で眞の利益行は、自分と佗人との隔てを立てゝ而して後に行ふといふものでは無い、佛性常住の孝順心慈悲心が自己の心身全體に現はるゝのであるから、自他の境界を超絶して盡法界盡虛空を普く利益することゝなるのであります、例せば御國の爲め社會の爲めにならうといふ目的で、學問したり勉强したりする時、其學問勉强がやがて己れを利益し己れを莊嚴することに爲る、是は利他の精神が即自利となるのである、又實地に學問し至誠に勉强する者は、獨手に御國の寶とも爲り社會の光明とも爲る、是は利己の功德が即利佗となるのである、親に對して眞の孝行を致し君に對し、眞の忠義を盡さんと欲すれば、自から臣子の本分を全ふすることが出來、臣子たるの天職をだに怠らざれば、自から君や親に對する忠孝の道を圓かにすることが出來るぢや、唯だ聖人は其懷を空洞にすといふ如く、己れの邪まなる念、虛僞の情を離れ、天地公平の德に合すれば利他の德自から現はれ、自を利すると同時に他を利し、他を利すると同時に自を利して、自他法界平等利益である、是を「利行は一法なり普く自他を利するなり」と仰せられたのであります、凡そ天地の間に有りと有らゆる物を觀ずるに、利己といふ上からいへば一法として利己的ならぬは無い、利己といふは自己の存在を保護し自己の功德を莊嚴するのである、飢て

は食を求め渇しては水を求む、暑には扇を使ひ寒には衣を重ぬ、皆な是れ利己の姿であります、然れども此利己がやがて利他の徳を産み出す母親たることを忘れてはならぬ、又利他といふ上からいへば一法として利他ならぬものは無い、親を慕ひ妻を愛し子を慈み友を求むる、皆な是れ利他の姿である、然れども此利他がやがて利己の徳の發現する原動力たることを忘れてはならぬ、唯だ虚僞の念迷妄の情ある時は、利他を全ふすることが出來ぬのみか、やがて利己をも得られぬことになる、是ぞ徳を養ふ者の暫時も忘れてはならぬ肝要の法門ぢや、ところが世の中で謂ふ所の利己は、始より自分と他人との隔てを付けて、他人を棄てゝ願みず只だ己れのみを利益することの様ぢや、箇様な利己主義であつたならば、正しく天地生生の徳に背いた悪魔の境界であるに依て、利己を求め乍ら却て自己の存在を危くするものである、世の學者智者たる方々は深く此意を領解して、言を愼み行を守りて、世を誤まり人を毒せぬ様にして戴きたいてす、大學の三綱領に大學の道は明徳を明らかにするに在り、民を新たにするに在り、至善に止まるに在りとある、此一段の聖訓は實に萬古の模範である、明徳を明らかにすといふは己れを利益するの標準、民を新たにすといふは他を利するの方針、至善に止まるといふは自他法界平等利益の土臺であります、人々本具の徳を明らかにするのが眞の利己ぢや、若も徳を昧まし世を害する時は、己れを利益するに非ずして却て己れを傷くるのである、明徳さへ明らかになれば其本心の光りは四方に輝き渉りて、他を利せんと欲せずとも自然に他を利することゝなる、恰も雲を出づる明月の、無心にして普く萬物を照す様なものである、「里わかずながむる人の袖ごとに影も惜まぬ山の端の月」此月の如き身となりてこそ自利々他圓滿の域に達することが出來るぢや、此時をこそ眞正なる菩提心の活現とも、佛戒受持の光明とも申すのであります、我等幸に洞上の宗風に遇ひ奉り、慨悔の慈門に投じて三業を淨め、無始已來の罪障を拂ひ、殊に佛祖正傳の大戒を相續して、此身此儘三世諸佛の御仲間入が出來るといふは、何等の好因緣であらう、此因緣を喜び樂しんで天地公平の徳を養なひ、佛性常住の孝順心慈悲心を運用して、無邊無際の大信心を起して、我見我慢を打離れ、急ぎに急ぎて利生の大願を起し、佛弟子たるの天職を盡して、其行願を盡未來際に相續せねばなりませぬ、此境界に達したならば、寢ても寤ても佛陀の恩徳を拜し、佛陀の智悲恩徳を敬禮し奉り、以

て其恩德に報答し、利益の大行を成就するが肝要であります。

參考

◎菩薩は大施主となりて、一切のものを等しく衆生に施して悔ゆることなく、果報を望まず、名譽を求めず、勝處に生ぜんことを求めず、利養を求めず、但一切衆生を救護はんことを欲し、衆生を攝取し饒益せんことを欲し、諸佛の本行を學ばんと欲し、諸佛の本行を受持たんと欲し、諸佛の本行を顯現さんと欲し、一切をして苦を離れ樂を得せしめんと欲す。（華嚴經）

○千言を誦すとも行せずんば何の益あらむ、一たび聞て勤修して益を得るに如かず。（法句經）

○諸〳〵の衆生の爲めに、利益なきものを除くを、大慈と名け、諸〳〵の衆生に於て、心に歡喜を生するを、大喜と名け、擁護する所なきを、大捨と名く。（涅槃經梵行品）

○ひとのくにの民なれば、をしへざらんことにはあらざりき、しかあれば、怨親ひとしく利すべし、自他おなじく利するなり。（承陽大師）

○利行のいたれるには、草木風水の非情なるにも、利行の心およぶなり。（藏海和尚）

○君子は人の美を成して、人の惡を成さず、小人は之れに反す。（孔子）

○人君なるものは、心を正うして以て朝廷を正うし、朝廷を正うして百官を正うし、百官を正うして萬民を正うし、萬民を正うして四方を正う、四方正しければ遠近正に一ならざるなし、而して邪氣其間に奸するなし。（董子）

○志士仁人は生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を成す。（孔子）

○人の爲に圖るは尊きこと也、再び助くる能はざる人を助けよ。（エマーソン）

○人は仁慈を行はんが爲に此世に生る。（沙翁）

○見られんが爲めに與ふる人は、暗黑中には何人をも救はず。（英國俚諺）

○なか〳〵に人より物を思ふかな世をおもふ身の心づくしは。（後嵯峨天皇）

○法の爲め國の爲めとて身の限りつくして果てん倒れふすまで。（介石上人）

○すまし井の水に我が身は沈むともにこしはせしなよろづ國人。（孝明天皇）

○鈴鹿川八十瀨の浪の立ちゐにも我が身の爲めの世をば祈らじ。（崇光天皇）

○世治まり民安かれといのるこそわが身につきぬ思ひなりけり。（後醍醐天皇）
○よしやよし世を去るとても我心御國の爲めになほつくさばや。（國月信濃）
○踏まれても根つよくしのべ福壽草やがて花さく春を待ちけり。（道歌）
○氣に入らぬ風もあらうに柳かな。（失名）
○白魚や水にきれいな埃もあり。（失名）

二十五　同事行（修證義第廿四節）

同事といふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり、恰へば人間の如來は人間に同ぜるが如し、他をして自に同ぜしめて後に、自をして他に同ぜしむる道理あるべし、自他は時に隨ふて無窮なり、海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて海となるなり。

此贊題は修證義第二十四節の御文て、佛弟子たる者の必ず當に行ふべき四枚の般若の中の第四同事行の御垂示てあります、同事とは「事を同ふす」といふことてあるから、世の中に逆はず世の中に背かず、能く世の中に順應して行くことてす、故に「同事といふは不違なり」と定義を示されたのてある、不違とは「たがはず」「そむかず」といふことてす、所謂天下の樂みを以て樂みとし天下の喜びを以て喜びとし、一身の私を貪ぼること無く一箇の我見を慕ること無く、其時に隨ひ其機に應じて、濟度利益の行を爲すことてあります、萬法歸一の理といふて、總ての事柄は終に一理に歸するものてあるから、他に對して逆はぬ、人を太切にすると、自身に對しても逆はぬ程の人は、

る程の者は、自分の身をも太切にするぢや、人に親切なる者は必ず自分にも親切です、世の中には、自分で自分の良心に逆らひ、自分で自分の身躰を苦しめる者が澤山ある、悪人や邪見人は申す迄も無く苟も我見のみを主張せんとする者は、皆な此御仲間です、自他は元來平等にして不二であります、こゝを「自にも不違なり他にも不違なり」と仰せられたのである、併し此同事の徳を全ふするには、第一に自分の境界が、八風吹けども動ぜざる泰山の如く、シッカリした大安心を具へ、火に入つても焼けず水に入つても溺れざる底の氣節と信念とを有して、而して人に向つては、海の如き寛大なる度量を以て柔和善順の徳を守り、時世と根機とに順應して善巧方便の用を起す様でなければならぬ、これは餘程修養と經驗とを積まねば中々出來難いぢや、人に逆はぬといふ者でも「浮草や今日はあちらの岸に吠く」といふ様に無節操無氣力では、丁度醫者や娼妓の御機嫌取りに頻する者となる、此等は人に逆はぬ様で、道徳上却て甚しき逆らひ方をして居るのである。又自身の一分丈は頗る堅固に搆へ込んで居る人でも、人が右といへば左、是といへば非といふ様に、己れの我見のみを主張して、少しも世と相容れぬ者もある、此等は自分丈は立派に獨立して道を守る様なれども、所謂世に在て益なき者であるから、矢張自己本然の徳に背くことゝなるのである、此程合の能く調ふたのが所謂中和の徳といふので、甚だ六かしいです、此不違同事の行は一家の上にも非常に必要てす、僅か三人か五人の家内でも、十人十色の道理に背かず、餅好もあれば酒好もあり、鹹いものを好む人もあれば甘い物を好む人もある、此人々が銘々勝手に我見を募つたならば、三度の食事も別々に調へなければ滿足は出來ぬ、それが餅好の人が酒好の人に順ふて逆はず、甘い物の好な人が鹹い物の好な人に和して逆はずといふ様にすれば、一ッ釜の御飯、一ッ鍋の御汁でも、異性殊癖の人を平等に滿足せしむることが出來る、敎育家は敎育家丈の智力と技能とを具へながら、生徒に授業する時は生徒に相應したことを敎へる是れ乃ち自にも不違なり他にも不違なりてある、又母親は母親丈の經驗と品位とを有しながら、子供を育てる時は子供に適當した敎へ方をする、是れ乃ち自にも不違なり他にも不違なりてある、故に次の御文には「譬へば人間の如來は人間に同ぜるが如し」とありまして、譬へて見れば、釋尊は人間世界を濟度し玉はんが爲めに、人間世界に御出現遊ばされたのてあるから、天よりも下らず地よりも出てず、我等と同

じ樣に人間に生れ玉ひ、食して以を飢を凌き、飲みて以て渇を癒し、はへば立ち立てば歩めの親心に養なはれて、御生長あらせられた、其御姿も御生活も畢竟人間式て人間と同じ樣にして人間に交はり、而して能く人間を濟度せられたのである、此釋尊の御生涯こそ、同事行に於ける最勝第一の御手本であります、其同事行の功德はどうかといふに、「佗をして自に同ぜしめて後に自をして他に同ぜしむる道理あるべし」て、此方から大慈大悲の心を運んで、世に逆らはず人に背かずして同事方便を垂るゝ時は、他の人々も自から此方の德に化し此方の慈愛に感じ知らず〳〵佛法中の人となるものです、是れ乃ち他をして自に同ぜしむるの功德である、又他の人々が此方の德に化して同ずる時は、此方の大慈悲心は益〳〵擴張して任運に他に同じ、四方八面に大利益を現はすことゝなる、我れ人を見ること己れの如くなれば、人亦た我を見ること其己れの如くなるべし、自分と他人との間自から感應道交して、自他一如となるものであります、故に或時は自分の慈悲心を運らして他人の身を濟ふこともあり、或時は他人の身を導いて自分の慈悲心に攝することもあり、同事の妙行は自分と他人との隔てを離れ、或は自を度するの法を以て他を度し、或は他を度するの德を以て自を度し、自他平等に利益す、其功德は廣大にして古今に涉り十方に通じて窮まること無く盡くること無し、是を「自他は時に隨ふて無窮なり」といふたのであります、猶ほ此意を一層適切に示さんとて下の御文には「海の水を辭せざるは同事なり是故に能く水聚りて海となるなり」と仰せられたのである、例せば大海の德は百川の水を容れて除さず、一滴たりとも決して之を辭せぬ、夫故百川の水は交々大海に聚り注ぎ、爲めに海水は千古萬古長へに滿ちて毫も減ずることは無いです、海の水を容るゝは自をして他に同せしむるので、信濃川の水も、細溪川の水も清水も濁水も擇り嫌ひはせぬ、同事の業も亦た是の如く、怨讐にも親しき人にも目上にも目下にも公平無私に調和するの德が無ければならぬ、世には八方美人といふことを申すが、菩薩の行願を修めて衆生を利益せんには、一面に於て八方美人的の大度量と大融和が無ければならぬ、古人も「忍び能はざる所を忍び容れ能はざる所を容る、惟識量人に過ぐる者之を能す」といひ、基督ですら「汝の敵人を愛せよ」といふてあります、況や諸佛菩薩の慈悲方便に至りては、三界を以て敎化の領土と爲し、一切衆生を以て所化の子弟とみそなはし玉ふ、觀音菩薩の三十三身、地藏大

士の四十八身、釋迦牟尼世尊の千百億化身は同事圓滿の妙德であるが、我等が目上の人をば敬ひ目下の者をば憐れみ、年寄に向つたならば年寄の心に適ふ樣に扱ひ、子供に對したならば子供の氣に合ふ樣に世話をする、是れが即ち分身同事の行といふものである、陸宣公が「寧ろ人の我に負くとも我は人に負くこと勿れ」といひ、續讀書錄に「其心を大にして物を容れ其心を虛しくして善を受け、其心を平にして事を論じ其心を潛めて理を觀、其心を定めて變に應ずべし」とあるが如きは、實に修養上の好敎訓であります、箇樣に和光同塵の德を具ふる時は、孟子の所謂一至誠にして動かざる者は未だ之れ有らざるなりて、天下の人は自然と其德に服し其誠に感じ、怨も變じて味方と爲り惡魔も變じて親友となるものでです、是を水聚りて海と爲るとも、他をして自に同ぜしむるとも申すのでありまります、德川二代將軍秀忠公の乳母は參河の人にて、忠實に將軍を御育申し上げし爲め、將軍は眞の母の如くに太切にせられ、時の人も亦た大婆殿と稱して大に敬ひましたぢや、此大婆殿に一ッの道樂があつた、それは毎月一返必ず大盤切に御飯を堆く盛り上げ、相應なる煮込を調へ、それから六尺仲間抔といふ賤しい者共を幾十人となく臺所に召び集め、自ら絆纏になつて給仕をして振舞ふとを、此上も無い樂しみとして居られました、或時此催しのありける所へ、時の宰相本多正信公が入り來り、此有樣を見て大に驚き、御附の女中も數多きことなれば、誰へなり命ぜられて然るべし、自ら給仕までせらるゝとは、御身分にも拘はりて餘りに輕々しき事かと存じますと申された、其時大婆殿は襟を正しの風聞する所に依れば、御身は兎角に驕り貢る傾きがあると申すことぢや、妾は御形を改めて暫く正信公の顏を見詰めて居られたが、良あつて語を發し、近頃世の人身に限りて其樣なことはあるまじと信じて居つたが、今の一言にて人々の傳ふることの僞ならざるを知りしこそ遺憾なれ、御身の昔は彌八郎と稱して身分輕き者なりしことはよも忘れは致されまじ、妾は御身の知る如く三州にて賤しき者なりしが、德川公の御恩に依りて思ひ掛なき榮譽を擔ふことを得たり、昔は五六人の客に對してすら、酒饌を振舞ふこと容易ならざりしを、今は斯く數多の人を集めて饗應するも自由なる身となりしは、全く君恩の致す所と思ふて常に其大恩に感泣して居る、若し啣かにても驕る心抔を持ちなば、天罰忽ち身に迫り行末何を以て、君恩に報ふることを得んや、故に賤しき昔を忘れざる爲め、又二ッには君恩の大なることを忘

れざる爲め、自ら料理を調へて我が君の恩惠を賤しき者共に頒ち施こさんと存ずるのである、御身は今日の富貴に慣れて既に彌八郎と呼びし時の事を忘れられしと見ゆ、其樣な心得にては天下の政務に預かること實に心許なしといはれました、幕府の大老を以て稱せらし正信公も、流石に一言の答ふべきなく、赤面して愧ぢ去りしといふ御話しがあります、此大婆殿の如きは、正しく貴きに居て賤きを忘れず、上に在りて下を憐れみ玉ふ、同事行一分の光明を放たれたものであります、又昔し備中國淺口郡柴木村に甚介と申す農夫がありました、母親に事へて無類の孝行を盡し御飯の時でも母親の箸を取らぬ中は食べぬ、母親の食べ終るのを見てから欣然として始めて箸を下す、又母親が寢に就かんとする時は、自ら褥を展べ冬は溫かくし夏は涼しくして母親を寢ねしめ、其熟睡したのを見ぬ中は寢たことが無い、母親は御茶が大好であつた、そこで甚介は毎朝早く起き茶を烹、席を布きて母の起るのを待つといふが、キマリであつたそうてす、所丈は閾席を布いて居つた、市にても往た時は必ず魚や菓子を調へて之を母親に進めるのが何よりの樂しみとして居たと申すことてす、母親は八十歳になりし時も六

十歳位の顏容をして居つた、人が貴女は何故につや〳〵して御達者なるやと尋ぬれば、甚介が能く孝行をして呉れて一度でも妾に心配をさせたことが無い、御大名の母でも妾の樂しみには及ぶまじ、是れ妾のつや〳〵しくして達者なる所以ぢやと答へたそうてあります、一人の兄があつたが其兄はナマケ者て、自分の田地が充分に實らずして甚介の田の肥たるを羨み、地所の取換を申込んだ、甚介は快く承知しましたが、翌年の秋になると取換へた甚介の田は盡く能く實り、兄の方は矢張り大の不出來てあつた、時々兄が年貢を納め兼ねて困つて居ると、イツても自分て立替て少してもイヤな顏をしたことが無い、承應年間領主は其孝悌を聞し召して厚く之を賞し、且つ田地を賜ふて租稅を免ぜられたことがある、其時諸役人が甚介に向つて、汝は何の道を學んて斯く麗しき行を得たるやと問ひしに、甚介の答へに、私は孝悌抔といふ道は一向に心得ませぬ、唯母親が快く食物を召上らねば私も食べる氣にならず母親が快く眠らぬ中は私も眠ることが出來ぬ、若し母親が御喜びなされば私は其喜びを喜びとし、母親が御樂みなされば私は其樂みを樂みとするまてゝ、別にドウのコウのと心を費して孝行したことはありませぬと、申したそうてある、此御話

は扶桑孝子傳に出て居ります、甚介が別に分別思慮を用ゐずして、母の喜びを喜び母の樂みを樂むのは所謂天眞の慈悲心、佛性の孝順心が現はれたので、其兄に向ては兄を安んじ親に向ては親を安んじ、八方に對して少しの圭角の無き行こそ、菩薩同事の功德を成就したものといふべきである、彼の曾子が「孝子の老を養ふや其心を樂ましめて其志に違はず」といはれたは、最も至要なる敎であるが、甚介が一點の至誠は知らず〳〵帝の則に合ふて居るのであります、今日の人は兎角に同事行といふことを、社會的事業とか慈善的事業とかいふ上にのみ用ゐて、日用の間に之を應用するの心懸が不足な樣に思はれます、自分一己の上にも常に柔和の德を養なひ、親子兄弟夫婦の間にも常に不違の德を現はしなば、朝から晩までの爲る事作す事が盡く同事般若の功德を成就することが出來ます、殊更我等御互は釋尊の御弟子として、懺悔受戒の勝因緣に預かり、發願行持の妙修行を勵み、常に南無釋迦牟尼佛を稱念し奉りて、感應道交の大果報を得べき身の上であつたならば、自にも違はず他にも違はず上下貴賤を推なべて、相俱に衆生利益の行願を營むこと、何よりの幸福と申すべきであります。

參考

○菩薩、家にありては、衆生と共に、家の性空を知り、その逼迫を免かれんを願ふべし、父母に孝養しては、衆生と共に、善く佛に事へて、一切を護養せんことを願ふべし、妻子集會しては、衆生と共に、怨親平等にして、永く貪著を離れんことを願ふべし、乃至もし厄難にありては、衆生と共に、隨意自在にして、所行礙りなからんを願ふべし。（八十華嚴經）

○菩薩は唯大悲を以て、方便して即ち諸〳〵の世間に入り、未悟を開發し、乃至、種々の形相を示現し、逆順の境界、其れと同化して、成佛せしむ。（圓覺經）

○同事は薩埵の行願なり、たゞまさに、やわらかなる容顏をもて一切にむかふべし。（承陽大師）

○彼の琴詩酒は、人をともとし、天をともとす。（琴詩酒の人天神なるは同である）琴詩酒は琴詩酒をともとし、人は人をともとし、天は天をともとし、神は神をともとすることはりあり。（道理を逃べたもの）これ同事の習學

なり。（同）

○人界に同するをもて、しりぬ同餘界なるべし、同事を知るとき自他一如なり。（同）

○君子は其位に素して行ひ、其外を願はず、富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては、患難に行ふ。（中庸）

○海は水を辭せず、故に能く其大なることを成す、山は土を辭せず、故に能く其高きことを成す、明主は人を厭はず、故に能く其衆を成す。（管子）

○此世界に於ては互に相助くること必要なり。（ラ、フヲンテース）

○吾人は奴隷も亦同胞なることを忘るべからず。（ケート）

○慈悲の眼に惡くしと思ふものゝなし罪ある身こそなほあはれなれ。

○世の中はみな佛なりおしなべていづれのものとわくそはかなき、（花山院御製）

○冬深きねやのふすまをかさねても思ふはしつか夜寒なりけり。（陛下御製）

○あやにしきとりかさねても思ふかな寒さおほはん袖もなき身を。（皇后陛下御製）

○高きやにのぼりて見れば煙立つ民の竈も賑ひにけり。（仁徳天皇御製）

○生れては死ぬるものぞと心得て慈悲と情で人を助けよ。

○凍るなよはのなき母にたむけ水。（千代女）

○櫻さくひとへに彌陀のひがん哉。（支考）

○出る日と同じ年なり福壽草。（兎州）

二十六　攝受功德（修證義第二十五節）

大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし、率爾にすること勿れ、濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし。

此御文は修證義第四章發願利生の結文の一節であります、一應此御文を拜讀しますれば、前の數節に於て示された通り、菩提心の行願は最も尊とき菩薩行であるに依て、能々其道理を心得て常々大悲大慈の念に住し、其行願より現はるゝ衆生利益の功德を喜び敬へよとの御示しでありますから、別段に講演をする迄も無く、よく其意味が解つて居りまするが、併し仔細に此御文の深意を研究して見る時は、此短かき一節の中に自から格外向上の法門が開き盡されてある、此御文の深意を十分に咀嚼て自分の物とせねば、前數節に御示し下されたる菩提心の行願も、滿足に實現することが出來難いのであります、先づ初めに「大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すべし率爾にすること勿れ」とあるは、前數節の御文を結んで修行の着實なるべきことを示されたのである、三世の諸佛十方の菩薩は最初發心の動機及び修行の

方法に於ては、皆な夫々の因緣があつて本より一樣では無い、彌陀如來には彌陀如來特得の發心修行がある、釋尊には釋尊獨得の發心修行がある、獨り佛菩薩のみならず、古今の聖人賢人とても、志を立てられし原因や實踐の方法は、各々其趣を異にして居る、我等御互とても矢張同樣て、學問の力に依りて發心するもあり、信仰の力に依りて志を立つるもあり、逆境に處せしめに菩薩行を起すもあり、苦難の衆生を觀ぜし緣に依りて慈善事業を勵むもあり、十人十色種々樣々です、されど其歸する所は唯々衆生利益といふ大菩提心の行と願との力を離れたものは無い、釋尊の五百大願、彌陀如來の四十八願、觀音普賢等の十大願も、ツマり一菩提心の上に現はれた姿であります、佛菩薩と申しても、我等人間とカケ離れた御境界では無い、我等人間が正當なる順理的最大目的、言ひ換れば圓滿なる理想の實現したのが、即ち佛菩薩である、佛菩薩たらんことを以て目的とせざる者は、決して人の人たる道を完ふすることは出來ぬ、佛菩薩たらんことを目的とする者は、必然此菩提心を發さねばならぬ、菩提心の完全に發達して最高最勝の城に到つた御方が、眞の佛菩薩てありまする、六祖大師が、「佛を見んことを求めんと欲せば、但だ衆生を識れ、只だ

衆生の佛に迷ふが爲めなり、是れ佛の衆生を迷はすに非ず、自性若し悟れば衆生是れ佛、自性若し迷へば佛是れ衆生」と說き「眞如自性是れ見佛、邪見三毒是れ魔王、邪迷の時は魔、舍に在り、正見の時は佛、堂に在り」と示されしは、實に千古の格言であらうと思ふ、此處の道理をば能々心を靜め念を凝して思惟觀察するが肝要です、之を卒爾にしてウッカリと油斷する時は、佛法中に在り乍ら三惡道の種蒔計りする樣になります、卒爾にするとは、佛法を以て世渡りの家業としたり、菩提の行願を以て名を釣り利を占むるの資料とする樣な、不心得者のことです、此等は名前丈が佛法でも其實は極惡凡夫の心行と同じこと、名義丈は菩提心でも其實は株屋連が株騷ぎをするのと變りは無いです、故に佛法も世法も淨土も惡道も御互の心タッタ一ッ、一念の轉處に依て十界三千の相交々生じて來る、古歌に「花となり針ともなれる花いばらその心根に二つやはある」と、あるが如く、三界六道の相、全く自己一心の所變である、然らば此一心の本體はドンな物でござりませうか、元來姿も無く形も無く大きくも無く小さくも無く、生れもせず死にもせず悟りもせず迷ひもせぬ、平等圓融能く十方法界に充滿し、而して能く天地萬象を造り能く山河大地を現じ、無邊際に圓通し無間斷に活動して居る、此一心の本體を徹見するのが禪家の本領である、ダが此事は一朝一夕の談で無いから別に御話しすることゝ致さう、兎に角、我等の一心の本體は佛と同體、菩薩と同性、天地萬物と同一源であると心得るが宜い既に佛菩薩と同體同性なるが故に、自から廣大にして邊際なき大慈悲心の德を有して居る、此大慈悲心の德が三毒五欲の妄念に覆はれて、徒らに空中に幻翳を生じ鬼なき里に鬼を作り、我と我手で四苦八苦の巷に彷徨ふて居つたのが、我等凡夫の狀態であります、故に一旦飜然として煩惱の雲霧を拂ひし時は、忽然として大慈悲の妙德が現成し、自から菩提心の光りが全身に充ち滿ちます、是を濟度攝受の本誓願とも申すのであります、濟度とは、三界六道の荒海に沈んで居る苦難の衆生を濟ひ出して、佛果菩提の彼岸に渡すこと、攝受とは、「ヲサメウケル」と訓じまして、所謂平等大悲の念に住し、有りと所有一切の衆生をば寸毫の分け隔て無く悉くヲサメ盡くして、本誓願の中に受け込むことである、故に濟度攝受といふは自未得度先度他なる大菩提心の異名です、此菩提心が發りますれば、自分の身も心も全然御慈悲の結晶體となりますから、此眼も此耳も此手も此足も、悉く菩提心を運轉活用する機

關となります、此大菩提心大慈悲心は天地と其德を同ふし、萬物と其體を同ふして居るに依て、一度此心が現成すれば、未だ一人にも接せざる以前に、其德は既に天地に充滿し、未だ一指をも動せざる以前に、一切衆生は自から其敎化の大功德を被むるのであります、例せば眞實國家を愛し社會の公益に志さす者の如きは、縱ひ其身は陋しき巷の間に住み、其業は數ならぬ些細の事を爲さうとも、其一擧一動一進一退はヤガて盡く國家の爲めとなり社會公益の一分子と爲るものであります、是れ乃ち精神感應の力です、一反半反の田地を耕す農父でも、一紙半錢の商業を營む小商人でも、心に二つは無い、無形の精神の勢力は實に廣大なるもので、社會の安寧も國家の富强も畢竟其勢力の致す所です、此勢力が神佛にも通じ天地をも貫く故に靈驗利益も自から現はれて來るのである、古語にも「一華開けば天下皆な春なり、一たび發心すれば法界盡く道なり」とありまして、僅かに一片の花でも、能く天下の春を代表することが出來る、一念の大慈悲心は普く天地法界の衆生に利益を與ふるの功德がある、此功德こそ天地の德と一體、神佛の御心と一致する、乃ち無漏無爲の功德でありますから、一切諸の功德の中で最も尊とく最も勝れたるものである、此處を贊題の下の御文で濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし」とあるのであります、世の中で何にが一番美しいかといふに、濟度攝受の心程美しいものは無い、世の中で何にが一番有り難いかといふに、慈悲平等の心程有り難いものは有りませぬ、故に我等御互は急ぎて慈悲平等の心を發し、濟度攝受の誓を立てゝ、冥々の間に一切衆生を利益するの大功德を成就するを第一の樂しみとし、自分の大菩提心を禮拜し、自身で自身の大慈悲心を恭敬する樣にせねばならぬ、斯くしてこそ眞の獨立も出來、眞の自覺も出來るのであります、布施をするにも、直ぐ施す物品の分量や施さるゝ者の頭數の多少にのみ目を付けて、其功德の大小を論評する風があるから、動もすると形式一片に落入り、又は表面的に一のみ流れて、達磨大師の所謂「人天の小果有漏の因」となつて仕舞ふ、眞實菩提心慈悲心を發する時は、其心の其儘が冥々の間に一切衆生を利益し、天地萬物にまでてなければ、本當に菩提心の趣味を知ることは六かしいのです。

昔し空也上人が或る山中を通行せられし時、思ひも寄らず三人の盜賊が現はれて上

人を取り圍みつゝ、金も出せ衣服も脱げよと逼りました、其時上人はッく〳〵と盜賊の語を聞き又其姿を見て、勿ちハラ〳〵と涙を流し、殆んど堪えられぬ程の悲しみに沈まれました、賊共は顏見合せて打笑ひ、扨々汝は出家にも似合しからぬ者かな、唧、かの財物を惜みてそれを取られるのが夫程迄に悲しいのかと申しますれば、上人は靜かに口を開き、予は本より雲水の身なれば、金銀財寶一として惜しと思ふ物は無し、唯だ御身等がその樣な惡業を働かれなば、未來の果報は果して如何にやあらん、一時の欲情に引かれて萬劫の苦患を招くこと、返す〳〵も口惜きことにあらずや、佛の御目より見そなはせば一切の衆生は皆な佛の御子ならざるは無し、左すれば吾も御身も同胞兄弟なるぞかし、決して外事とは思はれず、扨も〳〵御氣の毒のこと哉とて、又さめ〴〵と御泣きなされました、此有樣に彼の盜賊共は、恰も電氣でも、打たれたかの如く、何んとなく有り難き觀念を起し、忽ちに菩提心の微光が兆したものと見へ、始めの勢ドコへやら、一物をも取らずに其儘スゴ〳〵と逃げ去りました、其翌日上人の菴に來り出家を願ふ者が三人程あつた、上人が其人々を御覽なされしに、是れぞ昨日上人を脅かせし三人の盜賊共にて、彼等は大地に手をついて悔悟の涙を流し、昨日圖らずも上人の御敎訓を被むり、恐かなる我身ながらも御慈悲の御語がシミ〴〵と骨髓に徹し、坐ろに從前の罪過を悔ひ玆に御弟子を願出づるとなりました、阿鼻地獄より外には行き處も無き罪業深重の我等なれど、願くは大慈大悲の眸を垂れ濟度攝受あらせ給へと哀願したてです、上人大に之を喜び給ひ、直に其願を許され永く御傍に於て佛道修行せしめられたといふ因緣があります、此因緣の如きは、正しく空也上人の大菩提心に依りて、惡人變じて善人と爲り魔王變じて菩薩と爲り、一切の衆生も自から其化益を被むるの功德を實現したものであります、明治の初めマダ文明の敎育機關が備はらざりし頃、山口縣周防國熊毛郡室積村に於て、小學校を新築せんとて、村內重立の人々が相集まり種々評議を凝したるも、大金を要することとて中々一決するに至らず深更に至る迄空しく相談に時を移し、何れ明日再び相談せんとて其儘解散になりました、此相談會を催せし家の下婢に「ふぢ」と稱する女ありしが、側らにて相談の模樣を聞き、深く大に感じまして、吾身は貧賤に生れて敎育を受くること能はず、無知無學殆ど人に生れた甲斐も無い程である、之に就ても世に兒童の敎育程緊要なるものは無い、然るに今日

の御相談が未だ御決定にならぬといふは、畢竟多くの金錢を要するが爲めなるべし、あゝ賤しき吾が身と申し乍ら、せめては一絲半錢なりとも御寄附を致し新築費の一分を補なひたしと思ひ、其翌朝に至り、自分が親より賜はりしとて常々秘藏せりし銀の簪を取出して、村役人の許に持ち行き、己れの志を伸べて何卒御經費の中に御加へを被むりたしと願ひ入れければ、村内の人々は深く其志に感じ、一同が非常なる憤發心を起し、皆な「ふぢ」女の行に倣ひ、吾も〳〵と特別に寄附する者が出來忽ちの間に一の小學校を新築するに至りましたそうです、何んと菩提心の功德は廣大なる勢力を有するものではありませぬか、身分輕き一下婢たりと雖ども、其菩提心にして眞實なる時は、堂々たる一村内無數の子弟や父兄までも、其化益を被りて、永く教育の恩惠に浴するに至る、我等御互は斯の如き功德を禮拜恭敬せねばなりませぬ、初學訓には「凡そ人と生れて、君の爲め親の爲め助けにもならず、又世間の用をも爲さずして、天地の道に少しの補もなく、人を憐む德もなく、又人を救ふの功もなくして、徒らに天地の物を損ひ費すは、禽獸草木の民用を助くるにも如かずと古人は云へり」と示してある、君の爲め親の爲め國家の爲め衆生の爲めにと盡す眞實心が、常住不斷に存在すれば、觸處々々に增長發達して、任運に自覺々他覺行圓滿の聖域に進むものであります、古人が「餘あるを待ちて人を救はば必ず人を救ふの日なし」といふてある通り、菩提心を等閑にして、形式的の慈善のみを志したならば、遂に其志を達するの機會は無いです、況や我が宗に於て教ふる所の菩提心は、佛より得るにも非ず、師に就て求むるにも非ず、人の爲めにするにも非ず時世の必要に促がさるゝにも非ず、即ち佛祖正傳の御戒法を相傳し奉る刹那に於て、自然に發得する本具佛性の孝順心慈悲心、是を菩提心と名くるのである、此心是れ佛、此心是れ法、三寶一體の妙功德は、此一心の中に圓滿具足して、無盡藏の作用を起すのである、佛の御心といふは大慈大悲の心である、神の御心といふは天地の道のまゝになられた心である、我慢邪慢の念を去り貪欲瞋恚の妄を離るゝ時、自から神の御心に感應し佛の御心に道交するのです「曇りなき三世の佛の影々も心の水にすまぬ日ぞなき」是に至つて我と佛との間微塵計の隔ても無い、是れぞ修證一如の妙境界といふのであります、今我等幸に斯かる微妙の法門に歸依し奉り、懺悔受戒の光明に攝取せられ、此身を捨てず此世を離れずして、大菩提心を發得し、自から一切衆生を利益

することの出來るといふのは、實に難値難遇の因緣ではありませぬか、故に此好因緣を喜び樂しんで、寢ても寤ても釋迦牟尼佛の恩德を思惟し觀察して、心を勵まし誠を傾けて其御戒法を信念受持し奉らねばなりませぬ。

參考

○如來もと菩薩の行を修する時、一發心も一切衆生を利益せんが爲ならざるなかりき、衆生界は無邊際にして、その中の衆生もまた、無邊なれば、如來の一々發心の功德もまた無邊際なり。（大資積經）

○菩薩は一切の相を離れて、菩提心を發すべし、色に住して心を生ずべからず、聲、香、味、觸に住して心を生ずべからず、無所住の心を生ずべし、もし、心住するあらば、すなはち非住と爲す。（金剛般若經）

○毎に自ら是の念を作す、何を以てか衆生をして、無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん。（法華經）

○大凡菩提心は、いかかして一切衆生をして、菩提心を起さしめ、佛道に引導せまじと、ひまなく、三業にいとなむなり、いたづらに、世間の欲樂をあたふるを利益衆生とするにはあらず。（承陽大師）

○發心とは、はじめて自未得度先度他の心をおこすなり、初發菩提心といふ。（仝）

○善根山上一塵も積むべし、功德海中一滴も漏すなかれ。（仝）

○泰山は土壤を讓らず、故に能く其大を爲し、河海は細流を擇ばず、故に能く其深を就す、王者は衆庶を却けず、故に能く其德を明にす。（李斯）

○君子は道を謀て食を謀らず、……君子は道を憂へて貧しきことを憂へず。（孔子）

○各自の天性に適したる最高等の職業に從ひ死期に臨みて毫も遺憾なかるべきの生活を爲せ。（シドニースミス）

○常に義務の爲めに犧牲に供する人は、卓絶に達するを得。（ラヴエーター）

○人の爲めに圖るは尊きことなり、再び助くる能はざる如き人を助けよ。（エーマソン）

○なか〳〵に人より物をおもふかな世をおもふ身の心づくしは。（後嵯峨帝）

○かの岸にわたらんものはあすか川さわりの淵や瀨になりぬらん。（俊成）

○おしなべて御法の花の咲きしより佛の身とは皆なりにけり。（慈鎮和尚）
○かきりなき三世のほとけのこゝろにてあくまで花を手むけつるかな。（雅好法師）
○何事もみなお恵みと歎びてひとつに照せみ光明の徳。（古歌）
○撫子や照るも曇るも花のため。（希因）
○みのるほど實のさがる稲穂かな。（失名）

二十七　願生娑婆（修證義第十六節）

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因緣あり、願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。

此御文は修證義の四大原則の第四行持報恩の章の最初の一節であります、毎度御話しに及ぶ通り、我宗安心の要機は、佛の大戒を相傳して佛の御弟子と爲り、佛祖の慧命を相續して此身此儘佛境界に安住するにて無く、道には古今の別はありませぬ、縱や此身は因緣業果の姿とは申し乍ら、宇宙の間に孕まれて眞如實相の法門中に活動して居る御互でありますれば、徹底生死即ち涅槃と心得て大信心を發し、佛性常住の孝順心慈悲心の光明たる御戒法を以て我身とも我心とも爲し得る境界と爲りますれば、所謂平生心是道て、尋常の作業爲業の其儘が、人生の歸趣を盡し佛陀の本誓を全ふすることゝなるのでございます、人生の歸趣とか佛陀の本誓とか申せば、大變六かしい樣てあるが、ツマル所は報恩の二字に止るであらうと思ひます、報恩とは御恩を報謝し奉ることてす、我等御互

の身は、抑も何に依て生れ何に依て生長し何に依て衣食住處を得、何に依て人生の快樂を受け何に依て未來永劫の大安心を成就することが出來るのであらう、皆な是れ父母の御恩、御國の御恩、社會の御恩、佛の御恩に依るのでございます、佛教では常に之を四恩と申します、實に此身は御恩の結晶體で此一生は御恩の賜であります、我等は斯かる大恩に依て生成活動して居る、若し此御恩が無かつたならば此身も無く此一生も無く此衣食住處も無く此安心解脱も快樂も無いです、故に我等は天然自然の務めとして此御恩を報謝し奉らねばならぬ、此御恩を報謝するのがヤガテ此身をして完全ならしめ此一生をして價値あらしむるのであります、智度論には「恩を知るは大悲の根本善業を開くの初門にして、人に愛敬せられ名譽遠く聞え、死して生天を得終に佛道を成ず、恩を知らざる者は畜生よりも甚だし」と御誡め下されてある、古語にも「恩あるに遇へば必ず報ず、故に臣となりては必ず忠、子となりては必ず孝」といふてある、實に報恩は萬德萬善の總府です、然らば其御恩を報ずるにはドウすれば宜いかといふに、唯々日々の行持を盡すのが眞に是れ報恩の正道です、行持とは「おこなひたもつ」と訓ずる、「おこなひ」とは身口意の上に正しき働きを起すこと、「たもつ」とは己れの本分を持ち己れの志を持ち己れの道德を持つ抔と申する時の持つの意味で、言ひ換ふれば、道を持ち守りて失なはぬことです、道を守りて之を身口意業の上に大作用を起す、是れ乃ち眞の行持である、道を持ちて之を行ふといふても、決して人世を飛び離れた氣高い御話しでは無い、男子は男子たるの道を持つて之を行ひ、女子は女子たるの道を持つて之を行ひ、君は君たるの道を行ひ、臣は臣たるの道を行ひ、父は父たり子は子たり主は主たり僕は僕たり、山は高く海は深く柳は綠、花は紅、法、法位に住して各々其本能を發揮し各々其本德を顯はし各々其本來の大目的を達する處に、宇宙絕待の妙理、天地最高の大道が現成し、佛性常住の孝順心慈悲心が歷々然として大光明を輝かし來るものであります、我等御互は動ともすると遠方に道を求めたがつてならぬ、南泉禪師は「平常心是道」と言はれてある、平常心とは眼に色を見て青黃赤白を識別し耳に聲を聞て絲竹管絃を了辨し、上に向ては其敬ふべきを知り下に臨んでは其憐れむべきを知る、茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫する處に、大道は殘る處なく活動して居る、親に對して孝を盡す時は此孝心が取りも直さず佛の御心である、君に對して忠を表はす時は此忠

心がソックリ其儘佛の御心をして佛の御心たらしめざるものは、貪瞋痴三毒といへる煩惱の塵垢が邪魔をするからである、唯だ憎愛なければ洞然として明白なり」て、三毒煩惱の塵を拂ひ我慢我執の刀をモギとりさへすれば、我等の平常心は圓滿なる大道の姿、佛法の形相てあります、此平常心が是れ道となつた時眞箇の行持が現はれる、眞箇の行持の現はれた時眞實の御恩報謝が出來るのてござい ます、古人も「君に事ふるの要道は身を修め德を立つるに始まり君の爲めに功を成すに終る」と申されて、己れの身を修め己れの德を立てゝ美しき人格を作り麗はしき品性を養ふた時が、御恩報謝の正門の開けて來た時なのてある、是を行持報恩と名けたのてあります、前の章には發願利生といふて、一切衆生を利益し濟度せんとの大誓願を發し、其誓願を無間斷に相續して衆生利益の行を營めよ、是れが眞の佛行ぞと御示し下されてあるが、今の行持といふも矢張利生の行を離れたものてはありませぬ、佛樣の御心は大慈大悲の外には無いのてあるから、佛の御心を以て我が心と爲し、其御心のまゝに身口意三業を働かせるのが、眞の菩提心、眞の菩薩行てある、治生産業といふも忠孝仁義といふも戒法相續の上から望むれば皆盡く菩提心菩薩行の光明片々てす、佛の御身より光明を放たれたといふは、一切衆生を利益し玉ふ御慈悲の作用のこと、又佛樣が御說法の時此大地が六種に震動したといふは、感化の力の廣大なることを稱したのてあります、我等（ とても眞實發願利生行持報恩の身となりますれば、佛樣と同じ樣に光明を放ち大地を動かすことも出來るのてあります、是の如き廣大なる功德を有する菩提心を發すには、三界二十五有といふ無數の世界の中に於て、我等人間が最も適當なる位地に立ち最も便宜多き身の上と爲つて居る我等人間に非れば容易に此菩提心を發すべき機會に遇ふことはならぬ、故に三世十方の諸佛諸菩薩は多くは此人間の身を受けさせ玉ひし時に、菩提心を御發し遊ばされてある、そこを「此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり」と仰せられたのてあります、南閻浮といふは我等（ の住んて居る今日ていふ地球のことてす、御經文を見ると此世界の中央に須彌山といふ山があつて、此山が世界の中心になつて居る、山の頂上が忉利天、その上にも無數の天界がある、山の半腹の四方に在るのが四天王天、海を隔てゝ東西南北に洲がある、乃ち東弗婆提洲、西瞿陀尼洲、北拘盧洲と それから南閻浮洲てある、其南閻浮洲が本文の南閻浮てす、閻浮は勝金と譯して樹

の名であると申すことです、此南閻浮洲即ち我等の生れた世界は、苦みもあり樂みもあり文明國もあり野蠻國もあり長壽の人あり短命の者あり、貧富貴賤千態萬狀であるから、一面から見れば優勝劣敗の舞臺であつて弱肉强食とも謂つべき淺ましき狀態もある、薄福少德の人からは隨分厭ふべく悲むべき點も少くは無い、縱や福德圓滿と羨まれる人にもせよ、却り來つて世間を觀すれば、猶ほ夢中の事の如して、假の浮世の果敢なき夢路、「盥より盥にうつる五十年」一旦無常の風吹き來りぬれば四大分散して跡を留めず、故に釋尊は「世は皆無常なり遇ふ者は必ず離るゝことあり」と仰せられた、古人も「草のうへにをかぬばかりぞ露の身に風まつほどの假りのやどりば」と詠じてある、是れ古今東西に通じての人世の有樣であります、だが其苦み多く憂ひ多き浮世の仇波が天然自然の大敎訓と爲りて、我を勵まし我を警しめ我を敎へ我を導きて、我等の爲めには知識を磨き道德を進め世を助け人を救ふの大行願を發すべき好因緣を與へて呉れるのであります、兎角人間は順境に在る時は眞實の志も壯烈なる勇氣も起り惡いものであるが、一旦逆境に立つとか若くは悲慘なる事柄に接する時、忽然として大菩提心を生ずることがある、徐りに樂過ぎる人には寧ろ道

念が薄く、浮世の荒波に觸れた人に却て美しき人情がある樣に思はるゝ、其證據には圓滿なる敎育家慈善家ともいはるゝ樣な人は、大概自身は非常なる困難を嘗めて居るか、又は他人の艱苦を自己の事の如くに感ずるかして、能々世の中の事情にも通じ、其心の中には忍ばんと欲するも忍ぶ能はざるものあるを認むることが出來る、言へ換れば盡く悲惱の涙を持て居らぬは無い古の忠臣孝子仁人義士貞女烈婦も皆此涙の結晶た人々といふても宜いであらうと考へる、諺にいふ「可愛い子には旅させろ」て、此世の苦痛困難が却て菩提心を發するの機會を與へて呉れるのである、「今是の如くの因緣あり」て、我等御互は幸にして人間の身を受くることを得て、最も菩提心を發するに適當なる因緣を有して居るとすれば、御互の身の上程幸福なる果報は無いではありませぬか、次の御文には「願生此娑婆國土し來れり」とありて、我等は全く夙世に於て植え置きし善因緣の力に因りて此娑婆世界に生れて來たのである、人間の此身こそ正しく過去幾億萬劫より願ひに願つた果報を受けたのである、加之「見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや」て、親しく釋迦牟尼佛の御法に逢ひ奉りて大戒相續の御弟子と爲り、恰も面り釋迦牟尼佛を見奉るも同然の身の上てありますから、深く自ら

此身の果報を喜んで、深く自ら此生の幸福なるを悦び自ら其身を尊び其果報を重んじて、苟めにも此光榮ある生涯をムザ〳〵と過ごす様なことを致してはならぬ、サア此處に氣が付きさへすれば、一寸の光陰をも等閑にせず、急ぎて眞の行持を勵み以て人生最高の大目的を全うせねばなりませぬ、娑婆といふは梵語で忍土と譯してある、忍土とは堪忍の國土といふことです、又堪忍を離れては一日でも人間として存在することが出來ぬから、娑婆と名けたのです、人間は自然的に堪忍の力を有して居る

てある、天には不測の風雲あり地には不慮の災害あり、季候には寒熱あり日月に明暗あり、人に善惡あり花に開落あり、若し之を忍ぶの力なかりせば暫時も人間の役目は務まらぬ、克己復禮の教、修身齊家の道、都て堪忍の德に依らぬは無い、釋尊一代の聖教も堪忍の力で無ければ活動せぬ、故に悲華經には、「何んが娑婆と名くるや、此諸の衆生三毒及び諸の煩惱を忍受し、能く此惡を忍ぶが故に忍土と名く」とあります、我等は先天的に堪忍といふ大荷物を擔いて生れて來たのぢや、アヽ堪忍なる哉、堪忍なる哉、我等は堪忍の國土に生れて堪忍の務を負ふ者ぞと平生覺悟して居さへすれば、人間一代の行程、其道萬差なりと雖も、慙くことも怨むことも無い

等です、娑婆とは實に能く名付けたではありませんか、法華經には忍辱の衣といふて、堪忍を着物に喩えてあります、人間は如何なる美人でも裸躰では見られたもの

ては無い、如何程熱い時でも着物なしには居られませぬ、其代り如何なる醜婦でもキチンと着物を被て禮を行ふ時は、必ず相當の品格が備はるものです、左すれば着物といふものは我身を飾る第一の要具である、堪忍の無い人は萬事に就て成功の出來ぬのみならず、一切の惡德は多く堪忍の無きより發生して到らずといふこと無し、故に寒暑と晝夜の別なく着物を着くるが如く、寢ても寤ても堪忍の衣を離してはならぬ、畜生抔は此堪忍といふ德を持たぬ、犬や猫が人前て遠慮する樣なこともあれど、あれは堪忍より出づるに非ずして恐怖より生ずるのである、恐ろしいから我慢して居るのである、故に人間と畜生との區別は堪忍の有る無しに依て分ると申しても宜いぢや、釋尊の如きは悉多太子といふ貴とい御身てあり乍ら、四門御遊觀の折老病死の三苦を實驗せられ、それが近き因緣となつて檀特山の雲に分け入りて修行の功を累ね玉ひ、菩提樹の下に明星を一見して、遂に智德無限の光明を發揮遊ばされた、是れぞ人生苦難の狀態に促がされて堪忍の德を現はされたのてあります、御開

山承陽大師は八歳の御時に母公の喪に御逢ひなされ、棺前に立ち上る香の煙を見そなはして無常の理を觀じ、それが動機と爲つて比叡の山風に御衣の露を拂ひ、遂に見性成佛の大聖と爲られました、是れ亦た堪忍力の最も大なるものであります、人間の如來は人間に同じて居らるゝ如く、我等も釋尊も決して別種では無い、太祖國師も「たゞ諸人の精進と不精進とによりて諸佛頭出頭沒せるのみなり」と仰せられた通り、唯だ志の深い淺い勉強の強い弱いに依りて佛ともなり凡夫ともなる、御開山も我等も根本に於て大差は無い、唯だ信念の厚い薄い堪忍力の有る無しに依りて悟と迷ともなるのでございます、今我等は夙善の助くるに依りて、既に受け難き萬物の靈長たる人間の身を受け、既に遇ひ難き萬國の極宗たる佛法に遇ひ奉つれり、何の幸が之れに過ぎん、何の喜びか之れに加へん、此幸多くして喜こぶべき心身を徒らにせず、順緣に接する時も逆境に觸るゝ時も、毫末の油斷なく急ぎて清淨の菩提心を發せらるゝ樣致したいものであります、業障の雲深しと雖も至心懺悔の風は之を拂ふて痕跡を遺さず、大覺の海廣しと雖も正傳大戒の船は我を載せて邊際を究む、菩提の行願は無邊の利益を一切の衆生に頒ち佛法の行持は最勝の報謝を四種の大恩に報し、治生産業も妙修の功德を現はし造次顚沛も本證の光りを放つことゝ相成りまするぢや、斯の如き境界を成ずるのも盡く是れ釋迦牟尼如來大慈大悲の御賜であれば、取分け其廣大の御恩に感泣し、行住坐臥の間にも御恩報謝の行持を勵み以て佛弟子たるの本分を全うして貰ひたいのであります。

參考

○諸佛の一切の功德は皆初發調伏心中（むるはじめさ）にあり、ゆえに菩薩は、世間に遇ひ難く、佛もまた値ひ難し、たとへば、牛なければ、すなはち醍醐なきがごとし、もし菩薩發心なければ、すなはち佛種なし、發心を難しと爲す、發心難きがゆえに、佛もまた得がたし、たとへば海賈に無價のもの少く、餘寶甚だ多きが如し。（華手經）

○何んが娑婆と名くるや此諸の衆生、三毒及び諸の煩惱を忍受し、能く斯の惡を忍ぶが故に忍土と名く。（悲華經）

○善法を修習し、諸の實相を證し深く禪定に入て、十方の佛を見奉る。（法華經）

○大悲世尊、所說の利益は、皆已に究竟す、（中略）又善く導くものゝ人を善道に導く

が如し、之を聞て行かさるは導くものゝ過にあらず。（佛遺教經）

○我滅後に於て、當さに波羅提木叉を尊重し珍敬すべし、闇に明に遇ひ、貧人の寶を得るが如し。（同經）

○この心（菩提心）を起すより後、さらに、そこばくの、諸佛にあひたてまつりて供養したてまつるに、見佛聞法し、更らに菩提心をおこす、雪上加霜なり。（承陽大師）

○佛法に値ひ奉ること無量劫にて難し、人身を得ること難し、設ひ人身を受くるとも雖も、三洲の人身好し、其中に南洲の人身勝れたり、見佛聞法出家得道するゆえなり。（承陽大師）

○いまの此經典にうまれあふ、見釋迦牟尼佛をよろこばざらんや。（承陽大師）

○進めよ、進め、汝の遭遇せる困難は汝が進むに隨て自ら解散せん、進め然らば、一條の光明は益々燦然として、汝の行路を照すべし。（佛國天文學大家アラゴー）

○しづかなる光のみこそ隈なけれいかにいふべき都なるらん。（慈鎮和尚）

○見ぬ昔なるは佛の身なりけりその身は人の心にそすむ。（同）

○生れくることこそもとのふるさとを迷ひし道になにか歸らん。（實隆）

○極樂をねがふおもひのけふりこそむかひの雲とやがてなるらめ。（源信）

○うれしくも人と生れて御佛のさとりの道もこれよりぞ入る。（行誡上人）

二十八　尊重般若（修證義第二十七節）

靜かに憶ふべし正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲に拋捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや、佛の言はく、無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れと。

前節に於ては、三世の諸佛は此娑婆世界に生れて人間の身を受け玉ひし時に、眞正の御發心をなされた、我等も幸に此人間の果報を受け、殊に釋迦牟尼如來の御法に遭ひ奉りしは、またと得難き發心得道の好機會なるぞとの御敎訓であります、此一節にては、取分け佛法に逢ひ奉りし因緣の等閑ならぬことを御示し下されたのである、凡そ世の中の事は何事にも皆夫々の因緣のあるもので、諺にも「つまづく石も緣のはし」又「袖すり合ふも多少の緣」抔と申すが、途中て袖と袖との觸れ合ふも、目と目とて見合ふのも、盡く幾分かの因緣が存して居るに違ひ無い、風の吹くのも雨の降るのも花の開くのも葉の落つるのも、決して偶然とは言はれぬ、必ずや相當の因緣に依らざるは無い、人事の上から云ふても同樣で、親子となり夫婦となり兄弟となり朋友となり、又は同く帝國の臣民と生れ、同く至公至仁なる君主を戴き奉り、同く同胞兄弟と稱せらるゝが如きは、決して一世や二世の因緣では無い、過去の過去際より深き關係が相續して玆に至つたものと心得ねばならぬ、一河の流を掬み一樹の蔭に宿るさへ常々ならぬ因緣ぞと思へば露聊かも疎略には致されぬものである、況てや幾千萬里の山河を隔て、三千年の歲月を歷たる大聖釋迦牟尼如來の御法をば、面り見もし聞もしして、是に依て無始劫來の迷の夢を覺醒し、是に依て未來永劫の大安心を決定するといふは、並大抵の因緣では無い、故に贊題の御文の初めに、靜かに憶ふべし正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲め拋捨せんことを願ふと も値ふべからず、」と仰せられたのであります、雪山童子は山中の鬼神より僅かに「諸行は無常なり是れ生滅の法なり」と云へる二句の偈文を聞きて喜びに堪へず、更に次の二句なる生滅々し已つて寂滅を樂と爲す」と云へる文を聞かんが爲めに、身を鬼の口に投ぜんとせられたとは、涅槃經に說き玉ひし因緣である、又常啼菩薩は身命を

睹して般若を東方に求め玉ひしとは、大般若經の説てある、又支那禪門の二祖慧可大師は魏の嵩山に上りて達磨大師に參じ玉ひし時、大師一言の御説法を聽聞せんが爲めに、左の腕を斬つて大師の面前に捧げて其志を示し玉ふたと云ふではありませんか、若し佛の正法が此世に傳はらざりせば、斯く身を棄て命ちを捨てゝ之を求めんと欲するも猶ほ遇ふことの叶はぬものであある、縦ひ我が國の如く佛法流通して居らうとも、因縁の薄き者は滅多に聞き奉ることは出來ぬ、我が五千萬の同胞中に於て眞に能く佛法の功徳を信ずる人は果して幾許でありませうぞ、見物心で御寺詣りをしたり、病氣平癒位の目的て百度參をしたり、淺草の花屋敷を見た次てに觀音堂に立寄るとか、豆撒を見る爲めに成田不動堂の境内に入つたとか云ふ樣な連中は隨分澤山あるであろうが、佛祖正傳の大戒を相續して、身口意三業の罪垢を淨め、生々世々を期して大菩提心を發すといふ樣な方は曉天の星よりも稀れてはあるまいかと思はれる、佛法の中に居り乍ら佛法の味を知らず、佛の御傍に住み乍ら佛の光明を感ぜぬ人の多いのが今の世の有樣てあります、して見れば「正法に逢ふ今日の我等を願ふべし」て、我等こそは實に喜びても猶ほ餘りある身の上てはありませんか、故に此「願ふべし」と仰せられた御語は深く味ふて見ねばならぬ、我等は既に即身成佛の大因縁を結んだ身てある、飛生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入るて、最早三世諸佛の御仲間入の濟んだ身てある、此上に徒らに心外に法を尋ねて別に佛國土を求むるには及ばぬ、ドコ〳〵迄も今日の如き結好なる果報を願ふて、生々世々娑婆世界を離れずして大菩提の行願を圓成することこそ、本望中の本望てありませんか、後嵯峨天皇は一天萬乘の君主て在し乍らも「なか〳〵に人より物を思ふかな世を思ふ身の心づくしは」と御詠じ遊ばされてある、御身が貴とければ御誓願も亦た一層廣大てある、十方三世の諸佛諸菩薩は御一人として斯る大願を發し玉はぬは無い、自分一人丈極樂に往生して七珍萬寶の盛に上り、百味の飲食に飽き不老不死の樂しみを受け樣などゝは、餘りに得手勝手な考と言はねばならぬ、釋尊が極樂往生を御勸め下されたのは、別に深き御教訓い存することて、決して自分一己の安心快樂を御勸め遊ばされたのでは無い、一部一卷の御經文を拜讀するにも能々佛の御思召を酌み分ける力が無いと、飛だ畳見違ひに陷ることがあるものてす、次に「見ずや佛の言く無上菩提を演説する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ容顏を見ること莫れ、乃至

但般若を尊重するが故に日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむることも莫れ」といふは、佛の正法に値ひ奉りし因緣を喜び願ふ人々は、其正法を見聞するに重々の心得あることを、佛語を引て懇篤に御示し下されたのであります、無上菩提とは此上も無き佛の道といふことである、幸に無上の佛道を演說する人に遇ふことを得たならば、心を空虛にし念想を靜めて單刀直入に佛の御本懷を聽取りて佛法の眞實義を信受する樣に致さねばならぬ、其演說する人の種姓といふて氏や素姓がドウであらうと、そんなことを觀て貪着する樣では役に立たぬ、又容顏とて顏色や容貌が醜くからうが美しからうがそれにも關係ふてはならぬ、又其人に非理い事があつたにもせよ、其平素の行が宜しからぬにもせよ、其等の事を嫌ふにも及ばず考へ糺す要も無い、そんな表面の事柄が目に付て邪魔になる樣では、迚も眞實の發心は得られませぬ、其人の如何を論ぜず只だ其法の眞實を喜ぶが宜い、縱や惡魔であらうと非人であらうと貧者であらうと小兒であらうと、其說く所の佛法が眞正であつたならば、至心に其法を尊とび重んじて之を敬ふ樣にせねばならぬ、唯般若を尊重するが故に、日々三時といふて朝も日中も晩も之を禮拜し恭敬して、唧、かても忠

惱といふて厭ふたり嫌ふたり退屈したりする樣なことがあつてもならぬ、般若は梵語此に智慧と譯してある、乃ち佛樣のお悟りのことぢや、大小顯密一切の藏經は盡く佛樣の御悟りの說明に過ぎぬ、佛敎を尊とぶのは佛の御悟りが尊といからである、其尊とい御悟りを聞き奉るには虛禮や虛飾は要らぬ、形式や體裁は第二第三である、唯々佛の御本懷をとつくりと呑込むことが大切てある、古の佛菩薩は或は野干より法を聞き或は鬼神より法を聞き或は非人より法を聞き或は眷族より法を聞き玉ひしも、法を重んずること切なるが故に、之を說く人の何者なるかは殆んど忘れたるが如くであらせられた、佛法を求むるに熱心なる人、眞理を尋ねるに忠實なる人は是非こうなくてはならぬ、尤もこれは聞く方の人の心得を示されたものぢや、若し說く方から申せば、苟も佛法を說かんと欲せば必ずや相當の品格と態度とを具へ、眞に法を重んずる者は自己をも重んずべきは當然のことてある、此邊は能所共に注意し用心して、佛法の影法師ばかりを穿鑿せず、直下に修證の大本領を捉へる樣にして貰ひたい、高祖大師の御偈に「飮水の鵝は能く淳味を取る採花の蜂は餘香を損せず」といふ句がある、是れ譬喩てす、鵝鳥といふ鳥は如何なる濁水の中にも浮び、其中

て能く淳味といふて滋養と爲るべき好き味のみを取て、芥や塵は飲まぬ、又蜜蜂が花より蜜を採るにも決して花の色香を損せぬ、佛法を求むる者もこうでありたいものである、言語や形に取付ずして唯だ佛法の正味を領解し、毫も表面の事柄には貪着せぬが宜い、然るに世の中には肝心なる佛法の本意はソッチ除にして、徒らに役にも立たぬ佛法中の塵や芥のみを覚へたり、姿の色香のみを追ひ廻る者が多いものである、實に情け無いことではありませぬか、誰やらの書いたものゝ中に、法を聞く者の耳に三通の種類を掲げてあつた、第一は籠耳て是は右の耳から入つて直ぐ左の耳に抜けて少しも心に留らぬ者のこと、第二は笊耳て是は味噌濾笊の様に正味の處は皆下に漏れて滓斗り残る人のこと、第三に巾着耳て是は正味の御賓を内に収めて外へ漏れぬ様に口をしめて置く人のことてある、籠耳と笊耳は甚だ感心せぬ、どうか御互は巾着耳を以て法を聞かねばならぬ、其志專らにして法を求むること切なる時は、老子に所謂、「善人は不善人の師、不善人は善人の師」て、善人に接すれば自ら其善を學び、惡人に接すれば自ら其惡を誡め、見るものも聞くものも盡く教訓と爲り警誡と爲りて益々己れが智徳に進むるものてある、昔し泉州の境に休翁といふ人がありました、茶禮等に精しく、且つ慈悲心ありて召使ひ抔をいたわること兄弟骨肉の如くなりしかば、仕ふる者も親の如く敬ひました、こうゆう有様てあつたから家庭は極めて圓満て家運も益々繁昌したてす、或時京都に上りて某の大納言に見えける時、大に敷島の道を勧められ、人として文雅の心懸なく歌よむことさへ知らねば、聲なき鳥を麗はしく描書したる籠に飼ひたると同じく、殊に豪商の主たる者は、文雅風流のたしなみなくんば、日々の事業偏執に傾き易く、更に和ぐといふことを缺くべし、抑も身を修め家を齊ふるは聖人の教へ玉ふ所なり、此教へを守らんには和らぐことを要とす、和らぎて後は禮を以て其節を正しくすべし、是れ人を躓服せしむるの道なりと言はれければ、休翁大に感じ是より和歌を學びて後には名高き歌人となりました、休翁或時古今集の序を讀みしに、紀の貫之が文屋康秀の讀みたる歌を評して「ことば巧にてその様身にそはず、いはゞ商人のよきゝぬきたらんが如し」とあるを見て深くも之を感じ、それより節儉を施して絹の類は一切身につけず、家族一同と共に木綿のみを用ひ、孫子にまでも此掟を守らしめければ、家業は長へに繁昌致したといふことてす、眞理は遂に一つてある、歌道を論じたる文章の一節

も、其即を究めて正當に應用する時は修身齊家の大本と爲るのみならず、是に依て金剛不壞の大安心を決定するの因緣を成ずることもあるぢや、加州金澤の俳人秋の坊は夙に風流の聞えありて頗る脫俗の生涯を送つた人である、湖南を過ぎて芭蕉翁を幻住庵に訪はれけるに、翁は盡く喜ばれて、ムサくるしき小庵なれど心置なく逗留あれよとて、「我宿は蚊の少なきを馳走かな」の一句を詠ぜられた、秋の坊も亦た翁の志を感謝して暫く茲に止まり、一簞の食を分ち一瓢の飮を共にし、山雲海月の樂は自から其中に在つたてあらう、辭し去るに及んで翁は山の麓まで送られ彌々袂を分つに臨み、翁は送別として「やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲」の一句を贈られた、翁といひ秋の坊といひ唯だ天眞の風流を樂んで毫も形骸の爲めに累はされぬ趣がアリ〳〵と見える樣ぢや、秋の坊の故郷に返りし頃は降雪繽紛として朔風膚を劈くの光景てありしが、三衣一鉢の外一物の寒さを凌ぐべき無し、偶ま萬子といふ人を訪ふて木炭を無心せんとて寒ければ山より下を飛鴈に物打荷ふ人ぞ戀しき」といふ歌を讀みしに、萬子は直に「寒ければ山より下を飛鴈に物打荷ふ人をこそやれ」と答へて木炭を贈つて呉れました、山より下を

飛鴈に物打荷ふ人とは炭の字を讀み出したのてす、斯くて秋の坊は正月四日といふに死んだ、其日恰も友人の李東が尋ね來りて平生の如くに面白く談笑してありしが、不圖思ひ出した樣に、李東に向つて、私は新らしき曆を作つたに依て聞て呉れ玉へとて「正月四日よろず此世を去るによし」といふ句を讀むや否や、其儘目を閉ぢて奄然として死んて了ふた、流石の李東も大に驚き、一は無常變遷の速かなるを感し、一は秋の坊の生死岸頭に大自在を得たるを歎じて「稻つむと見せて失けり秋の坊」といふ一句を詠じて遺骸に手向たといふ話がありまず、眞に能く風流を樂しむ人は決して物質的の束縛を被らぬ、眞に能く歌道に志す者は浮世の塵を離れて天眞の妙樂を得るものである、況てや難値難遇の佛法に逢ひ奉りて生々世々の好因緣を結ふといふ、最も尊とき身の上となりし御互は、寢ても寤ても自らの果報を歡喜し踊躍して、益々身口意の三業を淨めて懺悔の功德を圓成し、佛法僧の三寶に歸依し奉りて佛戒相續の因緣を保任し、衆生利益の誓願は境に觸れ物に接し、彌々堅固と爲り、四恩報謝の行持は時に隨ひ機に應じて益々精進し、一刻も早く修證一如の彼岸に到達せんことを願はねばなりませぬ、我本師釋迦牟尼如來は此娑婆世界に來り玉ふこと八千

返、我等衆生を濟度せんが爲めに、艱難をも艱難とし玉はず辛苦をも辛苦と思召さず、我等を導くに受戒入位の法門を以てし玉ふ、其深大なる御恩德に比ぶれば須彌も高しといふべからず滄海も深しと稱すべからず、故に佛祖の正法を信受奉行する我等は、一層厚く釋迦牟尼如來の恩德を感謝し奉るこそ、信念相續、行持精進の大事であろうと思ひます。

參考

○一切の凡夫は衣食臥具に著し、身の爲めにせずして但法の爲にす。（涅槃經）

○菩薩この深般若波羅蜜を受持し、乃至憶念するとき、未だ佛前に刼數の記を受けずといへども、この菩薩は、自ら近く菩提の記を受くること、久しからざるを知る。（大品般若經）

○たゞ般若を尊重するがゆへに、日々に百千兩の金を食せしむべし、天食をおくりて供養すべし。（承陽大師）

○むかし野干を師として禮拜問法する、天帝釋あり、大菩薩の稱つたはれり、依業の尊卑によらず。（同）

○無上菩提のため、何ぞ得法のうやまふべきを敬はざらん、これ法を重んずる志淺く、法を求むる志あまねからざる故なり、すでに寶をむさぼるとき、女人の寶にてあれば、得べからずとおもはず、法を求めんとする時は、この志にはすぐるべし。（同）

○四河海に入つて亦た本名無く、四姓出家して同じく釋氏と稱す。（同）

○黃金の粟を白銀の盌にもりみて、あるひは七寶の粟を金銀の盌にもりみてゝ供養したてまつる。（同）

○ほとけを供養したてまつらんとするに、その身まづしと云ふことなかれ、そのいへまづしといふことなかれ、みづから身をうりて、諸佛を供養したてまつるは大師釋尊の正法なり。（同）

○賢を求むるに德を以てし、聖をいたすに道を以てす。（三略）

○惟り仁者は能く人を好みし、能く人を惡くまず。（孔子）

○無禮は傲慢の極度にして、人間を輕蔑するより起るものなり。（チメルマン）

○崇敬の心と慈悲の心との二が、年を積み時を累ねて其の大をなすにあらずんば、大人とは云ふべからず。（テニソン）

○法の爲め身をば薪になしてこそきゑても消ゑぬ烟なりけり。（行誡上人）

○けふひける駒ののりこそかしこけれ佛の道に逢坂の關。（古人）

○佛にも變らぬ姿得るの身はあやしかりける契ならずや。（同）

○法の爲め國のためにはをしからず遠き島邊によし朽るとも。（東紫師）

○消えやすき我身にかへて尋ねみん妙なる法の道しばの露。（大僧正乘雅）

○六つの道いく世もしらずめぐり來て今此の法に逢ぞうれしき。（よみ人しれず）

○あしゝとてそしりやはすな恩を得てゐのが身をおく國のおきてを。（最明寺殿）

○身を捨てし雪の深山の雪よりもふかきは法のみとりなるらん。（行誡上人）

二十九　見佛聞法（修證義第二十八節）

今の見佛聞法は佛祖面面の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば奈何にしてか今日に至らん、一句の恩尚ほ報謝すべし、一法の恩尚ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや、病雀尚ほ恩を忘れず、三府の瑕能く報謝あり、窮龜尚ほ恩を忘れず、三府の瑕人類爭か恩を知らざらん。

此一節の御文は前節の御垂訓に引續いて、我等御互が今日幸にして見佛聞法の勝緣を結ぶことを得たるは、皆是れ佛祖廣大の慈恩に依るものであるからして、縱ひ身命を拋捨するとも誓つて此大恩を報謝し奉つらねばならぬぞといふことを御示し下されたのであります、故に最初の御文に今の「見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり」と仰せられたのである、見佛聞法とは我等が親しく佛を拜み奉つり、又佛の御法を聞き奉つることであります、前節に於て委く申し述べた通り、若し我等が不幸にして佛法弘通の世に生れざりせば、縱ひ此身を捨てゝ法を求めんと欲すると

も、猶ほ一句一偈をだも聞き奉つることは出來ませぬ、然るに斯く安々と佛の御前に禮拜して座ながら佛の正法を聞き奉ることを得るといふは、實に是れ生死の中の善生、最勝の生と申すべきである、而して是れは誰の御蔭に依ることぞといふに、佛祖面々の行持より來れる慈恩なりて、古の佛樣や祖師方が身を捨て命を棄てゝ、此大法を修行し證得し面受し面禀せられたる行持の賜であることは申す迄も無い、釋尊因地の御修行はドンなであつたらう、達磨大師や御開山の御艱難はドンなであつたらう、御開山大師が坐禪といへる題にて詠せられた御歌に「いたゞきに鵲の巢やすくふらん眉にかゝれる蜘蛛の絲」とあります、是は正く釋尊因地の御修行を讀み込みなされたのであります、釋尊が因地に於て山中に坐禪觀法せられた砌、鵲といふ鳥が御頭の上に巢を作つたことがある、釋尊が定を出でゝ之を知り玉ひしが、今此處に於て身體を動かす時は、あわれや鵲の巢は必ず破れるに相違ない、如何にも不便至極の事なりとて其儘再び定に入り玉ふて、遂に鵲の雛が產るゝまで出定せられなんだとある、又下の句は釋尊が六年苦行の折、眉毛の處に蜘蛛が絲を張て巢ふことがある、さゝかにとは蜘蛛のことです、釋尊は是をも厭はせられず却て一層御憐れみ遊ばされたとある、又達磨大師は佛祖嫡傳の禪風を弘通せんが爲めに、百歲以上の御老軀を捧げ航海三周を經て支那に來られ、錫を嵩山の少林寺に駐め面壁九年の行持を遊ばれた、御開山大師は大小顯密の經論に精通せられたるにも拘はらず、御年二十四の時遠く宋土に渡り、諸方を遍參して遂に天童如淨禪師の輪下に投ぜられ、前後三年の御辨道、從晝至夜脇席に着けず、暫時も御眠り無く御參究なされたとある、其他、西天の初祖迦葉尊者は十二頭陀といへる難行を修せられ、釋尊が半座を分ち玉ふ程の聖域に上らせられても猶ほ難行を休み玉はなんだ、支那の六祖大師は黃梅山に上りて八ケ月の間、晝夜米を搗きつゝ工夫を凝らし玉ひ、雲巖禪師は四十年間脇を席に着け玉はず、百丈大智禪師は五百人の善知識となりても猶ほ大衆と與に洒掃に從事し、一日作さゞれば一日食はずといへる教へを垂れさせられ、趙州禪師は六十一歲にして初めて行脚の途に上り玉ひ、難行苦行二十年、說法化導四十餘年とある、過去の諸佛や三國の祖師は皆な是の如く大法を求め佛道を究められたが、其御目的は唯だ一切の衆生を濟度し盡さんとの大慈悲心に在るのである、若し此等の佛祖在まさゞりせば、爭てか眞實の佛法が今日まで流傳すべきや、故に次

の御文に「佛祖若し單傳せずば如何にしてか今日に至らん」と仰せられたのであります、斯る大恩ありと知りなば「一句の恩尚ほ報謝すべし一法の恩尚ほ報謝すべし、況んや正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せざらんや」て、僅かに一句を授かり一法を傳へられた丈ても、猶ほ且つ其の御恩を忘れずして之を報謝するこそ眞の人の道てある、況てや正法眼藏無上大法の大恩といふて、此上も無き貴とい大法を相續し玉へる大恩をば、どうして報謝し奉らずに居られませうぞ、正法眼藏とは、正法は正しき御法で乃ち佛法のことてす、眼を以て明らかに萬物を見る事が如く、正法の上に開きたる智慧の眼は、能く生死の根源、天地の本體、人々本具の佛性までも徹底見拔く程の妙用あるが故に眼といふたのてある、又藏は寶藏て德の換名てす、藏には諸の寶を收め時に從つて之を運び出すが如く、正法の上に具はる道德の藏には、諸の善根功德の寶を收めて自利利他の上に自在に之を運用するが故に藏といふたのてあります、故に正法眼藏とは佛祖正傳の佛法のことてす、我等は何の幸ぞ、坐ながら此正傳の佛法を見もし聞きもしゝて、飽まて之を信じ奉り飽まて之を行なひ奉ることを得らるゝといふは、御開山が「この生命は前來の行持の餘

慶なり行持の大恩なり」と仰せられた通り、正しく佛祖廣大の慈恩に依るのであります、次の御文に「病雀尚ほ恩を忘れず三府の環能く報謝あり窮龜尚ほ恩を忘れず餘不の印能く報謝あり」とあるは、前の廿三節の「窮龜を見病雀を見し時彼が報謝を求めず唯利行に催さるゝなり」といふ處に於て委く御話しを致して置た通り、古へ支那の楊寶といふ者が華陰山に於て病に苦しめる雀を救ひしに、其病雀が童子の姿で楊寶の枕邊に現はれ、四箇の白き玉の環を呈して、且つ貴君の子孫が出世して三府といふて宰相の位に昇らるゝと此環の數の如くならんと申したが、其豫言に違はずして楊寶の子孫は四代續いて三公の位に登つたといふことてす、是れ乃ち病雀の御恩に報ひたる因緣てある、又晉の敬康が餘不亭といふ處て困らず人に捕へられて困窮して居る大龜を助け、後に其土地の領主と爲つた時、餘不亭侯の印といふ役印を錆らせた處、其印の鈕と爲るべき龜の首が、左へ傾いて居るから數回錆直させたがどうしても、首が正眞に出來ぬ、而してそれが龜を助けた時の姿に寸分違はぬ處より、是れ必ず彼の龜が我を守護する徵證なら んとて、首の曲つた儘用ゐたとある、是れ乃ち窮龜が恩に報ひた因緣てあります、

故に後の御文に「畜類尚ほ恩を報ず人類爭てか恩を知らざらん」と結ばれて、雀や鴈の如き畜生ですら是の如く御恩を報謝する例もあるに、萬物の靈長たる人間が御恩を忘れては相成らぬぞとの御誡めであります、て、御恩の深大なる以所を知りて能く之を報謝するのが大聖人の道てある、御開山大師は「世人のなさけある金銀珍玩の蒙惠尚ほ報謝す、好語好聲のよしみ、心あるは皆報謝のなさけを勵む、如來無上の正法を見聞する大恩、たれの人面が忘るゝ時あらん、是を忘れざらん一生の珍寶なり」とも仰せられ、聊かの金子を惠まるゝさへ其恩に酬ゆるの志がなければならぬ筈のものです、況てや無量劫來の罪障を消滅して今生後世の功德を成就し、此身此儘佛果菩提に證入するといふ甚深微妙の法門を開示し玉へたる大恩は、生を易へ身を易へても報謝し奉らんことを誓はねばなりませぬ、之を今日の交通機關其他文明の利器に例へても能く解ることです、交通の上は陸に汽車電車人力車あり、海に汽船あり、通信の上では新聞あり電信あり電話あり郵便あり、智を磨くには學校あり、病を癒すには病院あり、文明國の有り難さは坐ながらにして全世界の所有機關を應用することが出來ます、併し其本はと尋ぬれ

ば鐵道を敷き汽車を通ずるにも、其勞力と金力とは幷一通りては無い、洞門一つても幾千萬の金を費やし幾百萬の人を役し若干の死人や怪我人を出かして居るか知れぬ程の困難を歷て居る、出來上つて見れば非常なる便利を一般の人に與へて、老人子供でも無學者でも惡人でも平等に其恩惠に浴するのであります、日々戴く御米一粒でも、七十二功豈に等閑ならんやといふて、七十二度の手數が懸つて居るそうてす、それをば東西未辨の小兒までが何の造作も無く、三度々々之を食して生命を維持して居るてはありませんか、報本反始といふて其本に報ひ其始めに反れば、一粒の米も一回の汽車も實に有り難きことゝ思ふて、感謝の誠を捧げねばなりませぬ、佛祖の御恩も亦た是の如く、釋尊が娑婆往來八千返、幾許の難行苦行を御積みなされたか知れぬ、又此佛法を今日迄に傳へられたる祖師方の御辛勞は如何計りてありませう、能々之を思惟せば一句の御教一法の御諭でも、深く其御恩の廣大なるを感謝し少しでも等閑の心を持ては相濟まぬことであります、六度集經の中には面白き因緣が說てある、昔し慈悲深く信心篤き一人の大長者がありました、或時巷間て一疋の龜を見て大に憐れみの心を起し、多分の金を出して之を買取り水中に放

ちました、其後大洪水の爲めに家を流され産を失ない、命からく船に乘りて流れ行きしに、彼龜が現はれて船を護つて曳れました、暫くすると一疋の蛇が流れて來ましたから長者は救ひ上げて船に載せたが、又もや一疋の狐が漂ひ來りしゆえそれをも救ふて船に乘せました、最後に一箇の人間が流れて來ましたから之を救はんとせしに、龜は之を止めて、兎角人間には僞多し他日恩を怨て返すこともやあらんとて、救ふことに反對したてす、情深い長者は何條之を見棄つべき、遂に其人間を助けました、其人は大に喜び、此御恩は生々世々忘却致すまじとて涙を流して感謝したてす、間も無く船は或る土地に着しましたから、龜や蛇や狐に別れを告げ、彼人間丈を伴ふて假りに宿所を定め、將來の方向抔を考へて居りました、處が彼の救はれた狐が或日百斤の金を持ち來りて長者に捧げ、是は昔の人の土中に埋め置きしものにして、今は世人に何等の關係も無き金なれば、安心して御用ひを願ひたしと申した、長者は其志を憐れみ然らば之を貧民に施さんとて受取りしに、彼同道せし人間が慾心を生じて其一半を分ち呉れよと請求したてす、長者は餘りの事に呆れたれども、左あらぬ體にては多くの人に施す所存なればとて十斤丈を彼に與へました、

彼は是を不足なりとし果は長者を怨み、土地の政府に訴へて、彼の長者は塚を暴いて金を盜みしと申立てた、それが爲めに長者は遂に牢獄に繫がれたぢや、處が或夜狐て救ひし蛇が藥を口に啣んで來り、此度の御災難は御氣の毒の至りなれど、畜類の悲しさ救ひ奉らん樣も無し、唯だ私は此國王の太子の足を噛みて傷をつけ樣と思ひます、如何なる名醫も其傷の痛みを止めることは出來ぬ、其時貴君が此藥を差上げなば痛立ろに去るべし、さすれば其功に依て牢屋の苦しみを免かれ玉ふべしといふて、其藥を呈しました、長者は不思議に思ひ居りしに、果して太子は蛇に噛まれ玉ひしとて城中上を下への騷ぎ、長者は之を聞て扨は之と思ひ彼藥を呈したるに、太子の痛忽ちに止り傷さへ殘りなく癒えければ、改めて御呼出になり子細の事情を聞き玉ひ、深く長者の慈悲を感じ彼惡人を憎み、之を逐放して長者をば國の宰相に取立られたので、其國は能く治まりて、萬民齊しく太平を樂んだと申すことてある、

釋尊は此因緣を御說き遊ばれて、其時の長者は卽ち今の我身てある、國王は今の彌勒、龜は今の阿難、狐は今の舍利弗、蛇は今の目連、惡人は今の提婆達多てあると仰せられました、此因緣の如きは實に趣味深い御教訓てあります、人間は智慧が勝

れて居る代りに之を妄用し濫用するときは、畜生にも劣つた邪見邪業を働くに立至ります、怨に酬ゆるに恩を以てするは是れ上人、恩に酬ゆるに恩を以てするは是れ中人、恩に酬ゆるに怨を以てするは極悪の凡夫、三悪道の衆生であります、我身を慎しみ守りて、中等以上の人と爲り、益々大慈大悲の心を勵まして、怨に酬ゆるに恩を以てするの人となりたいものであります、我能く人を思へば人も亦た能く我を思ふ、因果の道理歴然として私は無い、古歌に「吾を思ふ人を思はぬ報にや我が思ふ人の吾を思はぬ」とあるが、實に面白き歌ではありませんか、增一阿含經には、孝行の功徳は一生補處の大菩薩と同一であると說かれてある、正法念經には四恩に報ずる人は無量の福を得、現在には人の爲めに讃歎せられ未來には能く菩提を得ると示されてあります、殊に佛法の御恩徳は、獨り現當二世の大利益を被むるのみならず、此御敎に從ひ奉れば、即座に懺悔の慈門に入りて業障の穢れを除き佛の御戒法を相續して現身に菩提を成就して、平生心是れ道となりぬれば朝な夕なの立居振舞が、盡く孝順心慈悲心の妙用と爲り、盡く四恩報謝の行持となり、此世からなる無上佛果の妙樂を得るといふは、皆是れ佛祖廣大の御恩力であります、故に我等は束の間も之を忘るゝこと無く寢ても寤ても、三身具足の名號、三寶一如の稱題たる南無釋迦牟尼佛の御名を唱念し奉り、供養恭敬尊重讃歎し奉りて、御恩報謝の行持に精進するこそ、最も至要の佛事であります。

參考

○多聞なりといへども、もし修行せざれば、不聞に等し、人の食を說くも、終に飽く能はざるが如し。（首楞嚴經）

○善根とは、いはゆる善く順ひて法を聽くなり。（大集經）

○恩を知るものは、當に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし、恩を報ずる者も、亦當に一切衆生を敎えて、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむべし。（大方便佛報恩經）

○恩を知るは大悲の本なり、善業を開くの初門なり、人に愛敬せられて名譽遠く聞え、死して天に生ずることを得て、終に佛道を成せん、恩を知らざる者は畜生よりも甚だし。（智度論）

○正法に逢て身命を捨てざる我等を慚愧せん、愧つ可くは則ち此道理を愧づべし。

（承陽大師）

○祖師の大恩を報謝せんことは、則ち一日の行持なり、自己の身命を顧みること勿れ、禽獣よりも愚かなる恩愛惜んで捨てざること勿れ。（同人）

○若し恩を知らざれば畜類より、愚かなるべし。（同）

○祖師傳法の深恩慇懃に報謝すべし。（同）

○父の恩は山よりも高く、母の恩は海よりも深し。（日本俚諺）

○恩を享けて報ひさるもの禽獣に近し。（古聖）

○父の恩は水も溺らすこと能はず、火も焼くこと能はず。（露國俚諺）

○噫々我が子よ、汝若し父母の恩を感ぜずんば、汝の親友と爲るものなかるべし、何んとなれば、父母の恩に感ぜざる人には、親切を盡すとも無益なるを知ればなり。（ソクラテース）

○立ちならぶ甲斐こそなけれ櫻花松の千年の色はならはで。（本朝）

○火の中をわけても法を聞くべきにあめ風雪はものゝかづかは。（古歌）

○冬の夜の應の拳のぬくめ鳥恩を知らぬは人にこそあれ。（よみ人しらず）

○面影を千代につたへて父母のありしをしへを思ひはなつな。（慈雲尊者）

○とく法に心のはなはひらけともそのみとなれる人はまれなり、（無難禪師）

○ありかたやいまながらへて世の中にまたもみのりを聞ぞうれしき。（田川とく子）

○やみ〳〵と敷島の大和おのこのつとめつくさて。（廣瀬中佐）

○折りとらば手ふさに穢る立てながらみよのほとけにはなたてまつる。（僧正遍照）

○夢さめて後のそひぢと思ふなよ夜霄からまもる母の手枕。（古人）

○母親の寒冷きづかふ夜寒かな。（紅葉）

○つけたのは人の智惠とし猿廻し。（東起）

三十　報謝正道（修證義第二十九節）

其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日日の行持その報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費さゞらんと行持するなり。

前節に於ては報恩謝徳の至要なることを示されて、古今の因縁を見るに、畜類と雖も猶ほ恩を知り恩を報ずることが間ま有るでは無いか、況てや萬物の靈長たる人間の身を受け殊に佛祖正傳の大法に逢ひ奉つりて、佛の御弟子と爲りし者が、御恩を忘るゝ樣なことがあつては、畜生にも劣りて淺ましき極みなるとぞ御誡め下され、此一節の御文に於ては、然らば如何にせば眞實の御恩報謝が出來るてあらうかといふ、報謝の正道を御示し下されたので、最も太切なる御教訓てあります、前にも述べた通り我等御互が大恩を被むりて居る恩處を大別すれば四通りある、乃ち第一には御國の御恩、二には父母の御恩、此中には先祖の御恩も含まれてある、三には衆生の恩、此中には兄弟夫婦朋友等相互の恩も、先輩先進の人々の御恩も、社會同胞の御恩も皆籠つて居る、三世因果の道理より推す時は一切の衆生は皆我が恩人てあ

る、唯だ生物計りでは無い、日月山川水土雨露も亦た我が恩處てある、我等御互が幾度か生じ幾度か死する間に於て、或は親と爲り子と爲り君と爲り臣と爲り、夫と爲り妻と爲り兄弟と爲り親類と爲りて、種々樣々の深き關係を有して居る、故に現在の此世に於て、聊かでも眼に觸れ耳に觸るゝ程のものはイツの世にか結び置たる因縁の結果が現はれて來たのである、行基菩薩が「ほろ〳〵と啼く山鳥の聲聞けば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ」と詠れたも、山鳥の囀づる聲の惱らず我耳に觸れるといふも、何等かの因縁があるからぢや、今こそ山鳥の身と爲り居るも、過去の世には或は我等の親兄弟てあつたかも知れぬといふ意味を詠まれたのてある、是の如き觀念に住すれば一切衆生は皆我が恩人なりと心得て、眞實に報恩の行を營むべきてある、普通の道徳上に於ても恩禽獸に及ぶ抔といふて、禽獸蟲魚にまても博愛の徳を及ぼすべき教はあれど、報恩といふ意味から出たのては無い、然るに佛教に於ては最も大なる慈悲がやがて最も廣き意味の報恩行てある から、昆蟲と雖も、之を輕んぜず之を侮らず、益之を憐れみ之を重んずべき道理の根據がある、斯くなければ所謂汎神的宗教の趣味は現はれませぬ、此邊は能々味ふ

て見て貰ひたいです、第四は佛法僧三寶の御恩である、是は云ふ迄も無く宗教上の報恩に屬し、佛弟子たる我等に取ては最も大切なる御恩德であります、修證義にては殊に佛祖の御恩を報ずべきことを御敎へ下されてあるが、この中には自から他の三種の恩をも含んで居るものと心得て、回向の文にもある通り、四恩總て報じ三有普く資くるの心懸が無ければなりませぬ、併し報恩と申しても徒らに物質的に重きを置けよといふので無い、天皇陛下の御恩に酬ゆるといふても、唯租稅を納めたり法律を守つたりする計りてはいかぬ、父母の御恩とても、唯日々に三性の養を爲すのみで、滿足とは申されませぬ、決んや佛の御恩の酬ひ奉つるには、唯香を燒き花を捧げ佛を念じ經を讀み禮拜を行ひ堂塔を莊嚴することのみを言ふのでは無い、此等も御恩報謝の一分には相違ないが、形式的の供養は動もすれば供養の精神を失ふことがある、諸佛廣大の悲願は娑婆に往來し玉ふことは千返、骨を碎き血を流して我等衆生を濟度し玉ひしこと幾度なるやを知らず、其御蔭に依りて、迷妄なる我等凡夫も易々と盡未來際の大安心を決定し得ることが出來るのであるとすれば、普通一般の方法を以てしては、御恩の萬分一だも報じ奉ることは六かしい、故に「其報謝は除外の法は申るべからず」と仰せられたのである、然らば如何にせば眞實恩に報ひ奉ることが出來るやといふに、次の御文には、「唯當に日日の行持その報謝の正道なるべし」といふ有り難き御指南がある、日日の行持といふは毎日朝より夕に至る迄一寸の光陰をも虛しくせず、眞實の道を守り持ちて三業の上に行なひもてゆくことであります、眞實の道を持ち行なふといふても、强ち世間に遠ざかり人事を離るゝことてはありませぬ、昔し支那禪門の俊傑と稱へられたる趙州和尙が其師南泉禪師に向て、「如何なるか是れ道」と問はれた時、禪師は「平常心是れ道」と答へられた、乃ち佛道といふても決して心の外に別にあるては無い、我等の平常の心がソックリ道の姿である、心が心の通りに働きさへすればソコに佛の大道はあります、悲しいかな我等凡夫は兎角に妄想顚倒の念に礙へられて、本心を本心の通りに動かすことが少ない、妄想顚倒とは貪瞋癡三毒の煩惱のことです、此三毒煩惱の爲めに道の中に在り乍ら道に牽き、佛法の中に在り乍ら佛法に遠ざかる樣なことゝもなる、趙州和尙は南泉禪師の一語を以て學佛道の基礎と爲し、遂に古今獨歩の大善知識となられたです、然らばどうすれば、平常心が即道と爲るかといふに、唯だ我等の身口意三業

が釋尊御相傳の御戒法に隨順し奉るの外は無い、御戒法は大道の妙德妙用てあるから、御戒法に隨順する時は身口意の三業がソックリ大道の姿と爲る、三業が道と爲る時は萬事萬行も道ならざるは無い、若し三業が道に背けば萬事萬行も皆な妄想顚倒と爲る、佛法の大目的といふも畢竟平常心是れ道なることを、徹底自得せしむるの外には無い、罪惡の衆生の爲めには山川草木も我身を苦しましむる種ならざるは無く、善根の衆生の爲めには天地國土も我身を樂しましむる器ならざるは無い、一休和尙の所謂「地獄遠きにあらず極樂眼前なり」であります、能々是理を明らめて三毒妄念の塵を拂ひ平常心是道に至る時は、商人が商業を營なむのも、農民が農作を勤むるのも、茶を喫むのも御飯を喫るのも立つも座るも、皆盡く佛法の行持と爲り、一擧手一投足の上にも自利々他の功德が任運に莊嚴せられます、斯くてこそ佛の御本意にも適ひ佛法の目的をも達せられて、佛樣が御辛勞遊ばされた甲斐もあるといふものです、故に此日々々の行持こそ眞實報恩謝德の正しき道てあるぞと御指南下されたのてあります、次の御文には日々の行持の致方を御示し下されて「謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず私に費さじらんと行持するなり」と仰せられたは、涙の出る樣な有り難き御敎化ではありませんか、眞實の行持を營まん者は先づ以て日々の生命を等閑にせずといふて、平生の此身を徒にしてはならぬ、又私に費さずといふて、自分勝手に使ふてもならぬ、如何程身躰を遊ばさずに働き通しに働いても、自分勝手の事にのみ働いた分では働いた丈の功能が現はれませぬ、事に依ると働いた爲めに却て罪を累ぬることもあるものてす、左すれば此の等閑にすることゝ私に費やすことゝが、我等の行持を妨ぐる二大惡魔てす、然るに我等の平生はどうてありませう、果して日々々の生命を等閑にせぬてあらうか、果して日々々の身體を自分勝手の方にのみ使はぬてあらうか、人生五十年其間道を行ふの年月はどれ程あるてあらう、一晝夜二十四時間其間道を守るの時間はどれ程あるてあらう、多くは名利の巷に迷ひ妄念の淵に沈み夢の如くに時間を經過して居りはしまいか、「いつしかに今年も暮れぬ今年はと思ひし事もいたづらにして」とは、我等が齊しく漏すべき述懷ではあるまいか、金錢の爲めに働き衣食の爲めに勞するも強ち之を不可とは言はぬ、されど金錢以外に資あることを忘れてはならぬ、衣食以外に眞生命の資糧あることを心得ねばならぬ、無常の嵐忽ちに吹き來る時は妻子珍寶たす

く、る無し唯獨り黄泉に赴くといふが、古今東西に通じて免るべからざる人生の一大事實である、金錢も衣食も觀來れば短かき浮世の寶たるに過ぎぬ、我等の大安心は永久の寶を得るに在る、生々世々の大功德を成就するに在るのです、永久の寶、生々世々の功德といふても別には無い、所謂日々の行持是れなりである、「假の世をも假の世ぢやとてあだにすな假の世ばかり己が世なれば」て、假の浮世に在り乍らも、能く道を守り德を養なひなば、それが直ちに永久不滅の珍寶功德である、それがやがて四恩を報じ三寶を供養するの上乘なるものであります、故に華手經には「若し華香衣食湯藥等を以て諸佛を供養せば名けて眞の供養と爲さず。如來道場に坐して得る所の微妙の法、隨つて能く修學する者、是を眞の供養と名く」とありて、徒らに種々の供物を佛前に捧ぐるのみが供養では無い、佛の御敎を守りて身口意三業を淨らかにするが眞實の御供養である、又十住婆婆論に佛は阿難尊者に告げて「天香華を雨らすも如來を供養恭敬すと名けず、若し比丘比丘尼優婆塞優婆夷、一心に放逸ならずして聖法に親近し修集する、是を眞に佛を供養すと名く」とも仰せられて、能く一心を治め、諸の善法を行ふのが本當の御供養であります、或る歌人が一人の僕を連れて吉野山に上り、滿開の櫻花を愛歡して、終日興を盡しました、歸るに及んで僕に向ひ、今日は嘸かし汝も樂しかりしならんと言ひけるに、僕は妙な顏をして、檀那は何が面白いのやら一日樂しそうにして居られたが、私の目にはドコもかも花ばつかりて、外に何にも面白しと思ふものはありませぬと答へたそうです、無風流の彼には花より團子、團子より酒を以て樂しみと思ふたであらう、天眞爛漫たる櫻花を眺め乍ら更に其趣味を解すること能はず、風流の中に在りて風流を知らないのである、我等お互が受け難き人間の身を受け殊に遇ひ難き佛法に遇ひ奉り、此三業六根を擧げて佛祖の行持を營なむことの出來るといふは、實に此上も無い妙趣味、限り無き好風流ではありませんか、行持の功德を解せざる者は、此妙趣味も好風流も一向に心得ず、徒らに人生を悲觀したり徒らに醉生夢死の間に彷徨ふたりして居るのは、花を見ながら花の風趣を味ふことの出來ぬ癡漢よりも淺ましいではありませんか、

昔し我國曹洞宗の二祖孤雲懷奘禪師と申し上げ奉るは、御開山承陽大師よりは御年が二つも上てあらせられたが、御開山に對し又其母親に對して御孝心の深きことは古今に類少なき御方でありました、御年十八の時比叡山に上りて出家得度遊ばされ

深く顯密の學に通じ玉ひしが、母上が或時の教訓に　汝をして出家せしめたるは世に時めく譽れを得よとにはあらず、唯だ非人の相を守り雲水の身に甘んじ、佛樣や祖師方の行履に倣ひ綿密に道を行なはしめんが爲めなるぞと仰せられければ、一層此御語に勵まされ、それより諸方を遍參して遂に御開山の門下に投ぜられました、御開山が宇治の興聖寺に在せし頃、他出に關する掟を「一月兩度一出三日」と定められた、乃ち一月に二度の他出三日を絕えずといふ制限である、其折二祖樣の母親が御大病になられたれば、一度は母親の許に至りて末後の安心を授けられ且つ親しく御看病遊ばされたが、彌々御危篤といふ時に至り、他出の掟を破る時は母子共に罪を佛祖に得んとて、遂に母親の許に至り玉はず、大衆に向つて「悲母の人情に隨ひ古佛の垂範に背かん不孝の過何ぞ免がれんや」と仰せられたとあります、古今無比の御孝心にてあり乍ら特に母親の最後に趣き玉はざりしは、恩愛の爲めに佛法の掟を破り玉はざる絕代の御行持です、不孝に似たる大孝とは此等の事であらう、斯る御方を子に持ちし母親は、定めし成佛得脫の素懷を遂げられたであらうと思ひます、又二祖禪師は始終御開山の御傍に侍し奉られて、前後二十年の間

御病氣の爲め御開山の御顏を見ざりしこと少かに十日てあつたとある、御開山の跡を襲て永平寺に住持し玉ふこと、十五年、其間御開山の御尊像を方丈に安置し奉りて朝夕御給仕し玉ふこと御在世の時に變ること無く、御退隱の後も御開山堂の傍に今の孤雲閣を搆へて之れに住し、常に侍者の位地に立て御供養あらせられたのであります、實に稀世の行持ではありませんか、佛祖の掟を守りて母親に對する恩愛を願みられなんだか如きは、全く本分の行持を以て報謝の正道となされたのであります、其時の二祖禪師の御胸中はドンなてありましたらう、身を截らア、よりも辛い思ひを爲して其道を守られたのてある、ダが孝心の無い者抔がムヤミに二祖禪師の眞似を致そうものなら、ソレこそ飛んても無い間違になります、要するに道を守ること堅く道を行なふこと正しき者に非れば、此行持を全ふすることは困難てある、困難とは申し乍らも決して不可能の事では無い、唯だ至心に御恩の廣大なることを知りて、寢ても寢ても之を忘れず、日常一切の行持を以て報恩謝德の爲めに回向せんと願ふのてある、乃ち一念懺悔の當體に身口意三業の罪障を淨め、進んて佛祖正傳の大戒を相續し奉る時は、直ちに平常心是れ道といふ境界に達することが出來る、さ

すれば朝から晩までの立居振舞は、盡く御戒法の徳相と爲り、道の作用とも爲り、而してソレがソックリ御恩報謝の正道にして、衆生利益の大願大行も皆な此行持の上に具はつて來るのであります、曹洞宗義の眼目たる本證妙修の大功徳も盡く此中に存するのであります、故に我等御互は益々佛祖の御恩の最も深きことに感激して寢るにも起きるにも南無釋迦牟尼佛の大慈大悲名號を念じ奉りて、以て報恩の行持を全ふせらるゝ樣致されたいものであります。

參考

○菩薩は諸佛の實法を知らんが爲めに精進す、平等の法を知らんが爲めに精進す、乃至、一切の佛法を知りて廣く衆生の爲めに分別せんが爲めに精進す。（華嚴經）

○菩薩は衆行を修めて懈ることなく、勇猛の勢力能く制伏するものなく、能く一切の智門を滿足す。（同經）

○汝等比丘、若し勤めて精進せば、則ち事として難きことなし、是故に汝等比丘當に勤て精進すべし、譬へば少水も常に流るゝときは則ち能く石を穿つが如し、若し行者の心、數々懈り廢せば、譬へば、火を鑽るに未だ熱からずして、息めは、火を得んと欲するも、火を得べきこと難きが如し。（遺教經）

○今日我等が正法を見聞する類となる、祖恩必ず報謝すべし、其報謝は餘外の法は中る可からず、身命も不足なるべし。（承陽大師）

○この生命は前來の行持の餘慶なり、行持の大恩なり、いそぎて、報謝すべし。（同）

○諸佛の妙道は、曠劫に精勤して行し難きを能く行ず、非忍而忍なり、豈に小徳小智、輕心慢心を以て、眞乘を冀はんと欲す、徒らに勤苦に勞せん。（達磨大師）

○業を勵みて、家内睦しければ、徳を得て、磐城の如し。（楠公家訓）

○勤むれば則ち匱しからず。（左傳）

○營々として一生忙裏に過ぎ、屋上に青天あるを知らず。（載復古）

○務と疲の均衡を保ちて、而して日々多少の進境を見るは、實行の上乘なり。（ケロッグ）

○いつまでも、あけぬくれぬと營まん身は限りあり事は盡きせず。（明惠上人）

○ひとすぢに心かけずばさゝがにのくものいかき（いかきは網）もかゝらざらまし。（行

誠上人）

○生き死の川に世を經て渡し守わたしはてずば棹もおさめじ。（契冲阿闍梨）

○神代より世々に傳へし御鏡をくもらぬまゝにみかく嬉しさ。（古歌）

○朝ねせば何につけても得はなし病もおこり用もかゝせば。（道歌）

○永き日の人にはあれと水車。（涼袋）

三十一　諸佛行持（修證義第三十節）

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設ひ百歳の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日を行取せば一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の佗生をも度取すべきなり、此一日の身命は貴ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心自からも愛すべし自からも敬ふべし、我等が行持に依りて諸佛の行持見成し諸佛の大道通達するなり、然れば即ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。

此一節は、前節に於きまして報恩謝徳の正道は吾人日々の行持に在るぞと御示し下されてある、その日々の行持を全ふする心得に就ての御親訓で、殊に大切なる御文章であります、初に「光陰は矢よりも迅かなり身命は露よりも脆し」とありて、世間無常の有樣を示されてあるが、苟も眞實心を以て道に志さん者は先づ以て無常觀を忘れてはなりませぬ、光陰の迅かなることは矢を射るよりも疾く、人生五十年といふ

も夢の間に過ぎ去つて仕舞ふ、古歌にも「鏡には知らぬ翁に影見へて本の姿は何地往きけん」とある通り、我等の身體も月日の移り變ると與に轉變遷流して暫くも留まることは無い、去年の身は今年の身に非ず、今日の姿は昨日の姿と同じからず、刻々に易り時々に移る、こは決して人間計りては無い、天地間に所有森羅萬象は一として無常ならざるは無いです、而して我等の身命はどうかと云ふに草の葉の露よりも脆く、今日にして明日を待たず朝にして夕を保すること能はず、人間一代の命は僅かに出入の一息に繋れり、一息斷截すれば忽ち未來の人と爲る、飛好法師が「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事去り樂しびかなしび行かひて花やかなりしあたりも、人住まぬ野らとなり、變らぬすみかは人あらたまりぬ、」と歎かれしは、悲觀でもなんでも無い、實に人生の一大事實である、歌に「あだし野の露はちりても又ぞをくきへてあひみぬ人ぞわりなき」とか、「朝貌をあだなるものと思ひしに花よりさきに落る白露」などとあるも亦全く世の中の眞相であります、故に「何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復び還し得たる」て、如何に善巧なる方便があらうとも、一旦過ぎ去つた月日を復び取返すことはならぬ、小野小町が「花の色はうつりにけりな

徒らに我が身よにふるながめせしまに」と歎きしも、古今共に免れ難き浮世の有樣であります、斯る世に住む我等なれば、「徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり」て人生の歸趣をも知らす人道の何物たるをも心得ず、夢の如くに生れ夢の如くに死したらんには、縱ひ百歳の壽命を保つことを得るとも何の所詮も無い、唯だ空しく惡業を重ね罪過を餘計に積む丈てある、それては我等を照し護り玉ふ日月の光りも却て三界六道の苦しみを招がしむる、緣となり、萬物の靈長と稱せらるゝ貴とき形骸も却つて未來永劫の悲みを惹き起すべき源となるてはありませんか、抑も我等が生涯を通じての最大目的は何んてあるかといふに、道を知り道を守り道を行なひ道を體すの外は無い、人間の命は道あるが爲めに貴とく、人間の身は道を守るが爲めに靈長なのてある、道とは何ぞや、乃ち天地萬物の原理と其妙用てある、其原理とは何ぞやといふに、一言にして申せば生々化育の大道、法性無漏の妙德てある、道德的にいはゞ梵網經に所謂佛性常住の孝順心慈悲心てある、言ひ換れば本宗所傳の十六條の佛戒の原則是れなりてある、されば日月の天に輝き雨露の地を濕ほす火の熱する風の動く花の紅なる柳の綠なる、何れが道にあらざる、之を人事の

上に現はせば、忠となり孝となり恭儉となり博愛となり奉公となり報恩となる、境に依り緣に隨つて千差萬別なりと雖も、其歸する所は佛性常住の孝順心慈悲心の德相である、政治の目的は此道を天下に布かんが爲めである、敎育の目的は此道を知らしめ守らしめんが爲めである、小學の題辭に朱氏が「元亨利貞は天道の常なり仁義禮智は人性の綱なり」と云ふてあるが、元亨利貞は天の道で仁義禮智は人の道である、天の道を體して人の道を明らかにし、人の道を現はして天の道を顯はす、此二の者は畢竟して相離れぬ、我等御互は此道に依て生存して居る、故に道を守るは人間必然の本務であります、若し道を守ること無く却て道を破り道を傷つくるが如きことあらば、人間として生存するの必要が無いのみならず、寧ろ早く死んだ方が御互の爲めになる位のものです、して見れば人間は敢て必ずしも壽命の長きを以て幸福とはいはれぬ、命の長からんよりは道の具はらんことを望まねばなりませぬ、千古の忠臣楠正成公は七生報國の志を抱いて湊川の露と消えられたが、行年は四十三歲の花盛りであつた、小楠公は「かへらじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる」の一首を吉野の如意輪堂に書き遺して、命を四條畷に捨てられたが年齡は少かに二十三歲てす、されど楠公父子の忠魂義魄は六百年後の今日に至るも、彌々四維八紘に輝き渉つて居る、楠公が嘗て功臣の第一と稱せられたる菊池武時公の陣歿は四十二歲、南朝の俊英たる護良親王は二十八歲、源顯家公は二十一歲にして歿せられた、一代の賢臣北條時頼公は三十七歲にして死し、絕世の豪雄北條時宗公は三十四歲にして死んで居る、此等の俊豪は其壽命の點に於ては甚だ惜くあるも其勳功の偉なる感化の大なる、千秋萬歲の後に至るも曾て滅することは無い、是れ乃ち其一生を通じて道を守り道に盡されたからてある、我が高祖大師は之れに對する心得を親切に御示し下されて「古人の云く朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと、今學道の人も此の心あるべきなり、噴劫多生の間だ幾度か徒らに生じ徒らに死せしに稀れに人身を受けて偶ま佛法に遇へる時此身を度せずんば何れの生にか此身を度せん、縱ひ身を惜み持ちたりとも叶ふべからず、ついに捨てゝ行く命ちを一日片時なりとも佛法の爲めに捨てらんは永劫の樂因なるべし、後のこと明日の活計を思ふて棄つべき世を捨てず行ずべき道を行ぜずして、徒らに日夜を過すは口惜きことなり、只思ひきりて明日の活計なくば飢へ死にもせよ寒ごへ死にもせよ、今

日一日道を聞て佛意に隨て死せんと思ふ心を先づ發すべきなり、然るときんば道を行じ得んこと一定なり」と仰せられてあります、是れは決して身命を輕んぜよとの御旨意でも無けばれ、活計の事を捨よとのいふ御思召でも無い、唯だ道を重んじ道を明らめて人生の目的に於て遺憾なからしめよとの御誡めてある、此御教訓の如きは我等御互は朝夕に拜讀して親しく道を守り持ちたいものであります、ダが古語にも「善に從ふことは登るが如く惡に從ふことは崩るゝが如し」とある通り、能く善を行なひ能く道を守ることは中々六かしいものです、一日の中、一時の間でも仔細に點檢し來れば、道を行ふことは少なく道に遠ざかることが多い、是れ畢竟內に確實なる信念なく外事物の爲めに惑はさるゝからである、全體凡夫と佛樣との區別は何處に在るかといふに楞嚴經にも說かれてある通り、事物に轉ぜらるゝと事物を轉ずるとに依て、迷と悟との道が岐るゝのである、自分の身と心とに於て天地の原則たる道の本體をシッカリと踏へて、順逆の境に臨みてもビクリとも動着せず、能く順逆の境に應じて孝順心慈悲心の妙用を現はすのが佛樣である、然に凡夫は自分の本心がウキ〳〵して居るから、口丈が道に叶ふても身が道に叶はず、身が道に順ふても意が道に順はず、身口意の三業を擧げて道に一致することが容易に出來ぬ、それが爲めに眼に色を見れば色の爲めに迷はされ耳に聲を聞けば聲の爲めに動かされ、鼻に香を嗅くも口に味を嘗むるも多くは妄想執着の媒介とならぬは無く、身の物に觸れるも意の物を想ふも亦た多くは三毒五欲の種となりたがつて困るです、是を聲色の奴婢といふのである、奴婢とは召使のことで乃ち奴隸のことです、我等の一生は多くは見る物に使はれ聞く物に動かされ、順境に逢ふては貪欲を增長し逆境に逢ふては瞋恚を增長し、愚痴の迷雲は常に本心の光りを包み、唯だ徒らに五欲六塵の巷を馳せ廻り驅け走りて、惜い欲い憎い愛いの間に空しく百歲の日月を送過するの有樣です、趙州禪師は曾て其徒に示して、汝等は十二時に使はれて居るから道を成ずることが出來ぬ、老僧は常に十二時を使得て居るぞと仰せられたは此處です、依て次の御文に「設ひ百歲の日月は聲色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば一生の百歲を行取するのみに非ず、百歲の佗生をも度取すべきなり」と御示し下されたのであります、一生の百歲とは現世の此世のことで、百歲の佗生とは未來生々世々を いふたのである、天地の妙道が自づから此心と身とに具はりて、眞實の行持を行取

得らるゝ時は、其行持の一日こそ大安心を決定し了つた目出度一日であります、佛樣が三祇百大劫の御修行も此行持の一日を得玉はんが爲めである、我等の信心修行も此一日を得るのが目的てあるのてある、我々御互は縱ひ今日迄は聲色の奴婢となりて、迷ひに迷ふて居たにもせよ、幸に佛祖正傳の正法に逢ひ奉りて大信心を發得し、此一日の行持を行取する身の上となりさへすれば、曾に現在一世の身をして佛の道に一如ならしむるのみならず、未來生々世々の身をも濟度し盡して永く佛果菩提の妙樂を得ることが出來るのてあります、世財は賴むべからず世事も亦た賴むべからず、無常の風一度吹き到りなば妻子珍寶一として我身を資くるに由なし、唯々貴むべきは此一日の行持てある、故に明敎大師は「尊きは道より尊きは莫し、道德の存する所四夫と雖も窮するに非ず、道德の存せざる所天下に王たりと雖も通ずるに非ず」と言はれてある、依て次の御文には「此一日の身命は貴ぶべき身命なり此行持あらん身心自からも愛すべし自からも敬ふべし」とありて、此行持ある一日の身命こそ最も貴むべき身命てある、此道を有する一日の形骸こそ最も貴むべき形骸てある、苟も一日の行持の現はれたる身と心とは、業に既に凡夫地を離れて佛地に進んだのてあるから、我が身乍らも深く之を愛し厚く之を敬はねばならぬ、是れが本當の獨立自尊てある、何故なれば「吾等の行持に依りて諸佛の行持現成し諸佛の大道通達するなり」て、我等が眞正なる行持に依りて、三世の諸佛の淨く麗はしき行持が目の前に見成し、十方の諸佛の悟り玉ひし天地自然の大道が吾等の脚下に通達するからてある、道に古今の隔ては無けれども、之を行はざれば其德は現はれぬ、法に東西の別は無けれども之を用ゐてこそ初めて其功を見ることが出來るのてある、更に一然あれば則ち一日の行持是諸佛の種子なり諸佛の行持なり」と御示し下されて、我等の一日の行持こそ全く佛法の功德を實現するのてあるから、取りも直さず活きたる佛樣は此世に出現し奉る種子てある、曾に種子たるのみならず此行持がソックリ其儘諸佛の行持てある。佛法は決して理論ても無ければ學問ても無い、天地の大道法性の妙德を我等の手の舞足の踏む所に實現して、自を度し他を度するに非ざれば佛法は死物となつて了ふ、故に眞實なる一日の行持茲に現はれてこそ始めて眞に佛法が活て來る、佛樣の法身は其行持の存する所に光りを放ち玉ふのてある、斯くしてこそ無常の世に在り乍ら常住不滅の樂し

みを得、露よりも脆き命を持ち乍ら玉よりも麗はしき大安心を決定することが出來るのである、例へば千古の忠臣楠正成公は天下人が齊しく之を景慕して、今は湊川神社として祀られ又た銅像を皇城外に建られて長に其偉勳を表彰せられて居る、併し六百年前の一忠臣として、單に歷史的記念人物とのみ見て居ては、楠公の大精神は決して發揮せられませぬ、今日の臣民も亦た楠公の如き誠忠を抱きてこそ公の大精神は今猶ほ不滅なのである、公にも劣らざる忠義の志を起すのが眞に能く楠公の靈を敬重する以所なのである、孝といひ忠といひ、畢竟孝順心慈悲心の性德が君と親とに對して發動したる姿に名けたのであります、忠義の道とは何んなものかといふても、こんなものぢやと云ふて人に示すことは出來ぬ、ダガ至仁なる君と純忠なる臣と相對する處に、忠義といふ美しき花は爛熳として咲き亂れる、慈悲深き親と孝心深き子と相對する處に孝行といふ淨らかなる月は玲瓏として光りを放つのである、佛敎は世界無二の大宗敎で、佛樣は古今獨歩の大聖人であらせられるが、其靈光偉德は實地に佛法を信受し修行し應用する手本に於てのみ拜まれるのである、佛敎の未だ昔だ振はざるは、佛法を行持する人が少ないからです、佛法の功德の未だ全く現はれざるは正しく佛法を信ずる者が多くないからであります、文化の頃京都に大和の人で澤井智明と云ふがありました、通稱は大黑屋傳兵衛と云ふて、經書にも通じ栗田流の書を能し殊に佛敎の篤信者であつた、性來慈善の心深く自らは節儉を守りて貧民を憐れみ惠むことを樂しみ、文化年間攝津河內の兩國洪水の時の如き窮民を救ひしこと數を知らず、每年極寒の頃になると每夜洛中洛外の貧乏町を徘徊して米錢を極貧者に施こすを以て務めとす、されど專ら陰德を旨として姓名を顯はさゞりしがイッシか公廳に聞えて、五六度も褒賞を賜はつたそうぢや、或日歌の中山清閑寺の智眞長老が傳兵衛の賢德あるを聞て尋ねられ、案內も待たずに其居間に通り、傳兵衛とは御身なるか今は何事を爲しつゝあるやと問はれました、其時傳兵衛は算盤をハジキ帳面を廣げて帳合をして居たが、ハア私は傳兵衛で今大般若經を轉讀して居りますと答へた、長老はソンな大般若ても御利益があるかなと問ひしに、傳兵衛はニッコリ笑つて、此大般若こそ利益無量なり、妻子眷屬の養育より世間の交際、貧民の救助、祖先の追薦、子孫安樂の資本まで、盡く大般若の力ならざるは無い、併し利益の大なる丈罰の當り方も亦た大なり、一ケ

夕達へば自分のみか他人に迄迷惑を懸け罪を造らしむる、若し誠意を缺く時は害毒到らざる所なき有様ですと答へました、長老大に感歎してソレよりは無二の知音となられたと申す話がある、佛法もこういきたいものであります、算盤をハジクも鍬鎌を持つも皆菩提の道に叶ふ眞正の行持となれば、立つも坐るも善根功德ならざるは無い、此行持にして一度現成すれば進むも退くも任運に忠信となり孝悌となり恭儉となり博愛となるのである、此時の心こそ直様佛の御心、その身はソックリ佛様の御姿ぢや、我等幸に懺悔滅罪して六根清淨となり、佛戒を相續して佛様の御弟子となり、本證妙修の大功德を一身に聚むることを得たるは、何等の幸福であらう、故に朝な夕なに暫時も忘らず、釋迦牟尼佛の恩德を憶念し奉りて、眞箇報謝の正道を營むのが何より太切である。

參考

○若し百歳の中懈怠にして劣らば、一日の中、勇猛にして、精進を行ぜんには如かず。（法集要頌經）

○設ひ世間に滿つる寶も身命に直ひすることあるなし。（大智度論）

○大恩ありと知りなば、則ち必ず、草鞋の命を徒らに、零落せしめず、如山の功德を慇懃に報ずべし、是れ即ち行持なり、此行持の功は祖佛として、行持する吾あり。しなり。（承陽大師）

○人主として引頸就刃（太宗四祖禪師の道風を慕ふて、招き玉ふに、三返共に辭す、師自若たり太宗益々慕ふと、）して身命を惜まざる人物をも、猶ほ欵慕するなり、是れ、徒らなるにあらず、光陰を惜み、行持を專らにするなり。（同）

○大禹は聖人なるに乃ち寸陰を惜む、衆人に至りては、當さに分陰を惜むべし、豈に逸遊荒醉すべけんや、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなきことは、是れ自ら棄つるなり。（陶侃）

○人生は白駒の隙を過ぐるが如し。（莊子）

○尺の璧を貴ばずして、寸の光陰を貴ぶ。（文中子）

○汝生命を愛するか、然らば時間を浪費すること勿れ、時間は生命を作る所の材料なればなり。（ブーアー、リチャード）

○我が務を了り、我が生を完うせん。（ブラウニング）
○過去は拂拭せよ、未來は信賴せよ、而して光榮の今に生活せよ。（エリザベス、タウレ）
○一度失ひたる時間は決して再び得べからず。（ブーアー、リチャード）
○よきことは人にも敎へ我れもせよ是ぞまことの人といふなり。（よみ人しらず）
○徒らに過す月日はおほけれど道をもとむる時ぞすくなき。（承陽大師）
○徒らに通る月日と思ふなよ命をせむる使なりけり。（古歌）
○世の中は今日より外はなかりけり昨はすきつあすは知られず。（古歌）
○曇りなき世の光りにや春日野の同じ道にも尋ね行くらん。（上東門院）
○きのふといひ今日とくらしてあすか川流れて早き月日なりけり。（紀貫之）
○けふみれば春は短かし衣更。（祇德）

三十二　即心是佛（修證義第三十一節）

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり是れ即心是佛なり、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん。

此贊題の御文は修證義最終の一節て、佛法の肝要收めて此に在りとも謂つべき甚深の妙義を御開示下されたる太切なる御文章であります、初に「謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり」と云ふは、前節に「一日の行持是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり」とある御語を承けての御示しぢや、申す迄も無く佛樣と申しても、釋迦牟尼如來あり阿彌陀如來あり大日如來あり藥師如來あり、三世十方の間に無量恒河沙の佛が在ますれど、畢竟して唯だ釋迦牟尼佛御一方の外には無いと心得るが宜い、經家にては佛の御身に法身と報身と應身との三通りあり、佛の國土にも、寂光土、實報土、方便土、同居土の四通りありと立てる、而して釋迦牟尼佛は應身佛にして且つ同居土の佛樣ぢや抔と說く向もある、ダガ我宗にて釋迦牟尼佛を御本尊として戴き奉るのは、「釋迦

牟尼佛は法界の教主なり」として信仰し奉るのであります、抑も佛の御徳は廣大にして邊際なく恰も虚空の如きものである、虚空に東西南北の隔て無きか如く、佛の御徳にも時間空間の上に微塵も隔ては付けられぬ、故に大なる心を以て信ずれば大なる佛を感得じ小さき心を以て信ずれば佛も亦た小さくなる、法報應の三身と區別すると も三通りの佛樣があるのでは無い、乃ち一身の上の三徳であるのぢや、一箇の佛樣を三方面から拜んだ上の名字に過ぎぬ、法身とは佛の體、報身とは佛の徳の顯はれた相、應身とは衆生の根機に應じて現はれ玉ふ作用の姿である、一口に申せば佛の心が法身、佛の徳が報身、佛の妙用が應身であて、三即一である、譬へて見れば此處に一塊の黄金がありとせんに、黄金其物の自性が法身で、黄金の世に超えて麗はしき相、燦爛たる光りが報身、それを頸飾とか時計とか指輪とか盃とか云ふものに製して箇々各別の作用あるのが應身であります、黄金は頸飾なり黄金は時計なりとは言はれまいが、其頸飾や時計が其儘黄金であるには相違ないであります、して見れて三身は即一體、一體が即三徳と云ふことになる、そも釋迦牟尼佛は何を以て萬徳圓滿の佛と爲り玉ひしかと云ふと、今時の語を借りて申さば、宇宙絶待の眞理を究め盡

して萬古不易の大道と一致の境界にならせられたのである、此眞理には自分と他人との分界は無い、此大道には昔と今との區別も無い、さすれば釋尊御一方の御身は既に古今に通じ十方に徧ふして居らせらるゝ、故に佛樣の心地上は、從來の煩惱妄想を斷じ盡して、一點の汚れをも留めざる清淨法身てある、是を人格的に法身と稱し修養上からは斷徳と稱したのてある、凡情一度離るれば智徳自から備はり玉ふ、是を報身とも智徳とも云ふ、是の如く智徳全く備はる時は、佛性常住の孝順心慈悲心の徳が現はれて自然に機に應じ緣に隨ひ、任運に神通妙用を現はし玉ふたのが應身とも恩徳とも稱するのである、是れ則ち佛の三身三徳てあります、然るに三身の內強て優劣を爭ひて、此佛を重んじ彼佛を輕んずるが如きは、文に依て義を解する上より生じたる妄想と言はねばならぬ、古歌にすら「釋迦阿彌陀地藏藥師と名はあれど同じ心の佛なりけり」とある、佛の心には輕重親疎の別は無いです、華嚴經には「佛身は法界に充滿し普く一切衆生の前に現す、緣に隨がひ感に赴いて徧からずといふと無し而も恒に此菩提座に處したまふ」とあります、佛の御身は法界に充滿しましますは身を千百億に分ち玉ふ、是れ乃ち應

身てある、而も常に此菩提座に在て大智慧大光明を現じ玉ふ、是れ乃ち報身てある、三身ありと雖も竟に是れ一佛身てあります、殊に釋迦牟尼佛と申す御名が萬德總持の御名號ぢや、釋迦は梵語茲に能仁と譯す、能仁とは大慈悲心の德號です、牟尼も梵語此に寂默と譯す、寂默とは大智慧の德號てす、文字の上から申せば、寂は身と意とに於て諸〻の過患なきこと、默とは口に於て諸の恐爭なきことてす、佛は般若の大智慧を成就し玉ひ、以て一切の煩惱を離れ生死の繫縛を脫し、身口意の三業に於て、純善無漏の妙德を顯はし玉ふが故に寂默と云ふのてある、斯樣に大慈悲と大智慧との二の德が圓滿にならせられたのが佛樣てあります、我等御互が佛樣を御本尊として御歸依をするのは、即ち此大慈悲光と大智慧力とに歸依し奉るのてある、此御歸依の功德は自づから佛の大慈悲と大智慧とを感得して、之と同時に我等が本來具有する大慈悲大智慧の德を現はすことゝなる、一切の衆生は一として佛樣と平等の大慈悲大智慧を有せざるは無い、唯だ妄想煩惱の爲めに種々の惡業を造り、業力の致す所自ら三界六道生死の繫縛を招ぎ、邪見の暗常に蔽ひ苦惱の夢永く覺め難いのてある、此夢を覺まし此暗を拂ひ、我身は即佛の身なり我心は即佛の心なりと云ふ境界に至らしむるのが、佛敎の目的てあります、故に釋迦牟尼佛を拜むと申しても、必ずしも三千年前の歷史を探し廻れよと云ふのでは無い、常住不滅の佛身に歸依し、我等の三業をソックリ佛の三業と爲すのてある、ソコて次の御文に「釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり」と仰せられたのてあります、即心是佛とは御互の此心がソックリ佛なるぞとの御敎ぢや、さればと云ふて我等凡夫が朝から晩まて惜い欲い惜い愛いの煩惱に使はれて、利己一點張の欲垢に染つて居るのを直ぐ佛樣ぢや抔と思ふては飛んても無いことになる、併し此心をも捨て此身をも捨てゝ空々寂々となるのが佛ぢやと思ふても大間違てす、こゝが最も大切なる處ぢや、譬へば如何程奇麗な水があつても、若し一滴の毒が其中に入て居れば、毒さへ取り除ければ水は我等の命も同然て、一刻も之れなくては叶ひませぬ、御互の心も身も本來清らかなる水の如く、智德圓滿の佛樣てある、のぢや、唯だ惜い事には三毒煩惱の毒の爲めに永く三惡道の巷を狂ひ廻つて居るのてある、其煩惱の毒さへ無くなれば、此心身の其儘が佛の種子、眞理活動の生命てある、どうすれば其毒が取除けられるかと云ふに別な事は無い、此修證義の四大原則たる懺悔滅罪受戒入

位發願利生行持報恩、是れ乃ち最善最勝の法門てあります、其四大原則も畢竟修證の二を出てぬ、修證の二は本より吾人の一心を離れたものでは無い、此心が乃ち本證の徳を生じ妙修の功を現はすのぢや、是を即心是佛と申されたのであります、次の御文に「過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛となるなり是れ即心是佛なり」とあるは、過去現在未來の三世に出現ましますの諸の佛は、其數も亦た無量無邊てあるから、御發心の因緣や御修行の狀態は、其時代と境遇とに依て多少異なる趣もあれど、彌々成佛遊ばさるゝのは、能仁と寂默との功徳を成就せらるゝ力に依るのてある、故に三世の諸佛は覺に一の釋迦牟尼佛に歸し、其釋迦牟尼佛は即心是佛なりて此一心に歸するのてある、華嚴經には「一一心念の中に無量刹を出生し、佛の威神力を以て悉く淨ふして無垢なりと見せしむ」又「衆生法器に非ざれば諸佛を見奉ること能はず若し心樂の者あれば一切處に皆見る」とありて、三世無量の諸佛は一念心より出生し、十方無量の淨土も亦た一念心の現はれならざるは無い、又同經に若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心造なりと觀ずべし」と云ふ御文がある、是を破地獄の文とも稱して、至心に此文を讀誦する時は地獄

を打破る程の功徳があると云ふことぢやが、其意は十方法界は皆自心現の相にして我心を離れて佛なく諸法なしと明らむる時、始て三世一切の佛を見奉り、又其大慈悲大智慧を覺ることが出來るぞよとの御示してありまする、徒らに佛に對して揀り嫌ひは致しませぬ、異宗の御文にも「諸佛菩薩と申すとは、佛のためには本師本佛なるが故に、阿彌陀一佛に歸し奉れば、すなはち諸佛菩薩も、阿彌陀如來御一佛の中にこもれるものぞと信ずるのてある、我宗に於て釋迦牟尼佛を拜し奉るのも亦た是の如く、釋迦牟尼佛は三世十方の諸佛諸菩薩の本地法身なるを以て、釋迦牟尼佛に歸依し奉るのが取も直さず三世十方の諸佛諸菩薩に歸依し奉ることゝなる、觀佛三昧經には「若し我名を稱して諸佛に南無せば、獲る所の福徳無量無邊なり」とありて、釋迦牟尼佛と稱ふる御名の中に諸佛に歸依する功徳が具つて居る、故に承陽大師は「十方の諸佛を見たてまつるべくば、釋迦一佛を見たてまつるべし」と仰せ下されてある、さすれば釋迦牟尼佛は、

三身具足の功德聚、三德總持の妙體として信仰し奉るのであります、而して其釋迦牟尼佛感應の御光りは吾人信仰の一念心に輝きを起すのであるから、信仰の一念心を離れて外に佛は無い、そこを、「釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり」と御示し下されたのです、最後の御文には「即心是佛といふは誰といふぞと審細と參究すべし正に佛恩を報ずるにてあらん」とありますが、實に御親切なる御敎化ではありませんか、即心是佛といふ事は決して空理でも無く空論でも無い、又佛菩薩や智者學者の上のみの事でも無い、然らば誰の事ぞと審細に參究し盡して見よ、皆人々分上の事では無いか、我等御互が熱いと知り寒いと知り嬉しいと思ひ悲しいと思ふ底の心、此心の其儘が即心是佛であるのぢや、此事が解らぬ時は佛法はイツ迄も自分の物にはならぬ、徹底此意を信ずることが出來れば、八萬四千の法門も我等の所有物である、商人が商業するのも農民が田畑を耕すのも、ソックリ佛法の妙用となる、此境界に至りてこそ佛樣や祖師方が難行苦行して佛法を御傳へ下された甲斐があると云ふもの、故に「正に佛恩を報ずるにてあらん」で、此時始て眞實の佛恩報謝が出來るぞと仰せ下されたのであります。

昔し釋尊が一夏九十日の間、忉利天に御上りなされて母親摩耶夫人の爲めに御說法遊ばされたことがあります、彌々娑婆世界に御返りと云ふ時國王長者等が盛んに御歡迎申上げた、唯だ須菩提尊者のみは御迎もせず、獨り石室の中に在りて一心に般若の理を觀じつゝ所謂即心是佛の參究に餘念もあらざりし、其折蓮花色比丘尼が一番最初に釋尊に御目に懸る事を得たれば、之を無上の光榮として大に喜び、吾こそは第一番に如來を見奉れりと申されける時、釋尊は否汝の我を見たるは第二番に屬す、須菩提こそ第一に相見しつるぞと仰せられたと云ふ因緣がある、誠に貴とき御話してはありませんか、蓮花色比丘尼は佛の御身を拜んだので、須菩提尊者は佛の御心を拜まれたのである、又蓮花色は肉眼を以て佛を見奉り、尊者は心眼を以て佛を見奉られたのであります、又昔し江戸時代の俳人法眼不角の妹に妙船と云ふ人がありました、京橋槇河岸松村半兵衛の母にて非常なる篤信家であつた、晩年家に在り乍ら尼僧と爲り出家の勤行をして居られた、朝夕御佛壇に向て怠らず看經せしが、後に至り看經の度毎に佛壇の上より一道の光明が輝いて妙船の頂を照らすことを感得し、それが何人の目にも見えるので一道奇異の思ひを爲し、是れ、全く妙船信仰

の奇特なりとて近邊の人々迄が競ふて特々拜みに來る樣になつたぢや、然るに妙船は却て之を憂へ、一介の凡夫たる我等が如何程看經すればとて斯る不思議のあるべき筈は無い、好し看經の力能く諸佛の感應を被むるとするも、そは我心と行との上に現はるべきものにして、有形の光明抔を以て奇特と爲すべきに非ず、思ふに是は我をして增上慢を起し眞正の信心を失なはしめんとする惡魔の所爲なるべしとて、其後は光明の現はるゝ毎に一層精力を込めて看經を致したさうぢや、或時例の如く看經の最中に光明を放ちければ、それ又た惡魔奴が我志を撓亂すぞとて、益々氣を勵まし聲を揚げて一心に讀經しければ、怪しや佛壇の上に當りて只ならぬ響が聞へた、それつと云ふので二階を穿鑿せしめげるに、忽然として一疋の老たる狐が佛壇の上より飛び出し、家根傳ひに何地へが遁げ去つたが、其後は更に光明の不思議は無かつたと申すことであります、何か常談を以ては判斷の出來ぬ樣な事のあるのが、佛法の靈驗ぢや抔とウッカリ思ひ込むと、飛んでも無い喃着を受くることがあるものぢや、妙船が一時の奇特に迷はずして我心地上に佛を求め法を修めたるは感ずべきの至りである、さればとて靈驗を客觀的に求めてはならぬと云ふのでは無い、又決して佛法に不思議なしと斷ずるのでも無いが、佛法の一大事は即心是佛に承當し去る所に存するのである、徹底即心是佛と信ずる時は、佛には生死なく煩惱なきを以て、此身と心との儘がソックリ生死解脫である、此身と心とがソックリ釋迦牟尼佛の身と心となるのである、十二時中の起居振舞がソックリ釋迦牟尼佛の大慈悲大智慧となりて、自を度し他を度し國家を益し社會を賑すのである、是に於てか始て眞實の行持が現はれて、茶を喫み飯を喫し算盤を彈き鋤鍬を持つも皆佛祖の行持ならざるは無いのである、唯恨むらくは無始の煩惱我心を蓋ひ三業の罪障我身に纏はり、六道の夢永く暗く八苦の醉覺むること甚だ難いぢや、今や幸に曹洞正傳の佛法に遭ひ奉り、懺悔の慈門に投じて立ろに罪根を消滅し、受戒の盞に上りて忽ちに佛位に同入し、更に利生の願力を起して一擧一動能く慈悲の光りを放ち、日々の行持を勵みて此身心を擧げて能く報恩の德を全ふすると云ふ、甚深微妙の因緣を結ぶと申すは、喜びても猶ほ餘りある身の上ではありませぬか、是れ皆諸佛弘誓の大願力、釋尊傳授の妙法力に依るものなれば、深くも諸佛とは釋迦牟尼佛なりとの御敎導を信じ奉りて、三德具足の標示たる釋迦牟尼佛の妙德鴻恩を感謝し寢ても寤ても即心

是佛の妙德を顯現せんとの志を忘れてはなりませぬ。

參考

○菩薩いまだ成佛せざる時は、菩提を以つて煩惱と爲し、成佛する時は、煩惱を以つて、菩提と爲す、何を以てのゆゑに、第一義（結局のところ）に於て、二ならざるがゆゑに、諸佛如來、乃至、一切法、如（佛も衆生も、もとないものてない）なるが故に。（仁王般若經）

○衆生は即ち菩提、菩提は即ち衆生なり、之を知るを世間と爲す。（諸法無行經）

○いはゆる佛祖の保任する即心是佛は、外道二乘のゆめにもみるところにあらず、唯佛祖與佛祖のみ、即心是佛しきたり、究盡しきたる聞著あり、行取あり、證著あり。（承陽大師）

○即心是佛とは、發心修行、菩提、涅槃の諸佛なり、いまだ、發心修行菩提涅槃せざるは、即心是佛にあらず。（同）

○宇宙便ちこれ吾が心、吾が心これ便ち宇宙なり。（陸象山）

修證義說教軌範終

○迷と悟とは一心にあり、人欲深く、無明の雲厚く、心月の光、幽かにして暗の夜の如くなるを迷ひの心といふなり、學問修行の功積んで人欲清く盡きて、無明の雲晴れ心月の靈光明かに照すを悟りの心と云ふ。（中根東里）

○人は天地の心なり、天地は人の身なり。（中江藤樹）

○予は只勤勉と積累とによりて吾が業を成就したり。（ダルトン）

○思想の進む所は宇宙自ら戸を開き、人をして其豐富と其玄妙とを觀、且つ樂ましむ。（ヘーゲル）

○宇宙は活動なり、其組織は汝の腦中のものと同一なり。（バウルセン）

○佛はと問へば迷はぬものそなきおのが心と知る人もかな。（無難禪師）

○我心其儘ほとけいきほとけなみをはなれて水のあらばや。（古歌）

○濁りなき心の水にすむ月は波もくだけて光とぞなる。（承陽大師）

○露の身のまだ消えぬより心こそ花の蓁にまづやとりぬる。（頓阿法師）

明治四十二年四月七日印刷
明治四十二年五月三日發行

修證義說教軌範奥附
定價金壹圓

編輯者　北越戒定
編輯者　內田吟龍
發行者　東京市芝區露月町十八番地　今村延雄
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　太田音次郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許複製

發行所　東京芝露月町　振替口座貳九七九　電話新橋三千廿七　鴻盟社

賣捌所　東京。佛教館。森江本店。森江分店。光融館。前川文榮閣。東京堂。京都。貝葉書院。出雲寺。大阪。積文社。

明治四十二年五月七日印刷
明治四十二年五月十日發行

修證義說教軌範奥附
定價金壹圓

編輯者　北越戒定
編輯者　內田吟龍
發行者　東京市芝區露月町十八番地　今村延雄
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　太田音次郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許複製

發行所　東京芝露月町　振替口座貳九七九　電話新橋三千廿七　鴻盟社

賣捌所　東京。佛教館。森江本店。森江分店。光融館。前川文榮閣。東京堂。京都。貝葉書院。出雲寺。大阪。積文社

護法

▲毎月一回十日發行▼

▲定價送料共一ヶ年分八十錢▼

傳道

▲毎月一回一日發行▼

▲定價送料共一ヶ年分廿四錢▼

道の枝折

▲毎月一回五日發行▼

▲定價送料共一ヶ年分廿四錢▼

▲本誌は曹洞宗の教義を中心としたる布教雜誌也

▲本誌は毎號諸大家の摸範的演說講話を掲載す

▲本誌は社會諸種の雜誌中に於ける有益の記事を抄錄して參考に供す

▲本誌は附錄として『通俗釋迦牟尼傳』を毎號掲載す

▲本誌は本年七八月頃より大內青巒居士の『維摩經講話』を掲載すべし

▲本誌は通佛教主義の施本用雜誌也

▲本誌は大內青巒居士を始め教界社會諸大家の講話を掲ぐ

▲本誌は體裁優美にして全文總ふりかな附也

▲本誌の發行部數は佛教界數十種の雜誌中に於て第一位を占む

▲本誌は純曹洞宗主義の施本雜誌也

▲本誌は主筆新井石禪老師の講話を毎號掲載す

▲本誌は全篇平易通俗の文を以てし加ふるに總ふりかな附なれば何人にも讀み易く解し易し

發行所　東京市芝區露月町　振替口座貳九七九　鴻盟社

佛學者必讀書目

著者	書名	冊數	定價	送料
大內青巒	碧巖集講話	洋裝全二冊 和裝全四冊	定價金四圓五十錢	送料各十六錢
來馬琢道	通俗佛教各宗綱要	全一冊	定價金壹圓五拾錢	送料金十二錢
境野黃洋	日本佛教史要	全一冊	定價金壹圓	送料金八錢
境野黃洋	印度支那佛教史要	全一冊	定價金壹圓	送料金十二錢
村上專精	佛教講論集	全一冊	定價金壹圓五十錢	送料金十六錢
大內青巒	坐禪儀講話	全一冊	定價金廿錢	送料金四錢
新井石禪	曹洞宗要法話	全一冊	定價金三十錢	送料金四錢
弘津說三	承陽大師聖教全集	全三冊	定價送料共未定	
經豪禪師	正法眼藏御抄	全二冊	定價金五圓	送料金廿四錢
藏海和尚	正法眼藏私記會本	全二冊	定價金五圓	送料金廿四錢
黃泉和尚	正法眼藏涉典續貂	全六冊	定價金參圓	送料金十六錢
	正法眼藏 和語梯闢邪訣 合本	全一冊	定價金三十錢	送料金四錢
	正法眼藏 道心卷 三時業卷 歸依三寶卷 私記	全一冊	定價金十二錢	送料金貳錢
	正法眼藏 行持卷 佛向上事卷 私記	全一冊	定價金廿錢	送料金四錢
	曹洞五位顯訣	全一冊	定價金卅錢	送料金四錢
	五位顯訣元字脚	全一冊	定價金四十五錢	送料金四錢
西有禪師	學道用心集提耳錄	全一冊	定價金五十錢	送料金六錢
西有禪師	禪戒抄講話	全一冊	定價金七十錢	送料金八錢
西有禪師	禪戒訓蒙	全一冊	定價金廿錢	送料金四錢
西有禪師	辨道話講義	全一冊	定價金廿錢	送料金四錢
西有禪師	西有禪話	全一冊	定價金廿五錢	送料金六錢
畔上禪師	坐禪用心記落草談	全一冊	定價金三十錢	送料金六錢
畔上禪師	十種疑問落草談	全一冊	定價金十五錢	送料金四錢

釋宗演　**信心銘講話**　全一冊　定價金十五錢　送料金四錢

大內居士　**禪學三要**（參同契資錢三昧五位說誹義）　全一冊　定價金三十錢　送料金四錢

來馬琢道　**禪學活問答**　全一冊　定價金廿五錢　送料金四錢

忽滑谷著　**禪學批判**　全一冊　定價金三十五錢　送料金四錢

鰲山道人　**四節引導**　全一冊　定價金四十五錢　送料金八錢

大內居士　**禪學大意抄**　全一冊　定價金五錢　送料金貳錢

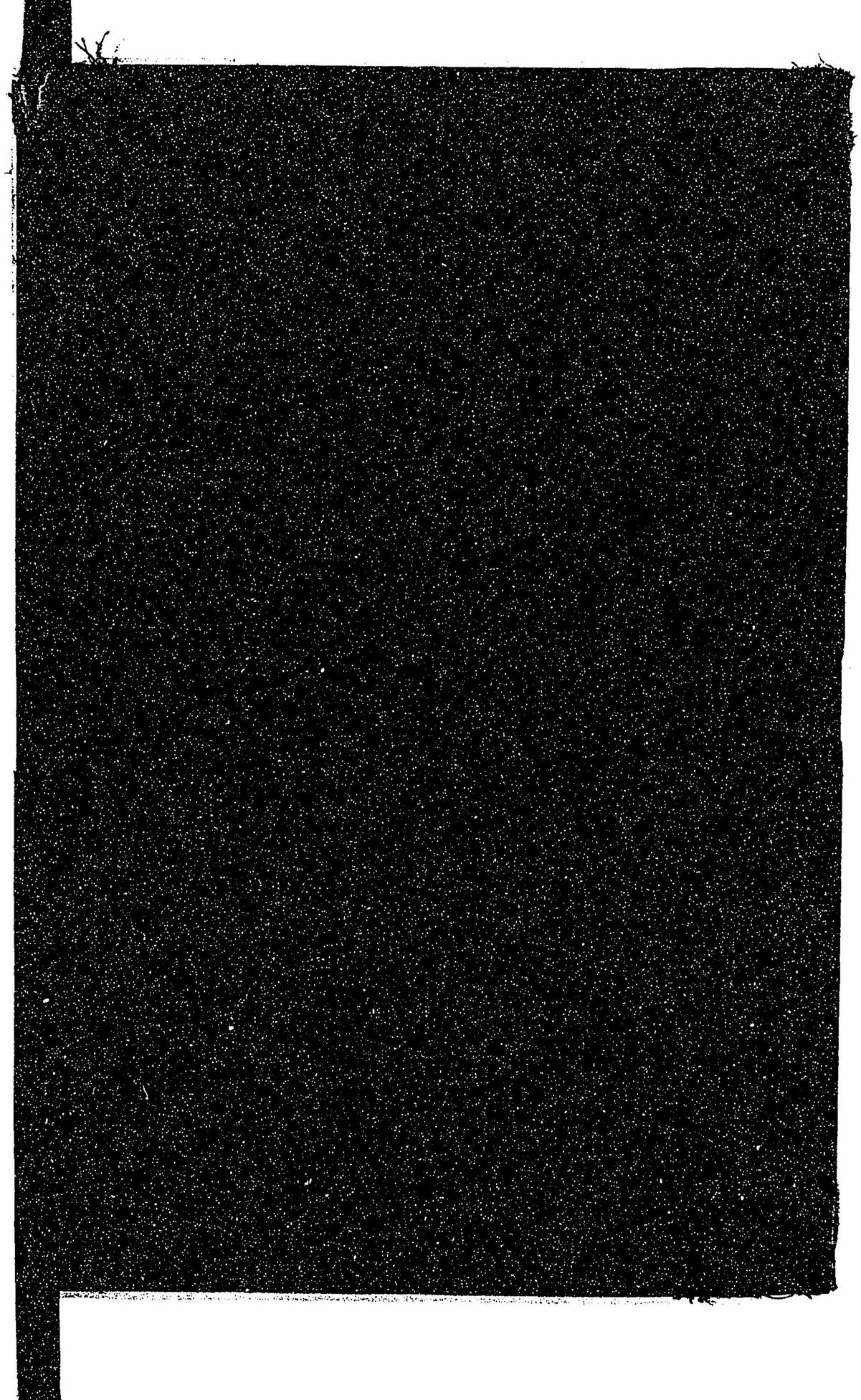
鷲尾順敬　**禪宗史要**　全一冊　定價金十五錢　送料金二錢

現代名家　**禪學評論**　全一冊　定價金五十錢　送料金八錢

新井石禪　**修證義說教軌範**　全一冊　定價金壹圓　送料金八錢

來馬琢道　**禪門寶鑑**　全一冊　定價金上八十七錢　送料金十五錢

大內居士佛教主義　**戊申詔書衍義**　全一冊　定價金十五錢　送料金十貳錢

發行所　東京市芝區露月町　振替口座貳九七九　電話新橋三千廿七　鴻盟社

1524
152